
黄昏をとどめて

溝部 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏をどじめて

【Zコード】

Z6875Y

【作者名】

溝部 成

【あらすじ】

「君と僕の好きは、違うすぎるよ」

内憂外患により崩壊しつつある帝国。

かつて国首と呼ばれ、繁栄を謳歌した青家一族の末娘エンジュは、西部戦役の和約のあかしとして、西家の公子ソウセツと婚約し、辺境へ向かう。

年も育つた環境も大きく違う相手に、戸惑うが…。

一方、皇宮では皇位継承をめぐる対立から、大きく政局が動こうとしていた。

空を大鳥が旋回している。

遠く、幟がいくつも翻る城塞。見渡す荒野。

草はほとんどなく、遠い地平まで赤い土に埋め尽くされている。

曇天だ。雲が厚く立ちこめる。

激しく風が吹きつけ、吹雪のような音を立てた。人の泣き声のようにも聞こえる。

砦は鉄の厳めしい大門で固く閉じられ、見張りが壁に等間隔に配置されている。

戦場だ。

「お前はここで補給の指揮を」

大柄な体を曲げるようにして、男は狭い戸口で振り返った。堂々とした体躯の青年だ。

ずいぶん士にまみれてはいたが、彼がまとっているのは紛れもなく絹の白い軍装で、左手には大ぶりの実用的な刀剣をもっている。唯一の装飾品は額飾りで、白銀の複雑な紋がぬいとられ、中央には涙型の大粒真珠が揺れている。

白は、西家の色だ。

「いいな？」

大らかで人をひきつける笑顔で彼は言った。
外では鬨の声が上がる。

むき出しの石壁に、西からの陽が、うすく光をさし入れる。

「なぜ。…厭だ、わたしも連れて行け」

木の椅子に座つた別の青年が、頑はない子どものように首を振つ

た。

彼の前には部屋の大部分を占める卓が置かれ、書きかけと思しき書類と筆が転がっていた。

振り返った青年とは同年代、そして口調から同輩に見えるが、彼には行軍の将校らしい様相がまったく感じられない。

略式の軍装を身につけはしているが剣は佩かず、長く伸ばした髪を白と赤の組みひもで結わえている。

白い服にも殆ど汚れらしきものは見当たらぬ。そして軍人としては、纖細な面。

その顔は今は怒りで、上氣している。

出て行こうとしていた青年が、苦笑した。

「もう決めんだ、お前はここに残す」

狭い部屋には2人しかいない。

石の壁に沈黙が落ち、兵士たちの士気の昂りが木製の床を通して伝わってくる。

剣を入り口に立てかけ、自分を睨む青年の前までくると、卓上の紙をとりあげて目を走らせた。

口笛をふく。

完璧だな、彼の口がそう動いた。

その行為に、座つたままの青年の眉間に皺がよる。目には剣呑な光がともつた。

「サイカ、わたしの話を聞け」

しかし、サイカと呼ばれた青年は口元に笑みをたたえている。

「おう、でもまず俺の話からだ」

彼は片手を挙げて制止すると、早口に語つた。

「総指揮権は叔父上にゆずつた。俺が連れていくのは、4隊。お前

は居残り」

「だから、なんでわたしがここにいなければならぬ、」

「お前が俺の副官だから」

「だったら、なおのこと」

しかし、サイカの意思は変わらなかつた。

立ち上がるうとする相手をじやれるように椅子に押しとどめ、紙をひらひら振る。

「急襲が俺の担当なら、これはお前の担当」

「まくいつたら、な。

軽口だったが、その言葉に青年は押し黙つた。

薄暗い室の中では、紙の内容も彼の表情もはつきりとは読み取れない。

どうやら、サイカの言葉をしぶしぶ受け入れたらしく、大きなため息を聞かせて、青年は椅子から静かに立ち上がつた。

「吾が友に武運を。勝ちて帰れ」

勝ちて、帰れ。

古くから繰り返されてきた戦士への餞の言葉を、口にする。

「我らの風に、勝利を」

サイカはそう返すと、相手の肩を軽く抱き、部屋をあとにした。

荒野のその地平線。

鉄の鎧で覆われた軍馬が、横列にずらりと並んでいるのが見えた。鈍いてい鉄と、盾を打ち鳴らす音。その数、十万。強い風が、耳元でこうこうと鳴り響く。騎士たちが身につける鎧は鉛色に輝き、兜は十字に切りこみが入れられている。グルジム力の騎馬の軍勢だ。大陸最強と呼ばれる騎馬軍。帝国の西部をおびやかす敵。

大門の前でサイカは合図をして、馬にまたがった。砦の上に、軍旗がひるがえる。幾度も洗いをかけた白。

今日は、戻つてこられるだろ？
サイカは、弱気な自分を嗤うように一度、目を閉じた。
この作戦は、誰が見ても無謀だ。
だが、退路はない。

年若い騎士たちが緊張した面持ちで、彼の号令を待っている。グルジム力の軍はここからは見えない。鋼鉄の軍団に対して、彼らは胸当てと盾で武装しているものの顔をさらしていく、いかにも無防備に見える。

騎士たちが風を呼ぶ祈りの声が耳を過ぎる。
耳慣れた言葉。
武運を願うまじないだ。
西家の部隊の真ん中で、サイカは息をついた。

「若、ソウセツ様は」

老騎士が先頭のサイカの横に馬をつける。

白いあごひげを加えた武人で、彼の剣の師でもあった。タカサキといふ。

「あいつは、置いてきた」

「それはそれは」

サイカの簡潔な返事に、タカサキは声を立てて笑った。

戦場での気負いもない、朗らかな声。

サイカも歴戦の老将に軽口で答える。

「ソウセツに何かあれば、羽鳥が泣く」^{ハトリ} 目線を前へ戻して、続ける。

「敵は怖くないが、妹は怖い」

サイカの周りでひとつ、にぎやかに笑い声が上がった。
行軍を共にした騎士たちだ。

「いよいよですな」

タカサキが揚々と言う。サイカは静かだが、強く頷いた。

「ああ、エテを得て還るぞ」

敵領にある交易都市をあげる。

この西部国境は、隣国グルジムカの侵攻を受け続けている。

戦線は一進一退を繰り返し、特に打つ手もない。

「今こそ、徹底的な打撃を」とえて、蛮族を追い払う。雪が来る前に

巨大な領土や豊かな資源を誇るグルジムカと、この弱小の帝国とは、根本的に持久力が違う。

総力戦ともなれば、長くは保つまい。

グルジムカと半島で隣接した西部地域が一番多くの犠牲を払うで

あらう」とは、簡明な事実だ。

そのまえに。

そうなる前に、敵を大きく叩いておかねばならない。
サイカの聲音は、焦りと氣負いさえ孕んでいる。

「勝つて帰る」

「御意」

「必ずだ」

「いくぞ」

短い掛け声とともに、サイカは馬を走らせた。彼に従う4隊も遅れじと騎首を返す。

100名足らずの奇襲隊。

機動性にすぐれた、年若い騎士たちで構成された臨時の部隊だ。

陽が落ちてから、2隊を本當にぶつけ、その残りで敵軍の裏をかく。

それが、彼らに課された任務だ。

砦に残った叔父とは最後まで相容れなかつた。

「せいぜい、グルジム力の大軍におびえているがいいぞ」「かける陽を追うよつに、馬を走らせながら、サイカは口の中であぶやいた。

北の星が、白く輝き始めるのが合図だつた。

馬のいななき。嵐のような怒号。

整然と並んだ鉄の甲冑の右軍へ、急襲がかけられる。

白い軍勢の中心でサイカが、刀身を頭上に掲げて叫ぶ。

「大地を血で染めよ！我らの風を呼べ！勝利を！…」

圧倒的な大地の震動と、舞い上がる砂塵。

血しぶきと、周りで上がる悲鳴。引きずられそうになる、生々しい戦場の様相。

彼は、集団の陣形を解き、果敢に敵の中へ馬を走らせていく。

相手のふるいかぶつた剣を見事な綱さばきでかわし、踵を返す。

そのまま相手の喉へ刀を突き出す。血が彼の顔を染める。

息つく間もなく、後方からも敵が刀を振るつてくる。サイカは渾身の力で相手を突き返し、軍馬に剣を突きたてた。

馬の悲鳴。棒立ちになつた馬から相手は勢いよく投げ出され、その期を逃さず、彼は短刀を相手の喉元に正確に突きたてた。

サイカはほう、とため息をつき乗馬したまま屈みこみ短刀を抜き取ると髪をかきあげ、口元についた血をなめた。

「おのれ、白い幽鬼め！」

大陸西方訛りの罵りが聞こえ、横手から彼のもとへ斬り込んでくる。

強い怒りとともに繰り出された刀は重く、打ち合いは数度続く。

しかし、サイカの剣の腕の方が優れて速く、相手は喉元に刃を受けて馬から滑り落ちた。

サイカは肩で息をつくと、血に濡れた刀を振った。
そのときだつた。

背後から風をうなるような音が響き、強い衝撃とともに振りかえ
る間もなく、どうつと矢が突き刺さつた。

サイカはその勢いのまま、馬から滑り落ち、前に倒れるように両手を地面につく。

赤い砂煙と、周りの怒号が一瞬、止んだ。

衝撃に痛みが加わる。

背がもえる。

燃えるよつに熱い。

は、と彼は声を出すよつに息を吸つた。

吐き出す息とともに、口から鮮血が溢れる。

とつさにサイカは口元を押さえたが、次に吸つた息はすぐに咳にかわつた。

まだ、…まだだ。

まだ、終わつていない。

苦しい息の中で、彼は胸元から白い布を引っ張りだした。

明らかに武人の持ち物ではない、纖細な布地。ハンカチだ。銀糸で花の刺繡が縫いとられている。その、ひと針ひと針を確認するよう

うに彼は指先で撫で、口元におしあてた。

「羽鳥…」

約束が、という言葉を風が拾う。

タカサキが、叫び声をあげながら、馬を走らせてくるのが田に入つた。

ああ、すまない…彼は胸をつかれるような痛みとともに、暗闇に身をゆだねた。

誰かが呼んでいるような気がした。

蠅燭のほのおが揺れる音がし、エンジュはまつと皿を開く。どうやら、うたた寝をしていたらしい。

幾度かまばたきをすると、徐々に意識がはつきりとして、頭の後ろが重く痛んだ。

開いたままの分厚い装丁の本を閉じると、エンジュは机に突つ伏した。

「エンジュ様、エンジュ」

その声で、もう一度彼女は我に返った。

「なあに、」

あわてて手すりに寄つて、階下をのぞく。「ウヒだ。

「もうすぐ終わります。いつもつき合わせて、『めんなさいね』『ウヒは、』彼女が寝ていたことを見抜いたらしい。しかしを見上げる顔は微苦笑を浮かべている。

エンジュはきまり悪くなつて、机の本を脇にかかえると、古びたはしごを細心の注意を払つて降りた。

分厚い硝子の天窓からは薄く光がさしこみ、はしごは一段を踏むことにきしきししなり、埃が舞う。

エンジュは最後の段から石床におりると、まつと息をついた。確認するまでもなく、年月と湿氣によつて、はしごは根元から腐りつつあった。

それだけではない。

石床は、一部が隆起、陥没し、土が見えている部分もある。

「もう上にあがるのは、およしくださいな」「あなたがケガしないかと、ひやひやします。

「ウヒは心配顔で、ため息をついた。

「でも、上の棚にしか物語が置いてないのだから、エングジューは、にっこり笑つて手に持つた本を見せた。

孤独な竜と美しき姫巫女の恋物語である。

この国の者なら、幼い頃に一度は寝物語に聞いたことがあるだろう。誰でも知っているおどぎ話だ。

「あら『竜と姫君』。懐かしいわ。そんなのも、ここにありますね」

装丁の美しい表紙をのぞきこんで、感心したように「ウヒは言へ。エンジューは、曖昧にほほ笑んだ。

これは、ただのおどぎ話ではないかもしれない、そうウヒに聞いたから、なぜか喉の奥に言葉がつかえた。

裏表紙には、英秀王エイシュウウの御世の年号が刻まれていたが、作者の記名はなかつた。

今から250年も昔に書かれた本だ。

段の上の史書に紛れるようにして、置かれていたのを見つけたのだ。

ぱらぱらとめくつただけだが、乳母たちに聞いた物語よりよっぽど詳しく書かれているようだ。

ぼんやりとそんな物思いにふけつていると、ウヒが嬉しそうに話を継いだ。

「ここには本当に、さまざまな文献があつて、素晴らしいですわ」勿論、ここには重要な外交文書やいにしえの法令、史書が眠つている。

「ウヒと禁を破つて入つた、青家の古文書庫なのだから。

ここに置いてあるのは、大半が原本であり、重要な法文書である。ただし、その多くは虫にくわれ、黴におかれ、判読することも難しい。

青家が有り余る富を支配していた頃、いや、『国首の君』と呼ばれ権勢に酔つたころには既に、法書など見向きもされなくなつていたに違いない。

風雨にさらされ、朽ちるにまかせた古い禁書庫など、訪れる者とてない。

ある日エンジュが割れ窓から書庫への出入りを見つけたことと、彼女の家庭教師であるコウヒが学院で歴史を専攻していたことは、偶然だったと言えよう。

エンジュはコウヒと、書架に文献を並べ直しながら、机いっぽいに散らされたメモに目をやつた。

書きなぐりの省略記号ばかりで、エンジュには意味が分からぬながらも、じつやうり収穫があつたらしくことは、コウヒの表情で分かる。

「今日は何を調べていたの？」

「貿易の收支報告です」

280年前の交易の様相にはまだほど遠いですが、ヒコウヒは語つた。

彼女は、最高学府である国学院に籍をおいている。

『専門化はよろしくない。よい研究者というのは、満天下のあらゆる歴史事象に対応できなければならぬ』

師である高名な歴史家ジケイは、つねづね政治的、外交的、制度的、叙述的な出来事記述の歴史を否定しているのだといふ。

弟子であるコウヒたちにも、それは求められている。

未来志向の歴史学を推進することを。

彼女が選んだのは、縦糸に鎮国といつて貿易の転換期を、横糸に人物をとるという手法だった。

「どれくらい進んだ？」

「6頁、といったところです」

読み進めている文書は、古語で書かれており、なかなか思うようには進まない。

コウヒは先は長い、とばかりに肩をすくめた。

エンジュは、微笑をもらしてしまってそうになり、とつと吐息にかえた。

「ウヒが青家にいるのは、研究のためだ。ここには当時の外交文書が山のように残っている。

エンジュの父が寄宿を認める代わりに、彼女に提案したのは、末娘の家庭教師をすることだった。

「ずっと居てくれればいいのこ」

「何か言いましたか？ エンジュ様」

「いいえ、何も」

とつさにエンジュは首を振る。うつかり本音を聞かれてしまつとこうだつた。

取り繕つよつて、重くて破損しやすい書物を本棚に戻す作業に、気持ちを切り替える。

そのときだつた。

耳元で風が髪をふわり、ともちあげる気配がした。

さわさわと木々がざわめくのが、割れた窓越しに見える。

『…でいるわ…はやく…もどりなきや…』

さわやくよくな、笑い声のよつな、軽やかな声が聞こえる。風の知らせだ。

エンジュは外に視線を向けた。

遠くに、回廊を早足でゆく侍女たちが見えた。エンジュを探しているに違いない。

「戻りましょか、」

「ウヒも理解したらしい。荷物を手早くまとめる、内鍵を開け

て書庫の外へ出た。

彼女が出たことを確認してから、エンジュは内側から鍵をかけ直す。そして割れた窓辺から、外へ出た。

入るときは、この手順が反対になる。

ここは禁じられた書庫である。鍵のありかをエンジュは知らない。年齢より小柄で瘦せているエンジュには、窓からの侵入が可能だが、「ウヒはそうはいかないのである。

出るときに窓枠で、首と足をひっかけ、いつまでこれが可能なのか、エンジュは物語を胸に抱きかかえながら、自問自答した。

「姫、どうしておこででしたか」

空気を張るような、凛とした声が響いた。

エンジュは慌てて本を閉じ、振り返る。

まなじりをつら上げて立っているのは、彼女の教育係であるオノセだ。

白いかんばせ。一部の隙もなく髪を結いあげ、流行りの形に複雑に結ばれたえび茶色の腰帯。いつも通り、完璧な装い。

「どうも」

エンジュはそっけなく答えた。

「わたくしが何度も申しあげていますよ」、アリス

あとの言葉を引き取って、エンジュは続けた。

「父君のこの邸で、外をうろついた歩き回つてはならない、でしょ？」

「どうでも、どうぞいます。御身に危険が及ばぬようになりますのが、わたくしのつとめ」
「退屈な仕事ね」
「…また、「ウヒ様と一緒に出かけられたのですね」「図書室に行つていただけよ」「探しに行かせましたが、侍女たちは見つからないと戻つてきましたわ」「本を探していた時だったのよ、きっと」「明りを消して、ですか？」

ばれている。

エンジュは、唇をかみしめた。禁書庫に入つたことだけは、知られるとまずい。

「じゃあ、休憩に外に出ていたのよ」

「コウヒ様がいらしてから、姫はかわりましたわ」
以前は、嘘をついたりはなさらなかつた…。

その言葉にエンジュは、オノセを睨みつけた。

「オノセは、コウヒが嫌いだものね」

「そんなことを申し上げてこのではありますん」

「じゃあ、何なの」

「の方は、」

そこまで言って、はっとオノセは息をのみこんだ。

エンジュには彼女が言葉をのみこんだ理由を知っていた。知つていたから、不機嫌に別の話題をふる。

「私たち、今にここで埃にまみれて、死んでしまうわ。何もすることができなくつてね」

「そんなことはありませんわ」

オノセは囁んで含めるように続ける。

「美しく整えられていますもの、お部屋も調度も」
かみ合わない言葉に、お手上げだと、エンジュは天井を睨んでため息をこぼした。

確かに、この邸も部屋も豪奢で美しい。

父の権勢があまねく国中から、一級品ばかりを集めているのだから。

「あなたは、美しいものに囲まれていたら、満足なのでしょう」

滑らかな漆塗りの文机、瀟洒な紋様が施された椅子、天井から掛

け下ろされた濃い藍絹や薄衣。

身の周りの物は、オノセの趣味で選ばれている。

「まあ、美しいものが一番じゃありませんか。他に、どんな基準がおありだと？」

美しく整えた眉をあげて当然のよう、「ひ返されれば、返事のしようもない。

「男に生まれたかったわ」

エンジュはむつりと文句を言つ。

「なんてことを。お父君がどれほどあなたに贅沢を許しておいでか、存じでしょ！」

オノセは首を振る。

紅や絹に人生のすべてを奉げているとも云ふ彼女には、到底信じがたい言葉なのだ。

「兄君のよう、ここを出たい」

口から出たら、その言葉は真実味を帯びた。

「エンジュ様」

制止の声は、彼女を勢いづけただけだった。

「兄君のように外を見たい。兄君のように学校へ行きたい。兄君のようにたくさんの方達に囲まれてみたい。

兄君のように買い物をしたり、いたずらをして宿舎の罰掃除をしたり、ひそり規則を破つて外出したり、…」

言つているうちに、苛々としてきた。

「エンジュ様、駄々っ子のようですわ。おやめあそばせ」「オノセはふう、と額を押されてため息をつく。

「ウォン様からいつたい何をお聞きになつたのです」

ひとしきり地団太を踏むとエンジュは、大きな声で言い募つた自

分が情けなくなつて、あーあと肩を落とした。

4つ年上の兄君は、学問の中心地・朱都^{シユト}で、貴族の子弟たちが通う学府『緋の学院』に入っている。

長期の休みで、年に数度、この都の本邸へ戻つてくる以外は、会うこともない。

帝の傍で、宰相という重責を務める父君とは違い、肩の力の抜き方を十二分に心得た兄は青家嫡男でありながら、問題児でもあるらしい。

時折思い出したように妹に届けられる便りは、学院で起こした騒動で埋められている。

ちょっとした暇つぶしにと、と風をつかまえる方法を教えてくれたのも彼だった。

『こうやって、生氣^{イキ}を送るんだ。ほら、やつて、いらっしゃる、』

ちょうど乗ってきた春風をつかまえて、いたずらっぽく兄は言つた。

体が丈夫でないと侍医に云われ、年中、邸の中で過ごす妹を彼なりに気遣つっていたのだろう。

エンジュが見よう見まねに、風に息を送ると、彼はひゅう、と口笛をふいた。

『こりや、すい。生きてるみたいだ』

兄が送った息は、風をのばしたり、大きくしてただ戯れるだけだが、彼女が教えられたようにやると、まるで感情をもつた生き物のように風は声を伴い、その思いさえ伝える存在へと転化した。

青いほのおに変わつた春風は、その光の奥に、黄色い花畠で花をつみどる女たちを映した。

粗末な無地の衣と日よけの頭巾をかぶつた平民たち。日々の糧を

得るための、荒れた手。

その周りを飛び交う、ちゅうちゅ、ちゅうちゅ、ちゅうちゅ。

そして、見渡す限りの黄色い花。

「ああ、この花は何と云つただらう。へるへると回つて、きれいだつた。

青い抜けるような空。ああ、明るい。はじめて、見た。もつと、もつと、もつと。

興奮にぼう、となつて、『エンジュ』の手を握り、兄は風を解放させる呪文を唱えたが彼女の呼氣で縛られた風は、変化しなかつた。

『強すぎまる、』

と彼は小さく舌打ちをしてから、自分の指先を歯で噛み、血を餌に風を元の姿に戻してから、言った。

『いいか、エンジュ』その声は、低く憂いの響きを含んでいた。
『絶対にその力、あいつに知られてはいけない。絶対にだ』

「あいつ、って誰だつたのかしら？」

エンジュは口の中で、咳く。

あの日以来、兄の彼女に対する態度が変化したように思つ。

以前と同様、軽い口調と穏やかな物腰、からかう様な仕草は変わらなかつたが、時折、困惑にも似た表情がよぎることがあつた。

その理由を問いたいと彼女は思つ。しかし、まだ今年は兄の帰省が許されていない。

「…エンジュ様、お聞きですか」

彼女は、意識をオノセに戻した。

「何、オノセ」

「お召し替えのお時間に」「わざわざ、本日せうじ御用に」「挨拶なさる
予定です」

エンジュは内心で、重いため息をついた。

オノセが5本爪の龍が縫いとられた蒼のとばりをまきあげ、控えの部屋に彼女を通す。

香炉からゆるく煙がくゆり、侍女たちが反対の部屋から装飾品や衣を手に入つてくる。

日に3度の召し替え。

人に会つことがあれば、その数だけ着替えの数は、増えた。

地には極彩色で織られた足元までのオーバードレスの上に、胸の下で、幅が指4本程度の太さの帯を巻きつけ結ぶ。これがこの国の女性たちの一般的な装いだ。

改まつた場にでるときは、地の模様がうつる薄物をドレスの上に幾重にも重ねたり、下に織りの違う裾を重ねたりという重ねの色合いを楽しむ衣装が好まれる。エンジューの場合、普段着とは言つても、オーバードレスの上に色みの違う青を2枚も重ねている。

貴婦人たる者、たくさんの重ねを着崩れせず纏い、重さも感じさせないよう、優雅に動くことを求められる。貴族の女性たちの日常と云われれば、仕方のないことなのだが、自室といくつかの部屋の行き来のみが平生のエンジューには、幾度もの着脱は煩わしいことこの上ない。

勿論、オノセをはじめ、彼女に仕える侍女たちは、青家のひとり娘である彼女を華やかに着飾ることが誉れであり、当然であるとの認識がある。

それにしても、衣が重い。

エンジューは、銀の腰帯びを結んでもらいながら、思つた。

身にまとう絹には、全面に錦糸の刺繡が施されているからだ。頭

ももげるほど、重い。

背を覆つ髪は複雑な編み込みで半分ほどが結いあげられ、その上に翡翠玉のついたかんざしを6本差される。

しゃらんしゃらん、と華奢に揺れるかんざしがどれほど重いのか、見ている者は考えたことがあるだらうか。

侍女がオノセに水差しを差しだす。

エンジコが水に浮いた花の中から、青い花の薺を指さすと、オノセが慎重に手に取り髪にさして貰われる。鏡で位置を確認する。

「いいわ、ありがと」

「ほう、と侍女たちがため息をつく。彼女たちのため息は、エンジコのものとは違つ。

賞賛であり、感嘆であり、満足の色なのである。

エンジコは背筋をのばし、頭を揺りながら歩幅を小さくとりながら部屋を出た。

オノセがすぐ後ろを歩いてくるのを承知で、うめき声をあげてみせる。

「服も髪も重い」

「何をおっしゃこます、女は我慢ですわ

」平然と、オノセが返す。

何を言つても無駄な気がしたので、せめて顔つきに不満を浮かべて、エンジコは廊下を歩く。

幾つもの部屋を通り過ぎ、幾つもの角を曲がる。

「もつと、にこやかなお顔をなさいませ」

「気分が悪いのだから、これが精一杯よ」

鼻を鳴らして、エンジコは答える。

蠟燭の炎が紙を通して、明るく足元を照らす。毎回なに、勿体

ないことだ。

夜には、光々と明かりがともる。この明かりの番をするためだけの召使が、邸には十数人もいるのだと、兄君が教えてくれたことがあるのを、エンジュはぼんやり思い出した。

行きかう人々が、脇に控えて頭を下げるなか、エンジュとオノセは、中央を進んでいく。

その時、行く手の角を曲がってこちらへ来るひときわ美々しい女性の一団が目に入った。

エンジュは、オノセに配すると廊下の端へ寄った。

「うわげんよひ、」

一団の中心を進む女性は、エンジュの前で足をとめ、そつけない挨拶を寄こした。

ナルミヤだ。彩模様の扇で顔の大半を覆っているため、表情はほとんど窺えない。

帝の近親にしか許されない黄の綿を幾重にもあわせた衣装。

冠のように飾り玉が額に幾筋も揺れるかんざしは黄金でできており、左側に結いあげた髪は黒く豊かにまとめられている。

白いかんばせは人形のように硬質で若々しく、実際、年齢もエンジュとは姉妹といつても通用する。

美しく整えられた手に持つ扇からは、貴族の女性たちに最も珍重されている百合の香がつん、と匂つた。

エンジュは極めて事務的に膝を軽くおつた。

「うわげんよひ、お母上」

この挨拶に、相手はわずかに険のある眼差しを向けたようだった。

しかしHンジュは氣付かぬふりでオノセを促し、歩を出す。
その背中へ、棘のある言葉が投げかけられる。

「可愛げのない娘だこと」

十一分に離れて次の廊下を曲がつたところへ、Hンジュは長く吐息をついた。

「お母上は、相変わらずね」

「気になさこませんように」

オノセが慰めたが、Hンジュはいつも毎回刺々しく顔を合わせられるのは、避けたいと思つてしまつ。

ナルミヤは父君の最も新しい、かつ唯一の妻だ。

現帝の異腹の妹宮である。妾妃から生まれた皇女としては異例の一品の身分を賜つて青家に降嫁してきた。

この婚姻は先帝の遺言だったとかで、当時くちさがない年配の侍女たちなどは、父君がナルミヤをめとる為に先妻たちを呪い殺したのだ、と噂した。

まだ年若く氣位の高い姫宮と、Hンジュとの親娘関係は、そんなわけで最初から芳しくない。

それでも同じ邸に過ごすようになつて、6年が経とうとしている。

「3週間ぶりだわ」

Hンジュは、オノセに苦々しく呟く。

父君とは、もつと会つていない。ともすると、顔さえ忘れてしまいそうになる。

挨拶の時間を意図的に作りねばならないほど、彼女の家族関係は希薄だ。

父君は、Hンジュだけでなく一人息子の雨音ウォンにも全くと言つていい

いまでも、関心を持つていなことだった。

回廊を出ると、よく磨かれた青石で敷かれた玉砂利が広がる庭園に出た。

青家の本邸は石庭で名高く、雨が降ると琴をはじくような音が響く。

代わりに、花や木など生きたものは配されていない。都の喧騒のなかにあるとは思えぬほど、硬質で静謐な邸である。

屋根つきの東屋を結ぶようした舗装された小道がゆるやかに延び、エンジュは歩調を落としてオノセに並んだ。

「父君はいつも戻りに?」

エンジュは話しかけた。

「一昨日、どうかがつておりますが

「皇宮から?」

「そのようですね

オノセは答えながら難しい顔つきで、考え方をしてくるようだつた。

「先づい、西家を通じ、和約のための隣国の使者が到着したとか」

「西家?」

ええ、とオノセはうなづく。

西家は、文字通り帝国西部を治める大諸侯だ。

東を治める青家とは同格の『大公』の位を与えられている。

本家である白家は、とうの昔に断絶しており、今はその流れをくむ12の分家が持ち回りで当主の座に就いている。

西と言えば、半島で国境を接するグルジムカである。

屈強な騎馬軍、圧倒的な行軍力で周辺国を脅えさせる、巨大な軍事国家。

長年、帝国とは戦火を交えてきた相手だ。

「和約？」

意外な響きにエンジュは首をかしげた。

積雪のための中斷はあっても、停戦や和約などといふ言葉は、好戦的なグルジムカが使うことなどない。

「国境の砦から出撃した我がほうの少數部隊が、奇襲によつてグルジムカの騎馬軍を壊滅せしめた、と聞きましたわ」

奇襲。エンジュは確かめるよつて、くりかえした。

奇襲とは、騎士の風上にもおけぬ策。

その策をとらねばならぬほどの不利な戦であつたといふことか。

エンジュは胸に痛みを覚え、頭一つ分背の高いオノセを見上げた。

「勝つたの？」 和約の条件は、「

エンジュの問いに、オノセはめずらしく逡巡してから口を開いた。

「西家の公女と、グルジムカの王太子の婚姻。および、捕虜の交換です」

「西家の？」

皇族や王家の姫ではないのか、と尋ねるエンジュに、オノセは説明を加える。

「おそらく、こちらの国情をくんでの申し出だと思われますけど」

帝国は今まで、皇女を異国へ嫁がせたことがない。

それで、国境を接する西方諸侯の娘を、といふことか。

「騎士たちが無事でいると良いけれど」

「姫、」

エンジュは、この条件から勝利ではないことを語った。
それでもここでは、負けたと口にすることができない。オノセが眉根をよせる。

「彼らが無事に帰還することを祈りましょう」

「一百数十年の長きにわたり、この国の中央政治を牛耳つたのは、『国首の君』と呼ばれた青家の一族であった。

國を闇ぞし、和をもって統治しようとした代々の国首たち。
しかし一百年もたたぬうちに、汚職と暗殺が横行し、内側から腐つていく果実のように、政情は悪化の一途をたどつた。

変革が叫ばれる中、20年前、先代国首は政権を再び、お飾りだつた帝のもとへ戻したのだ。

一見落ち着いたかに見える帝国の内実は、内部の瓦解と並行し、外部からの侵入に悩まされ続けている。
呪術と異能の少数集団で国の根幹を支えてきたが、それもこれ以上続くかどうか。
特にここ数年は国境があわただしく、西方地域をあずかる白家の一族は苦しい負担にあえいでいる。

「このままでは、西から帝国は崩壊するでしょうね」

エンジュは、強く言った。

オノセは、慌てて彼女の口をふさぐ。

「し。どこに耳があるかしれません」

「かまつものか。ここにいる私が何をできるところの

「父君は？」

「わたくしには、分かりかねます……ただ、手をこまねいておられる

わけではありますまい

表で取次をする」とも多いオノセは、父君の置かれた政情をおぼろげながら描くことができるのだろう。

ため息をつく。

「たとえ今は『宰相の君』とはいえ、総ての権力を手にしているわけではありません。それよりも、オノセの口調が変化する。

「エンジュ様、幾度も申しあげておりますように、力を使って厄介なことに首をつっこんではいけませんよ」

「厄介なことって?」

「あなたの趣味の、例ののぞき見です」

「すばりと言われ、エンジュは口をとがらせた。

兄君から教えてもらつて以降、風をつかまえて外の世界をのぞいていたのをオノセは知っていたらしい。

「迷惑はかけてないわ」

「必要のない力を使いになることが、迷惑というのです」

いつもの繰り言だ。

オノセは、どんな簡単な術であつてもエンジュが異能を使うことを嫌がる。

なぜ、と訊いてもはばぐらかされるばかりだ。

エンジュは分かつた、と頷き、それきり会話は途絶えた。

しばらく進むと翠の玉で屋根を敷かれた壮大な建物が、姿を現す。

ここは父の居宮、すなわち「表」だ。

長く広い大階段を登りきると、侍従が進み出て、オノセに耳打ちする。

階でとめられるなど、普段では考えられない。

エンジュは横目でオノセの表情をうかがつたが、その白い顔に何の色も読めなかつた。

しばらくして二人は奥から出てきた別の侍従の案内で、当主・青龍リョウが私的な応接に使う部屋の前に立つた。

ここからは、エンジュひとりだ。

「父君、エンジュです」

低く応えが返り、エンジュはなかへ入った。
額の前で両手を組み、膝を軽くおり礼をとる。

「やあ、これは大した貴婦人ぶりだね、エンジュ」
明るく、屈託のない若い声を聞いて、彼女はまさか、と顔をあげた。

そこには、1年ぶりに見る兄の姿がある。ゆるく波がかつた髪が肩まで届いているのと、身長がずいぶん伸びたような気がすること以外は、去年のままだ。

彼は長椅子から立ち上がり、にっこりと笑った。

「兄君！」
「ただいま」

彼女は父の部屋だといつことも忘れて、歓声をあげ、兄に抱きついた。

「そんなに歓迎してくれるなんてね、僕も帰ってきたかいがあるつてもんだよ」

と、彼らしい軽口で妹の手を取つて、「ねえ、父上」と振り返つた。

「雨音、
ウオン

冬の朝の池にはつた氷のような聲音で、父君が呼んだ。

彼は、良く磨かれた黒くて立派な卓の前に、座つてゐる。右の脇には、書類の載つた盆を持って書記官が立つ。

エンジュが見慣れた、ここにいつもの風景だ。

「なんですか？」

父の聲音にも、兄は自分のペースを崩さうとはしなかった。

父君は、左の眉をぴくりと動かした。これは、彼が気に入らないときの仕草だ。

Hンジュは、父の叱責を予期して体をこわばらせた。

「下がつていー」

だが、父は息子に対してもなく、側の書記官に静かに言った。壮年の書記官は頭を禮すると、家族を残して退出した。彼が出ていくと、兄君はまるで嘘のように笑顔をひっこめ、Hンジュの手をする、と離した。

そうして苦々しげな表情で、長い手足を投げ出すように、椅子に深々と座りこむ。

「さあ、はやく聞かせてくださいよ。なぜ、貴方の前に兄妹揃つて居るのかをね、父上」

「兄君」

Hンジュが雨音に咎める視線を送れば、父が「おや、「とわざとらしく、彼女を見つめた。

初めて、娘がそこにいることに気付いた、とでもいう風に。

父君は静かに、机の上で両手を重ねる。

その左手の中指には、5本爪の龍が彫られた銀細工の指輪がはまっている。青家の当主・青龍のあかしである。

龍の爪に使われているのは、さすように蒼く輝く2対のダイヤモンドだ。

この宝石には特別な力が宿つてゐると云えられ、自ら持ち主を選ぶといつ。

右眼は『氷涙』、左眼は『流呼』と呼ばれている。
今は「流呼」が嵌っていない。

父君が最後の国首の座を帝に返還した時、離れたという。
エンジュはいつも、田を見ることができなくて、指輪の嵌った父
君の美しく女性的な手に視線を落としてしまつ。

父君の声が落ち、エンジュは顔をあげた。

「四宮^{シノヤ}が、神殿より戻ってきた」

青龍は、微笑をうかべている。

不満げに結ばれた兄君の口がぴくりと動いた。

「皇太子が内定したのですか、」

「そうとは言つていない」

「では

」

「確かに彼は、有力だ。お前もいざれ任官しよう。その田で、見た
いかと思つてな」

父君は、造作の良く似た息子に視線を投げる。

背に流れる波立つた髪も、神経質そうな眉も、高く整つた鼻梁も、
広い額も、うすく引き結ばれた唇も、兩音が年をとればかく、とば
かりの類似。

2人の圧倒的な違いは、ただ体にまとう力の差である。
溢れんばかりに立ち昇る父の異能に対して、兄のそれは仄かに体
にまとつてゐるに過ぎない。

「いずれ、であつて、今ではありませんよ
「しかし、見極めねばなるまい」

邸の奥からほんと出ることのないエンジュには、一体、父と兄が何を話しているのか、深くは分からなかつた。

不可解な表情が面に浮かんだのだろうか。父君は不意にエンジュに目をとめた。

「ときには、そなた。幾つになつた?」

「…16です」

困惑しながら、こわごわエンジュが答えると、青龍は一瞬、安堵とも苦みともつかない曖昧な表情を浮かべた。

「エンジュの年が、いかがしました?」

兄君が先を制するように父に尋ねる。

父は兄に視線を戻すと、娘の顔も見ずに言つた。

「嫁がせる。ハクオウ白桜家の嫡男だ。そう悪くはあるまい」

「それは、…決定なのですか?」

エンジュの声が自然と震える。

「不満か、」

青龍はエンジュに視線を戻したが、その顔に感情らしきものは浮かんでいない。

彼女は直ぐ首を振つた。

「いえ、ただ…」

しかし、突然のことに、口を開いたはいいが何を話していいのか分からず、結局、もう一度首を振つて黙つた。

「父上、そのようなお話は」

と兄が抗議の声をあげたが、「反論は許さぬ」との父君の一言に押し黙る。

まさに寝耳に水のことだ。

長い沈黙が落ちる。

エンジュは唇をかみしめた。父の考へてることが知れない。

「どのような相手か聞かないのか
しばらしくして雨音がエンジュをうながしたが、彼女は直接それは答えず、棒のように強張つた足を前にすすめ、父君と黒い机を挟んでむきあつた。

奇襲によつて敵国に勝利したという情報。

同じ位階にあるとはいへ、宰相をつとめる青家と分家の白桜の婚

姻。

「嫁げば、おのずと知れましよう　父君、」
「何か」

「父君は西家に、いえ、敵国グルジムカに譲歩したのですか

「父君は西家に、いえ敵国グルジムカに譲歩したのですか」
そのひと言に青龍の表情が一変した、と思つた途端、「ごおつ、と
エンジュの体を黄金の炎が包み、芯からもえあがる激痛が彼女を襲
う。

あつい、あつい、あつい、あつい、あつい、あつい、
もえている！！

「父上！！」

慌てたような兄君の声が聞こえ、ああ、父君がお怒りになつたの
だ、とエンジュは痛みに崩れそうになりながら、思った。
この業火は、父の放つた力だ。

「せいぜい、婚家ではその口のきき方に気をつけるがいい」

父君はそう言い捨てる、椅子から荒々しく立ちあがり、部屋を
出て行つた。

エンジュは父の退出と同時に膝から崩れ落ち、心の臓を焼く熱さ
に床をのたうちまわつたが、けつして悲鳴を上げまいと奥歯をくい
しばる。

田じりから涙がこぼれた。

何分激痛に耐えただろう、次に意識がはつきりしたときには、彼
女はオノセの腕の中にいた。

火は見えない。

ほつと息をつき、ぼんやりと田元をぬぐつと焦点がはつきつし、
オノセの顔が見えた。

二つもの美しい顔が涙で汚れている。

傍らに兄君とコウビの姿もある。

兄君は、口もとをひき結んで感情をこらえてくるようだ。

「…コウビ、来てたの」

声をかけると、赤い目でエンジュを覗き込んだ。

怒りのよくな、悲嘆のような複雑な色が浮かんでいた。

「青龍ちゃんに何をおしゃったのです？」

「父君は、グルジム力に屈したのか、と聞いた」

エンジュは軽く笑つたつもりが、喉の息がひゅうひゅうと鳴つて、あえぎ声のようになってしまった。

体に力を込め、半身を起こすと、びりびりと皮膚にしびるような痛みが走る。

特に、むきだしになつた両の手が痛い。手の甲を確認すると、肌が赤く染まっていた。

鬱血している。

「なんどこうことを、」

コウビは呻き声をあげたが、エンジュは意に介さなかつた。

両手をどちら、低い声でオノセが癒しの呪文を唱えているのをほんやりと聞く。

このあたりで済んで、幸運だった。兄君がかばってくれたのだろう。黙つて膝をついていた爾音に目を向け、エンジュは謝つた。

「兄君、心配をおかけしました」

「全く。寿命が縮んだ」

彼はいつものように、片手でエンジュの頬に軽く触れてくる。鼻に、かすかに腐臭がついた。

エンジュは、まさか、と兄の反対側の袖口をぐい、と引っ張った。布のぬめるような感覚に、やはりと納得する。腕に走る一筋の傷口。まだ、鮮血がにじんでいる。

「血をお使いに？」

「…少しな。お前が気にするほどじゃない」

そうは言つても、手首から肘にかけて伸びた傷では、相当の血を躰つたに違ひなかつた。

兄の青い顔を見ながら、エンジュは「『めんなさい』と再び詫びる。

ただ、知りたいことは知れた。父は、先の西部戦線での大敗、あるいは失策を知つてゐる。

そして、どうやら、グルジム力に讓歩しなければならない状況に追いやられていらうらしいということも。

「すまない、お前の盾にはなれなかつた」

父の力は強大で、到底僕は及ばない、と兩音が静かに言い、エンジュはその声の響きに胸がつかれるような痛みを覚えた。

『血を用いるのは、最終手段です』

神から『えられた異能という恩寵を制御するために、エンジュは幼いころからそう繰り返し、繰り返されてきた。

力を持つた大量の血はまた、邪氣をも呼びよせ、果てには持ち主をのみこんでしまう、と。

勿論、兄君も同様であるはずだ。

辺りには朽ちる寸前の花のよつに甘い匂いが漂い、兄の血を媒介とする術だと知れたが、その他にも、多数の術の残り香が鼻をつく。兄の『声』や『息』では、父の術に太刀打ちできなかつたらしい。雨音は、黙つたままのエンジューに視線を転じた。

「申し訳ございません」

と、オノセがうなだれる。

「お前を責めてはいない」

「ですが、」

「いい、僕が側にいたんだから」

オノセはエンジューの教育係として、この状況に、責任を感じているらしい。

だが、雨音はそれには頓着せず、ふつと嘆息する。

「この程度ですんで、まだ良かつた」

それより聞きたいことがある、と雨音は強い口調で言った。
オノセは顔を強張らせたまま、頷く。

「…皇宮のことだ。僕は学院から戻つたばかりで情報が不足している」

「神殿から、皇子が戻られたというお話でしょうか?」

「そう。父上は見極めるとおっしゃつておられたが…」

「帝の希望であらせられる、とは聞いたことがありますけれど」

「不可解だ…」

オノセの返事に、うーんと雨音は唸り、顎に手をやつしてしまいく
考え方こんでいる。

そのとき、外から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「若、そろそろお時間です」

「分かった。すぐ行く。オノセ、君も来てくれ」

雨音は扉に返し、床に座り込んだままのHンジュに向き直った。
そのおもては、軽薄な普段の調子とは全く異なっていた。

「僕が言ひべきは、一つだ。

父を怒らせるな」

僕ではお前を助けてやれない。

そう言って立ち上ると、Hンジュとコウヒを残したまま、振り
返らずに扉の外へと消えた。

「ウヒは口をあわせつと結ぶと、黙つてヒンジュを立たせた。

帯を解いて多少汚れた上着を脱がせる。

重ねを2枚も脱げば、随分身軽になった。ふたたび帯を簡単に結びなおした。

スカートを直すと、足元にかんざしの花が落ちているのが田に入つた。

いつの間に踏んだものやら、花びらが割れ、破片が飛んでいる。

「兄君は悪くないわ」

ヒンジュは手伝おうと手を伸ばしたウヒを制し、乱れた髪からかんざしをひきぬいて、手早く髪をすべく。

編み込みを解いて頭を振ると、背中へゆるべ髪が滑り落ちた。重さと痛みに解放され、ヒンジュはようやく顔に表情が戻るのを感じた。

「ウヒ、私、結婚するんですつて」

「ウヒの顔が再び凍るのを見ながら、続ける。「西家」

「どなたにですつて、」

「ウヒの悲鳴のよくな声に、ヒンジュは肩をすくめた。

「別に、それで父君に逆らつたわけじゃないわ」

「勿論です。それにしても…西家のどの家です？」

西家白家は、血筋が絶えて久しい。現在はその流れをくむ、ハク 12

の分家が西方諸侯連合という形をとつて、西部地域を治めている。家同士の諍いと権力集中を防ぐために、独特的の慣習で当主・白虎の地位を守つているのだ。

それが、『白虎の地位は、持ち回りの7年任期』といつものだ。

「白桜^{ハクオウ}の嫡男^{ヒヤシコ}だつたと思ひ。悪くはあるまい、とおっしゃつたわ」

「それは、…しかし」

「コウヒの微妙な反応に、リュウカは心配になつてきた。

もとより、青家の娘に生まれたからには、政略結婚など覚悟の上だ。

家格と政治的配慮の上、嫁ぐことが生まれたときから運命づけられている。

「もしかして、…すゞ」一ヶ月上とか、たくさんの奥方をお持ちだとか、醜男だとか

「存じないのですか、」

「何が?」

ああ、とコウヒが大仰にため息をつく。

「あなたはきっと、富廷では生きられませんわね」
オノセの苦労が手に取るよつに分かります。

各々の家の因縁や家族構成、地位や財政状態を頭に入れておくのは、貴族としてのつとめだ。

生きる術ながら、と常々オノセはエンジュに言い聞かせていた。

普段の勉強が全くエンジュの身になつていなことを知つて、コウヒは天をあおぐ。

「兄君もその点、あまり世渡りがうまことは言えないわ」

口をとがらせて、エンジュは血口弁護した。「私は、いいのよ。

だって、あなたやオノセがいるもの」

口元を引き上げると、にっこり笑う。

「それで？」

「ウヒはため息をつき、

「私はもとより、オノセが嫁ぎ先まで」一緒にできるかは、わかりませんよ」

と言おうとしたが、結局口にはせず、エンジュをうりひんに見返した。

「確かに現在の白虎は、ラン蘭家がついでいます。私の記憶に間違いがないれば、白桜の公子は、蘭の公女と婚約していたと思いますわ……。

血の近さから帝が汚られたのを、神殿のとりなしで許されたとか」「じゃ、わたしは『即さん』で」とかしら

「まさか！」

「ウヒは鼻白んだ。『青家の公女が一万が一にも起こりえません』歴史ではあつたわ、とエンジュは心の中で反駁する。

青家が帝に代わって国首の座に在り、並びない権勢をふるついたところでさえ。

氷姫と呼ばれたサテや、大公女の位を剥奪されたナコタを、歴史学者の卵であるウヒが思い至らぬはずない。

しかし、エンジュはそれを指摘しなかつた。別の考えにとらわれたためだ。

「ウヒ、なぜ白桜なのかしら」

父君の怒りを考慮に入れれば、西家の騎士たちは善戦はしただろ

うが、戦火に散つただろ？

なのに、父君は西家にエンジュをやるといつ。しかも、現白虎の家族ではない。

何が、父君を決心させたのだろう。
エンジュは、父の使える唯一の娘である。
そう安売りするとも思えないが。

「何かあつそですわね」

「…お母上はどうかしら？」

「ついでに提案してみる。

ひからへ来るときに、鉢合わせしたところとせ、ナルミヤも父に会つたに違ひなかつた。

「それで？わたくしに聞きたいことは、」

まさか、入室を許されるとは思わなかつた。

「ウヒとしては、ナルミヤの居住する東殿で侍女たちに少し話が聞ければよかつたのである。

ナルミヤの居室に案内され、椅子をすすめられ、皇女にお茶を振る舞われるとは思つてもみなかつた。

湯気の立ちのぼるカップに口をつけて、初めて嗅ぐ異国の香りに瞠目する。

「これは、」

「どうだ？氣に入ったか？」

ナルミヤは口元を引き上げて、ほほ笑む。

そうすると、彼女は廊下で行きかう印象より、ずっと、若々しく見えた。

そういうえば、この方はまだ30歳にもなつていないので、とウヒは思い返す。

「はい、とても。大陸東部からの舶来ですか？」

「ああ。近頃は異国のものを容易に手に入れることができるよつた」

穏やかなオレンジ色をした飲み物に、ナルミヤは口を細める。

「ウヒは、そういえば、と部屋に口をやつた。

四方の壁全面に掛けられた刺繡の壁掛けは、よく見れば幾何学模様で、染めの色づかいから、帝国のものではないと分かる。

今、自分たちが座っている椅子も、口の前のテーブルも、飾り戸

棚も。

「わたくしに尋ねても、お前の欲しい答えは得られぬだろ？」「ナルミヤはコウヒを見つめながら、そう呟つた。

2人きりで、これほど近い距離で話をするのは初めてだった。

田じりを赤く引いた一重の臉は、ナルミヤをひときわ近寄りがたく見せる。

額の中央に描かれた赤い花びら模様は、皇宮の女性独特の化粧だ。ナルミヤの降嫁に際しての条件の一つが、嫁ぎ先でもこの宮風を通すことであつたという。

「奥方さま…」

「ああ、それはやめよ」ナルミヤは氣分が悪そつと首を振る。

「その呼び方は好かぬ」

「申し訳ありません、富様」

「あれの婚約のことだらう？先ほど、わたくしも青龍から聞かされたところ。上は承諾なさるまいと、わたくしは言つておいた」

「帝が？」

なぜ、帝がエンジュの婚姻に関心を示すのか。

「ウヒの問い合わせるような表情を読んだのだらう、ナルミヤは分らぬか、と苦笑った。

「あれの継ぐ血を考えてもみよ。西の辺境だと？いらぬ騒乱を招くまじまじと皇女を見つめてしまつ。」

エンジュとナルミヤの仲の悪さは、周知の事実だった。

一緒に訪ねよう、と囁いたコウヒビ、元ヒンジュが返した言葉がそれを示している。

『わたしは、あの方に嫌われているし。行っても会ってくださらないでしょ』

正確には、会ってくれないではなく、会わないうことにしてくる、だ。

ヒンジュは、ナルミヤの居住空間に接触しないように、出遭ったときは叱責を受けないよう目を伏せている。

何が厭というのではない。初めて挨拶を交わした時から、ナルミヤは刺々しい態度だったらしい。

思い出したくもない、ヒンジュは言つ。

「わたくしが？」

まさか、とナルミヤは紅い唇を一度歪めた。

「傍にはそなたやオノセがついておひつて、兄もおれは、父親もおる。

「わたくしは、あれの母にはなれぬ

母といつまでも年もなれておらぬじ。

ナルミヤはカップを口に運んだ。

その洗練された手つきと、染み一つない白い手が、向よりも雄弁に彼女の立場を語つてゐるようと思えた。

「では、なぜ私をここに？」

「なぜであらうな……」

「ヒンジュのヒビ、元疑問で、皇女は面倒だとでもいいたばこ、首を振つた。
「ヒンジュは好かん。聴いわりには、頑固で若い。ゆえに、元ヒンジュが返した言葉がそれを示している。

しかし

それをそなたに、言いたかったのかもしね。

ナルミヤは、ふ、と息を落とした。

これほど側に寄りながら、口ウヒはナルミヤを覆つ異能を殆ど感じないことに、ふと気がついた。

『帝が、国一番の術者である』とされるこの帝国において、皇族にこれほど力が感じられないのは珍しい。

「ウヒは、まじまじとナルミヤの枯葉色の瞳をのぞきこんでしま

う。

「それに」

とナルミヤは囁いた。

「それによ？」

繰り返した口ウヒに、そなたには分らぬであつたが、と穏やかな

声のまま告げる。

「わたくしも現状に甘んじてこるわけではないのだ」

ここ帝都の冬の到来は、貴族たちによる華やかな祝宴によつて幕をあける。

冬のシーズンを祝う催しが離宮で行われると聞き、兄君はエンジューを伴つて参加することに決めた。

エンジューの婚約は既に3週間前に公示され、雪で馬車が動けなくなる前に西家の拠点、彩白へ向かうことが決定していた。

いわゆる足入れ婚である。

今夜の祝宴で、エンジューは非公式にではあるが、帝に謁見し、婚姻の認可を賜ることになつていて。

父は接見役を、雨音^{ウオノ}に總て任せると、出でようとはしない。もちろん、ナルミヤもだ。

エンジューは、朝も早いうちから、長時間大鏡の前に座られた。

髪に香油を塗られたうえ、たんねんにくしけずられ、細やかに編まれていく。

侍女に渡された手鏡でエンジューが後方の髪型を確認していくと、背の高い兄君がさつそつと入ってくるところだった。

「エンジュー、どうだい？用意は

「

そう言つなり、彼はしばし我を忘れたように、鏡越しに妹の顔を見つめた。

エンジューが首を傾げると、雨音はああ、と息をつく。

「本当に綺麗だ、エンジュー。これならば、どんな美姫も顔色をなくすだろう。なあ、リド」「

戸口を振りかえると、笑みを浮かべながら一人の青年が部屋へ入

つてくるところだった。

「あきれるほどの中司コンぶりだね、ウオーン」
「まあ、リドお兄様！」

久しぶりに会つ母方の叔父に近づいたが、長い裾に足をとられ倒れそうになつた。

とつせに、伸ばされた手にすがりついて態勢をもじす。

「気をつけておくれよ、エンジュ」

「ありがとう、リドお兄様」

どういたしまして、会つに来てくれて嬉しいわ、私も嬉しいよ、
と会話が続いたところで、横から不機嫌な咳ばらいが聞こえた。

「妹から離れる、リド」

「何を怒つてるんだい？ 君は」

「何も」

むつつと叫び、リドは苦笑いをしながら、距離をとつた。
リドは叔父とはいっても、なれてエンジュの母の実家へ養子に入つたもので、直接的な血縁関係はない。

『緋の学院』では兩音の学友でもあり、今日はエンジュたちと共に参内するところ。

彼自身、既に伯の位を賜つており、若輩ながら領地もあずかつて
いる。

「（）へは遠慮しようと思つたのだけどね。どうしても、つてウォンが言つから来てしまつたよ」

エンジュの頬に片手を添え、つっこつとカラは笑いかける。

もう一方の手には白い小花がぎつしりとつめられた籠が握られて
いる。

「それは？」

「贈り物だ。君へ」

エンジューは差しされた籠を受け取る。

粉雪のよくな花は可憐で、まだ朝露が残っていた。
きれい、と声を出さずにつぶやく。

リドは瞳をすがめるように笑みを刻んだ。
エンジューはその顔を眩しそうに、見上げる。

白皙で線が細く、いかにも貴公子然としたリドは、プレイボーイとしてあちこちで浮名を流しているのだと、兄君はしきりにエンジューに語つて聞かせていた。

「…でも、私にまで、こんなことをしていただかなくてよかつたのだ。

「ん
「え、」

と尋ね返すリドと同時に、雨音が何かをこらえるよつらせき込んだ。

ひと息、沈黙したカラは意味を理解するに及んで、ちらりと友人に目をやる。

「…へえ
「お~おい、なんだよ。その目
「エンジュー、教えてくれるかな。ウォンはなんて言つてるの?」私のこと。

口元を引き上げて穏やかそうに微笑んでいたが、目は笑つていな
い。

エンジューは兩音を見たが、兄は決して彼女と目を合わせようとしなかつた。

「惑うHンジュが、リドに視線を返す。

「もしかして、こんな風に？」

と、リドは彼女の耳元に顔を寄せて囁いた。

そして、頬にかすめるような口づけを落とす。

額で分けた長い黒髪が揺れ、離れるときにリドの香がこおった。

「おこ……」

兄が顔を上気させて怒鳴った。

ふふ、トリドは軽く笑う。

「君の、その顔つたら……。第一、その花は私からじゃないよ。邸の前で言付かつたんだから」

からかわれたと知つて、いつそう兩音は顔を赤らめる。

「お楽しみのところ、申し訳ありませんけど、時間ですわ」

戻口元、口ウビが立っていた。

耳元で2つに結いあげた髪は豊かで、額をかざるクリスタルがきらきらと輝いている。

Hンジュがどうしても、とお願いして、今日は戻口元にも参加してもらつたのだ。

「やあ、戻口元。いつもながらきれいだね」

リドが近づき手を伸ばしたところ、「戻口元はまだ口上手でござり笑つた。

「いつもながら歯の浮くようなセリフです」と

「あなたしか、見ていないからね」

「まあ、お上手」

リドの言葉に感情をこめず口答へ、戻口元は、Hンジュに提案する。

「少しあびしいわ。しあげに、髪にその花を飾つてはどうかしら、

「少しあびしいわ。しあげに、髪にその花を飾つてはどうかしら、

「エンジュが大鏡」にして、リードを見る。

「それは」「

と声を濁す雨音に被せるなり、「まあ、みに考えですすわ」と侍女たちが口ぐちに歎声をあげる。

「贈り物を身につけて、あけらで出合われるんじょひへロマンチックです」と

「あなたたち、すこしふづきをすくでよ」

オノセはまた侍女たちにさう注意してから、エンジュを椅子に座らせる。

「この花は使つてもよろしくのじゅつか?」

リードに確認をとる。

花の送り主が、エンジュの立場に不利に働くかないと聞いたのだ。彼がうなづいた上で、オノセは籠から花を摘んだ。編まれた髪の合間に、挿しこみ飾つていく。

「…ん、できました

オノセが少し離れた位置から出来栄えを確認し、エンジュが雨音に手をとられて立つと、口元は頷いた。

頬を薔薇色に染め、由桜から婚約の祝いとして贈られた縄で仕立てられた白いドレスを身につけ、ゆるく波立つ長い髪に花を散らした少女の姿は、清楚な美しさで、まるでおとぎ話に登じる精霊のように見えた。

「変じやない?」

「まさか、」

完璧だ。そつ雨音は言つて、侍女たちに扉を開けさせた。

「用意はいい?」

「ええ」

エンジュをエスコートする、誇りしげな兩音の横顔を見ながら、リドはコウヒに腕を差し出した。

「私たちも行こうか」

「はい」

コウヒが前をゆく兄妹に気がかりな視線を投げるのを見て、「君も複雑な心境だね?」とリドは囁く。

コウヒはそれには、一切答えず、ただ背を伸ばして美しい笑顔を見せた。

離宮の車寄せに馬車を停め、おりたつたエンジュたち、「丁寧へ」恭しく案内役が灯籠を持つて、広間への道を示す。

今宵は離宮の人工池の上に設けられた大きな桟敷を幾つもつないだ屋形を会場として、宴が開かれるらしい。護衛たちのかかげる松明の向こうに、ひしめき合つ馬車が見える。

雨音は、「「」」と指をさす。
それほどの数の貴族が集まっているところだ。

「近隣国の商人、外交官なんか來ているんじゃないかな」「リドが呴くのを、コウヒは耳に留める。
不意に、部屋を外国の物で取り揃えたナルミヤの顔が浮かんだ。
「帝は、^{トックニ}外国に開かれた心をお持ちのですね」「まあ、國をひらく」とを推し進められた方であらせられるからね、」

エンジュも雨音もまだ生まれる前の話だが、この国は長く鎮国政策をとつて閉塞状態にあり、それを政変によって打開したのが、當時即位8年であった今の帝であった。

「リドお兄様、異國の方を見る」とはできるの、「そうじろじろと見ないでおくれよ」「まあ、そんな行儀の悪い」とはしないわ、と頬を膨らませるエンジュに、笑つてカラが言つ。「君に見つめられたら、勘違ひしてしまつ輩が出るかもしね」

「そんなことにはならないわ。だつて私、あと一月もすれば、西部へ嫁ぐのよ」

世間話をするかのようにあつけらかんとHンジュが答えれば、雨音が眉間にたて皺をつくり訂正する。

「Hンジュ、嫁ぐのではない。お前は約定のため、西家へ居を移すだけだ」

「あら、違うの、」

どうせ、一年もすれば正式に婚姻を結ぶことになるんでしょ。

言い返したが、Hンジュにも分かつていて。

状況が変われば、彼女は白桜家の婚約者から人質となる。あるいは、婚約は白紙となり青家に戻ることになるだろ？

最悪の場合、命で約定をあがなうことになるはずだ。

父君が交わした内容がどんなものなのか、知ることはできなかつたけれど。

「ウォン様。約束をお守りくださいませ」

「ウヒが釘をさすと、雨音は不機嫌そうに口を開き結んだ。剣呑な視線をウヒに投げたが、静かに視線が交わるに及んで、ふいと視線を外す。

リドはそんな友人を興味深そうに、じつと見つめていたが、不意に吹き出した。

「ああ、ほんとうに。なんて顔をしてるんだい、ウォン」

「ほら、行くぞ。もうそこだ」

雨音が仏頂面でHンジュの手をぐいぐいひいて歩を速めると、リドは苦笑しながらウヒと続いた。

エンジュのすぐ後ろで、リドの笑う気配がする。

石の続き回廊からよく磨かれた漆ぬりの橋を渡ると、桟敷についた。

まるで、昼間のように光々と明かりがともされ、水面をきらめりと反射する。

先の広間からは、軽やかな音楽と談笑する幾たまりもの声が華やかに耳に入つたが、リドによれば皇室で催される祝宴としては、規模の小さなものであるといつ。

「招かれた人々も、それほど重みがあるとは言えない。若者が多いし、皆、軽装だ」

リドが囁いたのが耳に入つたが、初めて夜会なるものに参加するエンジュにとっては、比べようがない。

「父上がお前のためここの席を選んでくれて、良かった」

雨音も言った。

4人は、鏡と蠟燭で照り映えるシャンデリアが吊られた広間へ足を踏み入れる。

入り口では侍従が朗々と口上を述べ、広間にいる客人たちの名を紹介した。

兄も修学中であり、このような場には慣れていないはずなのだが、そういうことを全く感じさせない、堂々とした身ぶりだ。

1の広間の奥、次の広間へ向かつて、ゆつたりと進みながら、知己の貴族に会えば軽くお辞儀をし、声をかけられれば和やかに挨拶を交わした。

エンジュも名を問われたら微笑んで答え、失礼にならないほど

挨拶と世辞を受けることを繰り返した。

2つ目の広間の中ほどまできたとき、いつの間にか、コウヒビードが消えていたことを知る。

視線で2人を探すエンジュに、雨音は耳元で言った。

「2人になら、後で会える」お前の挨拶が終わったら。その言葉に、エンジュは今日の目的を思い起した。

それにしても、贅を尽くした夜会であることは、脇に並べられたテーブルのとりどりの花々や飲み物の豊富さ、珍しい食べ物にも見て取れる。

いよいよ冬も到来だと云うのに、溢れんばかりの花の数には、贅沢を知るエンジュでも、驚嘆してしまう。

高い天井からは、織りの美しい紗がいくつも流れしており、テラスの明るさを調整している。

立食を楽しんだり、カウチでくつろいだりする着飾った人々の波を、2人は幾度も通り過ぎた。

「 ですか、姫君？」

「え？」

ぼんやりと意識を戻すと、赤いケープを身につけた明らかに外国の者と知れる壯年の男が、エンジュの返事を待つように皿を覗き込んでいる。

「すまない、妹はこのよつた席が初めてなものでね」少し緊張しているんだ。

雨音が苦笑いで、謝った。

エンジュは兄の言葉に赤面し、慌てて返事する。

「失礼しました、今なんと、おっしゃったのですか、」「初めてでしたか、これはこれは…。今夜のお召し物は、彩白サイハクのものですが、どうかがつたのです」

いや、わたしは織物の商売を手掛けておりましてね。染めが余りにも美しかったものですから、と言ひ。

大陸南部に特徴的な舌を巻いた発音が珍しい。

遠くイスアンという国から来たというその商人は、しげしげとエンジュを、いや彼女のドレスを見つめた。

エンジュは首を傾げた。

自分が今まとう衣は、白無地で、ドレスとして仕立てるときに刺繡はしただろうが染めていない。

彼女がそう告げると、男と一緒に兄までもが笑つた。

「エンジュ、その衣は薄く鈍色の光沢を持っているだらうへ。

蚕から糸を紡ぎ、特別な木から得られる液で染めた白だ。」の国
の…いいや、西でも一部の者しか身につけられない」

蝶丈白、チョウジョウハク

「…というのだと、教えてくれる。

確かに、羽化した蝶が初めて翅を広げた時のような、濡れたような薄い鼠色に近い、えも言われぬ美しい光沢を放っている。
製法は口伝で、代々の職人たちしか知らないといふ。

」

「そうですか、これがかの…。わたしも、初めて見ました」「妹は近々、十一西家へ嫁ぐことが決まつていてのですよ

ああ、道理で。と雨音と男との間で、笑みと頷きが交わされる。

「おめでとうござります、姫君」

「ありがとう」

エンジュが作法通り、軽く膝を折ったところで、雨音に腕をとられる。

「では、これで」

雨音は口元に笑みをつくつたまま、エンジュを連れて歩き始める。兄の笑顔が嘘ものだと知つていて、「どうなさつたの、」と尋ねた。

「どうもしないさ」

「怒つていらつしゃる?」

「いや、エンジュ。彼は確かめただけだ

何を?と問う妹に、彼は唇を皮肉げに歪めた。

「噂を、だよ。青家の公女が婚約したと聞いて、本当かどうか確かめに来たのさ」

いかにも商人らしい方法でね、と付け加える。

「でも、わたしの婚約はおおやけにされたはずでは?」

「帝が認めなければ、貴族のどんな関係も許されることはない」

2人は、2つめの広間を出るとゆるいアーチの橋を渡った。

一層絢爛な3つ目の広間へ足を踏み入れる。

雨音は表情を消し、さきほどよりも強くエンジュの手を握った。

2人が歩みを進めるたびに、扇の奥で貴婦人たちがひそやかな会話が交わしているのが分かる。

どうやら、注目を集めているらしい。

居心地の悪さを感じながら、エンジュは自分たちが夜会の新参者で、しかも兄が青家の青をまとっているせいだなどと推測した。

ひとりわ人だかりが出来てゐる輪の、少し離れたところで、
雨音は足を止めた。

「（）」

「何を、と聞くまでもない。」

広間の奥、一段高くなつた場所には、玉座が据えられている。
椅子の背には、皇家を守護するといつて麒麟キリンが向かい合つて四頭、
黄金で彫られていた。

周囲の談笑の様子から察するに、まだしばらく帝の登場はなさそうである。

「ああ、ウオンじゃないか」

人だかりの中から、兄と同世代の青年たちが一ぢからに気付いて、
親しげに声をかけた。

「なんだ、休暇は領地に戻るんじゃなかつたのか」

「こんなところで会うなんて、驚きだな」

「どこの令嬢を連れてきたんだ、水臭いじゃないか」

「俺たちにも紹介しないよ、なあ」

あつとこつ間に、背の高い十数人の青年たちに周りを囲まれ、工
ンジューは兄の背後に隠れるよつて息をつめた。

「なんだ、お前たちか」

「なんだとはなんだ、お前こそなんだよ、その服」

「その言葉、そっくりお前に返してやる」

野次にも似た笑い声がどつと上がる。

ぐだけた調子で語られる言葉とは裏腹に、彼らの発音は生糸の都周辺の上流貴族のものであり、衣装は贅を尽くしたものだ。

「おい、やめる。妹が齎えてるだろ」

後ろをのぞき込むとする青年たちを、片手で払つようあじらひ、雨音もずっと気楽な調子で答えていた。

「妹おー!？」

「おお、とじよめきのよひな声があがる。」

「おう。俺たちは帝へ挨拶に来たんだ、親父の命令でな。絶対、邪魔するなよ」

家にいるときでさえ聞かない、ぞんざいな口ぶりで釘をさす。初めて兄が、『俺』『親父』といふのを耳にした。ただ呆気にとられていうと、雨音がくるりと振りかえつて彼女に言つ。

「学院で一緒にやつらだ。面倒だから、お前は挨拶しなくていい」

「ウォン~」

「おいおい!」

「薄情な奴だな、」

すぐさま、抗議の声が同時に上がる。

ハンジュはつひと笑つてしまつた。

兄の学院生活の一端が垣間見えたようで、嬉しかつた。もう怖くない。

雨音の横に並んで、彼女は作法の教師が完璧だと太鼓判を押したお辞儀をする。

「初めまして、皆さま。Hンジュと申します。兄がいつもお世話になっています」

「世話してやつてるの間違いだな、」

雨音が口をはさんだが、それには答える者はなく、その場には静かな沈黙が落ちた。

数秒後に、ため息にも似た感嘆のざよめきが彼らからもれる。
我に返つて最初に口を開いたのは、雨音に気付いた特に大柄な青年だ。

「私は、都の北に領地を拝領しております、瑛周ヒヤシュウの子伯ヒロセです。お見知りおきを」

「あ、抜け駆けだぞ！」

私は、私は、とエンジュは一瞬で輪の中心にひきいれられ、身をのりだすように次々に名乗られる。

彼らの笑顔が少し怖い、とHンジュは思つた。

「おい、ウォン。俺たち、お前から妹の話なんか聞いたこともないぞ」

「そつだ！なんで今まで隠してた、」

兄は「やれやれ」と肩をすくめると、仲間たちに宣言する。
「そりやそつだ。お前たちになんか、言えるか。手を出すなよ」
すでに嫁ぎ先は決まつてゐる。

その言葉に、青年たちから一斉にブーリングが起きた。

同年代の青年たちに囲まれてみると、まるで学校にいるようだ、エンジュは胸が沸き立つのを感じる。知らず、笑みがこぼれた。

なんだなんだと軽口を言ひ合つてゐると、輪の外側にいる方から

「おこ、そろそろだらう」と声がかかる。そうするついで、衣ずれとともにさわさわと人がひいていく気配が伝わってきた。

「お出ましか

雨音が息をつくのと同時に、儀礼官がひときわ高い声で帝の来臨を3度、伝えた。

では後で、また、と人々に挨拶が交わされ、波がひくように、声が消えてゆく。

広間の中央は道をつくるようにあけられ、それぞれがまるで計ったように両際に寄つた。

雨音もヒンジュを連れて、段に近い窓際へさがる。

いつか、人々が深々と礼をとり、緊張が場を支配する。衣がする気配と、人々が4度の太鼓の音で、頭を起こすのが見えた。

エンジュも兄にならい、丼をあげる。

玉座にはひとりの男が座っていた。

「皆、今宵はよく来てくれた」

感情のない、無機質な声。

玉座の男は、確か50もすぎた年齢に達しているはずだが、全くその年にはみえなかつた。

玉の落ちる冠をのせた髪は、多少白いものが交じつてはいるものの豊かで黒々としていたし、女性のように整つた顔には染みや皺が見られない。

そして、人形のように感情を宿していない瞳が下座を睥睨している。

一瞬こちらを見た、とエンジュは緊張した。
だが、それは杞憂であったようだ。

帝は、肘おきに置いた手を軽く挙げ、右に立つ若い男をさした。
「我が息子、四富シバヤを紹介しよう」

年の頃は、20の半ばあたりであろうか。

玉座の隣に立つ青年は、柔軟な笑顔で一堂を眺めた。

髪は銀糸のような白で、耳はほのめのよじに紅い。

『神の愛である者』と呼ばれる容貌だ。

白髪に紅目。

これは、真正帝国で最も重んじられる容色である。

この容姿で生まれた者はいかなる家柄であろうとも、3歳になつたら神殿へ預けられることが決められている。

神殿で特殊な教育を受け、将来は神官・神女となり神に仕える。俗世へ戻る者もいるが、大半は聖職者として神殿の奥で一生を過ごす。

「おお、というどよめきが人々からもれた。

「神の御子だ」

「あの噂は本当だったのか」

帝の言葉に囁き返すのが、耳に入る。

これが父君と兄が話していたことなのだろうか。

帝は、後継者に関して存念を明らかにしていない。

この時期に、成人した息子を神殿より呼び戻すといふことが、どのような憶測を呼ぶのか、30年も帝位に座つた人物ならば、分らぬではあるまい。

エンジュが兄を見上げると、彼は食い入るように若い皇子を見つめていた。

いかなる人物なのか、表情から読み取るうといふのか。繫いだ手に力を込めるとき、雨音はエンジュに視線を戻す。

「大丈夫か、」

「兄君は？」

大丈夫だ、と微笑が落ちる。

雨音は、エンジュの腰に手を回して、静かに時間を待つた。

しばらくすると儀礼官の合図とともに、人々は列をつくり、帝に挨拶をはじめた。

順番はあらかじめ決められており、どんなに高位の貴族であろうと、例外はない。

また、この場にあっても奏上が叶わない人々も多くいるという。貴族たちの格式ばつた挨拶に帝は軽く頷き返すのが一般的なようで、ひと言でも賜つた者には周囲から羨望の視線が投げられた。

「次は、僕たちの番だ」

「ええ」

2人は、おおやけには位を「えられていらないにも関わらず、9番目の順が」とえられていた。

エンジュは雨音と中央に進み出て、額の前で手を重ね、膝を曲げて礼をとった。

寿ぎの唱を、静かに歌つ。

「おもてをあげるが良い」

許しを得て顔をあげると、微妙な表情の変化だったが、帝の視線が揺れた。

玉座から立ち上がり、ゆつたりとした足取りで2人に近づくと、彼は何かを口のなかで呴いた。

その呴きを拾つたものはいなかつただろうが、向けられたエンジュは「まさか、」と彼が確かに言つたのが分かつた。

雨音にもそれに気が付いたようだつた。

だが、何事もなかつたように、兄はエンジュをそつと押しだした。前へ進むともう一度、エンジュは深く膝を折つた。

「初めて御意を得ます」

「セイリコウ
青龍から聞いている」

その返事に、帝が自分の婚約のことを話しているのだと悟る。
これは始めるからの取り決めなのだろう。

「名は」

「エンジュと申します」

「良い名だ。父はあなたを手放すのが惜しかろう、」

「もったいないお言葉にござります」

答え、田をふせたエンジュは、周囲からため息が広がり、じば
りとして緊張感をともなつた沈黙が落ちたのに気が付いた。
エンジュのそばに影が落ちている。

しばらくしてHンジュの左に背の高い人物が長靴をならして立つた。

婦人たちの「彼よ」、「あれが」と高くさえずる声が聞こえる。マントを脱つて片膝をついた氣配が落ち、その人物が耳田を集め若い男なのだと分かった。

衣にたきしめた香がかおり、床にうつる影が濃く落ちた。御影石の床に、白い裾が広がっている。

蝶丈白だ。

Hンジュは田をふせたまま狼狽して、横を見ることができなかつた。

「ちょうど良い」ところに来た、白桜の息子よ。今、そなたの婚約者と話したところだ」

帝のその言葉で、はつきりと彼が自分の未来の夫なのだと知る。不意打ちだった。

こんな状態で初めて顔を会わせるなど、こつ予想しただろ。内心動搖しているエンジュを挟むように、雨音が穏やかな笑みを浮かべて向き合った。

「白桜家の御子息か。私は青家長子・雨音。今宵は妹を連れ、致参しました」

「丁寧な挨拶、痛み入ります」
彼が立ちあがつて、答える。

2人のすべらかな挨拶に、この場で出合つことは両家の合意であ

つたのだと理解し、Hンジュは唇を噛みしめた。

「エンジュ、挨拶なさい」

兄のひと言で、Hンジュは彼に向きなおった。

こんなのは聞いていない。

卑怯だ、と兄に叫びたかつたが、衆人の前でそんなみつともない真似はできない。

ぐつと言葉をのみこむ。

礼をとり、混乱を断ち切るように、頭をあげた。

「青龍の娘エンジュ」「いらっしゃいます
「初めまして、白桜のソウセツです」

顔をあげた先に、白い青年の顔が目につびこんでくる。綾の組みひもでポニー・テールに結ばれた美しい黒髪。男には珍しいほどの色白の面。

口唇と眉は細く、それが彼の纖細で生真面目な表情をひきたてている。

そして、西家の白の衣。

彼の切れ長の一重の瞳は、凧いで静かな意志を示してあり、老成している。

眉間に薄く皺が刻まれていた。

年は、29だという。こうして直接対すると、年相応に見えた。

じりじろ見つめていたのが、相手に伝わったらしい。

怪訝な表情で、小声で問われた。

「わたしの顔が、なにか？」

「い、いえ」

赤面して言葉につまる。

2人のもとへ、帝が段を下りて近づくのが分かつた。

唐突に、ソウセツの甲に彼女の手が重ねられる。

その行為によって、婚約が承諾されたと周囲に伝わったようだ。それぞれの扇の奥や耳元で、ため息のようなささやきが交わされている。

「楽しんでいくといい」

それが終了の合図だつたらしい。

ソウセツに手をとられたまま退出し、気付いたら一の広間にいた。音楽が軽やかに演奏されている。兄の姿がなかつた。あわてて周囲を見回す。

「あの…………、兄君は？」

「あそこです。話があると」

エンジュはソウセツの差した方を見た。

兄はテラスの入り口付近で、恰幅のよい貴族を相手に何やら話しこんでいる。

どうやら、簡単には戻つてこなれそつた様子である。

「大丈夫ですか」

「はい」

顔をこわばらせたままのエンジュを前に、ソウセツは戸惑つたような表情を浮かべた。

「夜会は初めてですか？」

「ええ。このような華やかな場には、気おくれがします」

「帝都の方は、絢爛豪華を好むのだと思つていました」

「そのようなことは…。帝都へは、よくおいでなのですか？」
「いえ、数年に一度ほど。でも、故郷の空気がよいのか…わたしには、はじめません」

率直な話し方をする人だ、とエンジュは感じた。

西方では、貴族の子弟は古き慣習に従つて、騎士たるべく教育を受けるという。

ソウセツの受け答えは、実直を良しとする騎士の姿勢が垣間見えるようだった。

エンジュは会話の糸口をつかみかねたまま、口を閉じた。
もう話すことがない。

当然だ、さつき会つたばかりの相手なのだから。

ソウセツはそれに気付いたのか、苦笑いする。

「この婚約が、気に入りませんか？」

エンジュが答える前に、彼は首を横に振った。

「すでに、拒否できる状況ではありませんね。あなたには西家に来ていただかねばならない…われわれのために」

ソウセツの声は断固としていたが、表情はそれを裏切っている。生まれも育ちも違う、年さえ離れたエンジュを、扱いあぐねているようにも思えた。

エンジュは頷いた。

この婚約に、私情の入る余地はない。

ソウセツが彼女自身ではなく、あまねく帝国に影響を及ぼすことのできる青家の血を欲していることは明確に描くことができた。

「ええ、分かつています」

ソウセツはほつとしたように、エンジュに手を重ねた。

そうすると、彼の手が大きく、かたいことがわかる。剣をふるう者の手だ。

「あなたの安全は約束します。条件は一つ」

私の仕事に干渉しないこと

ソウセツはそう、言った。

「お礼を申し上げるのを忘れていましたわ」

「お礼？」

ええ、とコウヒは目線をあげてリドに微笑んだ。

「私を誘つてくださいましたことです」

初めてのエンドジョーが心強いだろ？、と彼女を呼んでくれたのはリドだった。

礼などこりないと彼が横に首を振ると、コウヒは視線を落とす。

2人は、1の広間の上部に設けられた開放的なバルコニーにいた。バルコニーとはいっても、屋外にあるわけではなく、広間と広間をつなぐ畠づくりの棟敷のような場所で、ここからは、1の広間と2番田の広間のどちらもが望める。

辺りはほの暗く灯籠がゆれ、光の輪を床に落としている。ひと気はまばらで、休息を求めてやってきた男性や、少し年配のカップルがそれぞれの時間を楽しんでおり、コウヒとリドは畠を遺る者もほとんどない。

「コウヒが眩しそうに階下に畠を向けると、2番田の広間では、ちようど管弦の音に合わせて円舞がはじまつたところだった。

「あれが、エンドジョーの相手だね」

「どんな話をされているのでしょうか？」

「心配性だね、きみは」

「もちろんですわ」

女性たちのとつぱりの華やかなドレスが広がるのを、見下ろしな

がら、

「ウヒは「妹みたいなものですから」と言った。

その視線の先には、線の細い青年に手をとられてほほ笑むエンジコの姿がある。

多少の緊張の色を浮かべているのを認め、ウヒはため息のような息をはいた。

リドはウヒに顔を近づける。

「エンジコばかり見てても仕方ない、踊るつか?」

「いいで?」

「ウヒは、向き直つて問うた。

リドは少年のように瞳を輝かせている。

「むりん。　一曲、お相手を」

「よろしいわ」

「ウヒが頷くと、リドはにっこり笑つて、バルコニーの中央へ手をひいて移動した。

風にのって、弦楽器の音が聞こえる。

リドに合わせてステップを踏みながら、ウヒは雨音の言葉があながち間違いではないと思つた。

穏やかな身のこなしや気遣い、ダンスのリードの良さは、彼の魅力をよりひき立てる。

「お上手ですね」

「ありがとう、きみも」変わつてないね。

「そうでしょうか?あれから一度も踊つていませんのよ」

「春節の舞踏会、だつたかな」

聞かれて、ウヒは「はい」と応えた。

忘れようがない。

女学院で催された卒業記念の舞踏会だつた。

在校生と家族を含めた関係者を招いて行われる、大規模な夜会。その日、卒業を迎えたコウヒにとつては、これが学院で参加する最後の華やかな舞台だった。

たくさんの男性に入れ替わり立ち替わり、踊った。最優等生として祝辞を述べた彼女は、常に学院では注目の人であり、人に囲まれることに慣れてもいた。

ひつきりなしに続く申し込み。誘い。

そこへ、リドがやつてきたのだった。

「きみは、私の申しこみを笑った」

恨みがましい口調でリドが言えば、「コウヒは当時のことを思い出して、吹き出してしまう。

「だって、あなたは・・・」

「冗談だと思つたんですもの。

そうだ。

緊張しながらダンスを申し込みに来た少年のことを、今でもコウヒはまだまだ思い浮かべることができる。

頬を染めた真剣な顔。

差しだした手が、少し震えていた。

『僕と一曲踊つていただけますか?』

「いいわ、つって言いましたわよ」

10年も昔のことです、そろそろ時効ですわね。コウヒは、田を伏せる。

そうは言つたものの、コウヒの胸にある田の思いがよみがえる。リドはまだ本当に、小さな少年だった。
あの時、コウヒの肩にも背が届かなかつたのだから。

いつか背が伸び、声も低くなり、そして「私」と言つぱつになつ

た。

「それで、私の申し出を勧めてくれた？」

リドは曖昧に、頬をひきあげた。

変わらず笑みを浮かべているが、その口元が緊張しているのを、
「カヒ」は感じた。

「カヒ」は重ねて挙げた手の下へべつて、ターンをして、一札を返した。

曲が終つを告げてこる。顔をあげた「カヒ」はコロコロの皿をじっと見

つめた。

息を整えながら、「カヒ」は繋いだ手を離した。
リドが焦れたように、皿葉を継ぐ。

「カヒ、このままおみせ変わらないのかい？」

「おっしゃる意味がわかりませんわ」

「ハンジューについて、西家へ行くのが、と聞こえてくる
あなたの返事をむりいたい、今」「」

「　ハジュヒにて、西家へ行くのが、と聞いてる」
きみの返事をもらいたい、今じいで。
リドはせき込むよう、口元に息を吹いた。

瞳は怖いほど、真剣な色を浮かべている。
それで、彼が本気で求婚しようとしているのだと、口元にせき分
かつた。

一時の氣まぐれだと想っていたの。」
口元にせき分めの下の腕に触れて、口元を引き下げる。

「…あなたには、いたえられません」
その返事に、リドは顔を凍らせた。
「ウォンのことは待つても無駄だよ」
「ウォン様？」

急にHンジュから兩音ウォンへ話題が移る。
リドは、口元の白い頬に手を伸ばした。

口元は半歩さがりながら、リドの目を覗き込む。真意を聞いた
い。

頬のあたりが強張るのが、分かった。

「ウォン様が、どうこう…？」
「きみがウォンを好きなのは知っている」
「何を…。そんなことはありませんわ。なんとも思つておつません」

「なんとも…嘘だらけ、口元」
「いいえ」
「ムキになつてる」

リドが苦く笑う。

「カウヒは顔を赤らめながら、違います、とかたくなに首を振った。

「私の家は、あなたに益をもたらすことができません」

「カウヒは努めて冷静な声を保とつとした。

「世事につとい、貴族とは名ばかりの家ですもの」ただ、それだけですわ。

「そりかね？世事に疎いことこの点では、私の家も相当のものだと思うけど。

だから、気にする」とはないよ」

あつけらかんと言ひ、首を傾げる様子に、カウヒはため息をついた。

彼は分かつていないので。

四大公家の一翼を担う黒家のリドとは、同じ貴族といつても格が違いすぎる。

この国では、貴族の序列は厳格に定められ、その古さと血筋の確かさを尊ぶ慣習によつて、殆ど変動はしない。もう百数十年も。新しく叙爵される貴族の位は、およそ一代限りのもので、彼らの多くは勢力を持たない。

国首時代の法によつてそれは決められている。

「それに私は、家族の鼻つまみ者ですよ」

「じゃあ、帰る必要はないね」

私と来ればいい。

リドがにっこりと笑うので、カウヒはめまいがしてきた。
彼は何を言つてゐるのだらう。

「私の話を聞いていらっしゃいます？」

「うん、勿論」

「私は家から縁を切られています。だから、
「私の家族になればいい。セイジコウ青龍がきみの後見をしてくれるだらう」
青龍は否とは言わないはずだ。

リドは続ける。

確かにその通りではあるだらう。青龍は、実家からコウヒを常に
守ってくれる。

彼女が望みさえすれば。コウヒは少しの間、言葉が継げなかつた。

「私のことが嫌い?」

「いいえ」

それは違う。

コウヒは即答した。

「良かつた」

何が良かつたというのだらう。
婉曲に断つているといつのこと。しかし、コウヒの田から視線を離
れずにして、リドは言つた。

「すぐに」とは言わない。私は氣長な方なんだ
返事は保留でかまわない。

「リド様…」

「でも、否定の言葉は聞かない」

リドは突如、強い調子で言つた。コウヒの肩を掴んで「コウヒ、
と呼ぶ。

「私の気持ちを否定しないで欲しい。ずっと、好きだったんだ」

「私は、」

「今、きみが誰を好きでもかまわない」たとえウオンでも。

リドは抑えた静かな声に戻して、言つた。

彼の琥珀色の瞳に映つた彼女の表情は、今にも泣きそうに揺れて

いる。

「エンジュと一緒に行くといつなり、止めない。研究もつづけるといい」

私は待とう。

リドはふいに視線を外すと、広間に繰り広げられている煌びやかな人々に目をやった。

重い感情がす、と断ち切れ、コウヒは足りていらない酸素を求めるように息をすつた。

そして、彼の視線を追うように階下を臨む。

ひとりわ華やかな集団のなかに、偶然、知った顔を見つけた。

「あれは……」タルヒ。

咳きは、リドに届いたらしい。彼はひとり言のように言った。

「珍しいこともあるもんだね、彼女。妹が心配で来たのかな」

「隣にいるのは、誰でしょう?」

「彼が四富^{シミヤ}だよ」

四富^{シミヤ}、「ウヒは口のなかで咳く。

遠田にも、その白髪の青年が、若い貴族たちの中心にいることは分かった。

四富は、近頃貴族の間でよく耳にするよくなつた名前だ。

長く空白になつてゐる皇太子の座に彼がつくのは時間の問題だらうと、見られている。

彼のそばで、ひとりわ目をひく少女。

髪を燃えるように赤く染め、巻貝^{カキ}のよつに結いあげた上に朱珊瑚の宝飾品で飾りたてている。

黒緋のドレスには歪み真珠が鱗のよつに縫い込まれており、そんな豪奢な格好に負けないくらい艶然と自信にあふれた微笑みを浮か

べていた。

エンジュの異母姉だ。

「奇抜だ」

リドの素直な感想に、口ウヒはちょっと笑った。

昔からタルヒは、人目をひく少女だった。

美しい容姿と意思の強い瞳に自負心をにじませて、はつやつとしたもの言いをした。

こうして彼女の姿を見るのは、じつに数年ぶりだ。

手紙はしおりちゅう交換していたが。

「いつものことですわ。タルヒらしい、といつか」

リドの推測は間違つていない、と口ウヒは思う。

タルヒは彼女なりの感覚であるが、離れて暮らす妹を気にかけている。

ここにこれほど田立つ格好で来たのは、妹に気付いてもらいために違いない。

「ちょっとやりすぎですかれど……」

「うーん……いつ見ても何といふか。しかし、彼女はちょっと……、苦手だな」

そうリドが呟くのと、口ウヒは吹き出した。

苦手どころではあるまご。

女学院時代、タルヒはコウヒの『薔』だった。

監督生と初級生。

『お姉さま』であるコウヒの卒業の祝いとなつたあの舞踏会で、ダンスを申し込んだリドに言い放つたひと言は、忘れられるものではない。

タルヒは、目をつりあげて2人の横から割って入ったのだった。

「『わたくしのお姉さまから手を離しなさい、坊や』だったっけ？」

「『めんさい』」

「きみが謝ることじやないよ、『コウヒ』」

彼女のあれ、嫉妬だつたんだね。

「ウヒは強張つた笑顔をはりつけた。

世間知らずのタルヒが起こす騒動に、いつの間にか巻き込まれ、その後始末に奔走した日々を思い出す。強気でけして自分を曲げず、癪癩を起こすこともあつた。

入学したころのタルヒはその言動がもとで、同級生とだけでなく多くの上級生とも衝突を繰り返していた。見かねたコウヒが、彼女を『ひきとつた』のだ。

「タルヒももう、大人ですわ」

「…そう。だと、いいね」

リドが奥歯に物のはさまつたような言い方をする。

「ウヒは眉をあげ、目で理由を問うが彼はふわりと笑つただけで、答えは返らなかつた。

卒業後も『紅梅院』^{（じゅめいん）}で教鞭をとつているタルヒと、隣接する『緋の学院』に在籍しているリドとは、今でも行き来があると聞いている。

「『の前に会つたときも、きみの話になつたよ』
と、リドはそれだけを言つた。

「ウヒは返事に窮し、速度が変わつた音楽に耳を傾けるふりをして、タルヒがゆつたりと窓際に近づいてくるを見つめていた。

「飲み物をとつてきましょ」「ひ」とソウセツがここを離れてから、数分たつ。

エンジュはかたわらのソファに腰を下ろした。
新しい靴が足を締め付けているようで、つま先がしびれるように、
痛い。

エンジュは顔をしかめると、スカートの内側でそつと靴を脱いだ。
衣の裾は床をひきずる長さがあるから、人から見える心配はしな
くていい。

「靴は、はいたほうがいいわよ」

突然、斜め後ろから低い声が落ちて、エンジュはびくり、と体を
震わせた。

上体をひねるようにして、相手を確認する。

「…姉さまー。」

「あら、驚かせたかしら」

久しぶりね、と笑って、姉のタルヒがエンジュの顔をのぞき込ん
できた。

彼女の手には、葡萄酒が入ったとおぼしきグラスが握られており、
それをエンジュに渡す。

「エンジュの騎士はどうくお出かけ?」

この問いかけに、姉がエンジュの行動をずっと見ていたことを知
る。

「彼は私の騎士ではありませんわ、姉さま」

「ふうん、そう

じゃあ、しばらくわたくしと話をしましょ。う。

彼女はそう一人勝手に決め、エンジュに飲み物を勧めた。エンジュは「いただきます」と口へ運ぶ。思つたとおり、南部特産の黒葡萄酒だった。

ひと口喉を潤すと、自分がいかに渴いていたかを実感する。ひどいきに傾けようとする妹の手に自分の手を添えるようにしてタルヒは、グラスを脇に取り上げた。

「全部はだめ」
口にする物には気をつかいなさい。人から勧められたものは、特に。
「親しい人からのものでも？」
「親しい人は、余計によ」

隣に腰をおろし、頬づえをついてエンジュの顔をしげしげと見つめながら言う。

「ずい分、会つてなかつたわね、エンジュ」
「お会いしたかつたわ」
「わたくしもよ。でも『あの方』がいるから、おまえのところへは行けない」
エンジュは返答に困った。
タルヒは昔から、父君のことを嫌っていた。

姉の母上と父君が不仲だったから、それを引きずつているのではないか、とオノセが言ったことがある。
タルヒは、けつして父を父とは呼ばない。
「あの方は相変わらず？冷たくて、無関心、神経質で…
ああ、じゅやつて思い出すだけでも虫唾が走る」「る

あけすけな言い方に、そう姉はこういう人だった、とエンジュは思い出した。

現在タルヒは、青家とは直接の関係を持たない。
赤家の分家の一つ、朱綏家の養女となり、『紅梅院』で教鞭をとつているためだ。

この女学院は、貴族や名望家の子女を集める神殿の外部団体で、男子校『緋の学院』と対になっている。
両学院は実際のところ、その名が示す通り、南部諸侯である赤家が管理、運営の全権を握っていた。

「セキラ様は、お元気ですか？」

エンジュは話題を変えようと、急いで姉の母の息災を尋ねた。

「昨日、文をいただいたわ」お元気なのでしょうね。

エンジュは、義母であるタルヒの実母には全く面識がない。
セキラは父君の最初の正妻で、朱綏家から嫁いできた。

夫とは水と油のような関係で、タルヒの誕生後すぐに別居したといつ。

父がついに別の女性に雨音を産ませると、彼女は一人実家へ戻ってしまった。

タルヒが妹に、母親について詳しく語ったことはない。

エンジュの持つ情報の多くは、タルヒの『花』であったコウヒによる。

「今日は、お姉さまも来ているのでしょうか？」

今度は、姉がエンジュに熱心に尋ねた。

タルヒにとつてコウヒは今でも、唯一無一の『お姉さま』なのだ。

エンジュは、入り口まで一緒に立ったことを告げる。

「その見立て、お姉さまでしょう？ エンジュ」

エンジュのドレスをしげしげと見つめて、羨ましそうにタルヒは言った。

「ええ、正解。採寸のまえに、いつもに考えてもらつたの。花は
リドお兄様だけ」

「彼、来ているの？」

「ええ、今はコウヒと一緒にいると思つわ」

「そう、そうよね。……いわ」

何がいいのか、よくわからなかつたが、エンジュは姉の言葉に頷いた。

「コウヒのことを聞きたがるのも、相変わらずだ。
タルヒは口をひきむんで、「だいじょうぶ」と自分を納得させ
るように囁き、グラスに残つた葡萄酒を傾ける。

「ところで姉さま、」

エンジュは、空になつていてグラスをじっと見つめて口を開いた。

「あら、なあに？」

「姉さまのお知り合いなの？」

怪訝な表情でエンジュの視線を追つたタルヒは、相手に気付いて
につりと笑つた。

「… 四宮様」

親しげに相手の名前を呼び、ゆっくり立ち上がる。
それは玉座の隣に居た、あの青年だった。

見間違えようのない、銀髪に紅目の異形。

帝の皇子だ。

彼はタルヒに並ぶように一つ歩を進めると、手を広げて鷹揚に言った。

「貴女の姿が見えなかつたから、探してしまつた。邪魔をしただろうか？」

タルヒは「いいえ、殿下」と否定して、エンジュに田配せした。

靴を履けといふことらしく、エンジュはつま先で、脱ぎ捨てた靴をそつと手繰り寄せるとい、腰をあげる。

「妹を紹介しますわ、殿下。青家のエンジュです」

タルヒの言葉に、エンジュは大げさにならない程度に深く礼をとつた。

富廷では、田上の者の許しがなくては話しかけることができないといふ暗黙のルールがある。

四富は頷く。

「先ほど帝の御前で、会いましたね」

その言葉で口を開くのを許されたのが分かった。

「はい、今日は婚約の許しをいただきに参りました」

「そう… そうだったね。あれは実に、計算された演出だった」

「殿下」

タルヒのとがめるような口調に、四富は肩をすくめ「悪かつた」と手を伸ばした。

タルヒは半身をすらりして、その手をするとかわす。

「心もない謝済は受けません」

「これは手厳しい」

四富は大らかに笑う。

こうして彼に向き合つと、その身から立ち昇る力の大きさが鋭敏に伝わり、鳥肌がたつほどだ。

エンジュよりも彼の近くに立っている姉にそれが分からぬはずはない。

「妹のせいではありませんわ」

「分かっている」

なだめるような声で四富がアルハナエの腕に触れる。

今度は、彼女も拒まなかつた。

「エンジュ。殿下はね、わたくしの親しいお友達なの」

親しいお友達。

エンジュは、その言葉を口の中で反芻する。

権門の次代としてだけでなく名門校の教員としての顔も持つタルヒは、宮廷にも顔が広い。

美しく社交的な彼女の周りには、蜜に群がる蝶のように、常に異性が囲んでいるのだと、侍女たちが教えてくれたことがある。

華やかな噂には事欠かない姉だったが、その心が眞実誰のもののかは、エンジュには分からない。

「親密なお友達、だよ」

と四富はうそぶいた。

タルヒは彼を軽くにらんだが、エンジュにはその表情までもが親密さと映つた。

四富の紅い目が、悪戯っぽく輝いている。

彼は片手を伸ばすと、アルハナエの手にもつグラスに指をかけ、自らの口元へ運ぶ。

底に残った葡萄酒が彼の喉に消えた。

「殿下、」

「喉が渴いていたんだ、タルヒ
嘘おつしゃいな、と腕をつながるふりをしたタルヒに、四富は微笑
んだ。

「さあ、遊びはここまでだ。そろそろ、用意をしよう」

はい、とタルヒが頷いた。

エンジュが気づいて、周りを見渡すと、紗がかかったように遮断
されていて、誰の顔もはつきりとは見えない。

眼の前で姉と四富だけが平然として、じらりを見ている。
まるで、分厚い緞帳に閉じ込められているようだ。
ぞつとした。
畏だ。

空氣の薄い山頂にこもるよつて、こせこ、閉じ込められたこもるよつて、元氣みなむこと

息苦しい。

「な、何をなやつたの？」

「話をしやすくなるために、少し厚いカーテンをひいておいた」

術を使つて遮断したと言つたらいいらしい。

四面の隣で、タルヒは恐ろしげくらいに静かな田で、妹を見つめている。

「正直に話してくれたら、何もしないわ。隠しじるとまなしよ、Hンジユ」

「何を？」

「おまえの婚約のことを聞きたいの。…なぜ白桜なの？知つてることを話してくれるかしら」

「知りません」

どうして、そんなことをお聞きになるの？

Hンジユは、タルヒに訊き返した。

結界をはつてまで、妹に尋ねる話とは思えない。

「父君はいつだって、説明なんかさらないでしょ。…もしかしたら、兄君がご存じかもしれないけど」

タルヒは鼻をならして一蹴した。

「それは無いわね」

「コウヒこも、お母上のところまで行つてもうつたけど、成果はなかつたわ」

肩をすくめたエンジュの前で、タルヒと四富が顔を見合させていた。

「人は長い」と見つめあつていた。

まるで、心の中で話ができるみたいに。先にエンジュに視線を戻したのは、四富だった。

「正直に言つて、きみの返事次第では実力行使に及ばざるを得ない」

隠そうとするなら相応の手段をとる、と言つたらしい。
その声の不穏さと気の高まりを感じて、エンジュは彼が何をしようとしているのか知り、青ざめて首を横に振った。

タルヒは顔色をかえた。

「止めて！ わたくしの妹です」

「タルヒ」

「おやめください！」

「貴女は一度、同意したはずだ」

タルヒ。

遮られ、怒りに満ちた声で四富が名を呼べば、タルヒが顔をそむけたまま背にエンジュをかばう。

姉の背が強張っているのが、エンジュにも分かつた。

「家族をとるといふのか。…貴女を捨てた家だ」

「エンジュに罪はありません」

「タルヒ、」

荒々しい感情のなかにも親情を込めて彼が呼ぶと、タルヒは肩の力を抜いて、エンジュに向き直った。

姉の目には、揺れ動く心を映しだすように痛みが浮かんでいる。

「姉さま、いつたい・・・」

「選んだのよ、エンジュ」

疲れたような声で姉は言ひ。

四富が伸ばした手に、彼女はすがるよつて身を任せた。

美しい紅い目が、姉を見つめている。

四富の額には、第3の目といわれる、花びらにも似た紋が彫られていた。

神の御子であるという、しるしだ。

皇宮の女性たちも似たような化粧をしているが、こひらほもつと形が複雑でしかも消えることがない。

「タルヒ。貴女の大事なものに危害を加えるつもりはない」「信じています」

タルヒはしばし彼と向き合つていたが、表情を消しるとエンジュに重く口を開いた。

「エンジュ、わたくしたちは四富様を玉座に据えるつもりでいる。そのために、青家の情報が必要なの」

わたくしたち、というのが南部勢力であることは、政治にうといエンジュにも理解できた。

豊かで、中小貴族が多い南部は、昔から青家とは対立を繰り返してきた。

南部諸侯であるタルヒも、いやおうなく勢力争いに巻き込まれているといふことか。

エンジュは震える口を叱咤するよつて、言葉を紡いだ。

「父君と争うのですか。…この平和をくつがえすと？」

「そのようなつもりはない」

四富は即答したが、エンジュは信じられなかつた。

だいたい、父君は彼が有力候補だと語つていた。

玉座が欲しいならば、青家を探る必要はない。

玉座に一番近いところに、彼はもうすでに在るのだから。

「平和…おまえは、これが平和だというの?」

タルヒがひつかかつたのは、エンジュの別の言葉だつたらしく。何かに耐えるように視線を落とす。

「西との結びつきは、いつそつ均衡を危うくするところのよ。おまえは、」

「 はいはい。それ以上、妹を苛めないでくださいよ。姉上」

突然、薄暗いカーテンに光が差し込むように術が解かれ、雨音があらわれた。

タルヒははつと顔をあげる。

「ウオノ、雨音、いつ

「今ですよ」

皮肉げに応じる雨音の周りを、謁見の間で会つた青年たちがずらりと固めている。

ソウセツもいた。

皆一様に、息をつめるようにして四富とタルヒに対峙している。

エンジュは唐突に、兄君に手首をつかまれてひきよせられた。

背に庇われる。

「このような場所で、密談ですか?」

「違う、雨音。わたくしたちは、ただ…」

「ただ、何です?姉上」

雨音は吐き捨てるように呟いた。

「ホンジュは、兄の左の袖口をぎゅっと握る。

「どうおつもつか、お聞かせ願いたい

わたくしが、とこう言葉に兄が反応してくることは、ホンジュにも分かった。

雨音は怒氣をこらえている。

対するタルヒは静かな声に戻っていた。

「特別なことは何も。久方ぶりに妹と話がしたかっただけ」
その答えに雨音は唇を歪めた。

ソウセツが、雨音の右袖を軽く叩いて前に歩み出た。
強いで、四富を射抜く。

「殿下。このよつなやり方は不快です」
「それは残念だ。一応、配慮はしたつもりなのだが」
「帝御前の夜会のかたすみで、ですか」
「ほかに、方法も機会もなかつたものでね」
私は気が短いほうなんだ。
しつと四富は言つ。

互いに歩み寄る余地がないことを理解すると、ソウセツは口調をかえた。

「殿下、あなたは欲しいものを望まれるといふ」
「それは、君たちの協力が得られるといふことかな？」
「家同士を騒乱にひき込むことをやめてくれんなりば、静観しましょ

う

四富は口元に笑みをたたえた。

まるで、とても面白いことを聞いた、とでもこいつよつ。

「今は、といふことか？」

「ええ

「では、私も今は退ひつ

四面はそう言ひつゝタルヒの腕にふれ、身を翻した。

姉は、雨音とエンジュを見つめたが何も言わずに彼の後を追うように、広間の人波へ消えていった。

雨ざしを伝う水音がする。

エンジュは視線を硝子窓の向こうへ向けた。
雨が降る中庭をのぞむテラスで、リドが皇后と話をしている。
ながばささやくような、そして真剣な顔つきからは、2人が政治
に関することを話し合っているのだろう。

1昨日の夜会の終りは、散々だった。

姉とはあれきりで姿も見ることができなかつたし、兄君は馬車に
戻つても怒りが解けないようでひと言もエンジュと口を聞いてくれ
なかつた。

「ウヒはウヒで、父君に話があると出かけて行つたきり、姿を
見ない。

硝子の向こう側は、テラスで囲まれた広大な温室になつていて
皇宮の表奥、皇后のサロンだ。

エンジュは内輪の茶会に招かれていた。

朱鷺色で設えられたテラスは、全面が硝子張りになつており、贅
を尽くしたものである。

ここで、皇后は親しい客を招き、手づから茶を振る舞う。

皇后は、青家から嫁いだ人物で、父君の従兄妹にあたる。
子どもがないということもあって、普段は政務には一切かかわ
らず、新種の花の栽培に精を出している変わり者の后だ。

花が咲き乱れ蔓の延びるに任せた温室を眺めて、エンジュもつい
納得してしまつ。

Hンジュの左ななめには、ひとりの少女が座っている。

口をへの字に曲げて、けつして視線をあわせようとはしない相手をちらりと見ながら、Hンジュは心中でため息をついた。

どうして、ここにいるのよ。

彼女は、王族。それも帝のそばで補佐をつとめる黄葉オウバの富家富家のひとり娘だ。

名を、イトといつ。

それにして、と思う。

はじめて会ったときから、いけすかない相手だった。

『あら、あなたが青家の末の娘さん？お姉さまとはちがって、なんていつか…おかわいらしい方ね』

馬鹿にされたような響きを感じとつて、つい言い返してしまったのがいけなかつた。

『どうもありがとう。姉さまにも、あなたからだと、そういう答えするわ』

むつと、イトが口をひきむすんだ。

多分、初対面から、氣があわない相手だったにちがいない。

だが、皇后を訪ねるたびに、遊びに来ているといつ彼女にはち合わせることになつた。

『イトの父親はいそがしくてのう…。学校が休みのときは、姫のもとへ呼ぶよつにしているのだ』

仲良くしてやつておくれ。

そつ、皇后に頼まれても相手にその氣がないのなら、仲良くんてできない。

それなのに。

さつきだつて。

『2人とも、仲良くな』

と面に置いて、皇后とリードは席を離れたのだ。

やつかいだ。

そんな気持ちを表情にだしたまま、エンジュは田の前におかれた茶をすすつた。

沈黙が落ちて、どのくらいたつただろう。

「ねえ、あなた聞いてるの？」

エンジュはその問いかけに、顔をあげた。

イトは続ける。

「先日の夜会で、皇宮の花を髪に挿してきたそうじやない。ビリやつて手に入れたのか知らないけど、分不相応つて言葉をご存じ？」

エンジュはうんざりした。

なぜ、髪に花を飾つたことを知つてゐるのだらう。

あの場に、イトはいなかつたはずなのに。

「そんなこと知らないわ。贈られた花を使つただけよ

弁解を試みたが、一蹴される。

「信じられない！あれば、特別な花よ」

皇宮と隣接する神殿のおくつきだけに、咲く花。

それを、臣下の身分で挿して来るなんて。

「だいたい、姉妹そろつて思い上がりも甚だしいわ

あなたのお姉さまが、お兄様のことを狙つてゐるのは知つているのよ。

不愉快なの。

イトは視線を合わせようともせず、苛立ちをにじませた横顔で、エンジュに吐き捨てるよつと云つた。

「『お兄様』って誰のことよ」

姉さまには心に決めた人なんかいないわ。

「四富お兄様の」とよー先日のお夜会では、べつたりくつこっていた顔を向ける。

「四富お兄様のことよー先日のお夜会では、べつたりくつこっていたくせにーー。」

「違ひわ、姉さまはただのお友達だとおっしゃっていたもの」

「しりじらしこ。何も知らないような顔をしてーー。」

「わたくしは知っているのよー！　あなたの母君は、青龍様とは正式な婚姻関係になかったのですってね。」

イトが汚らわしい、と眉をひそめる。

「あなたのお姉さまだとて、嫡子かどうか知れたものじゃないわ。」

「そんな方に、四富お兄様の妻になる資格はないわ」

「青家じや、あなたのお姉さまの出入りは禁止されてることじやないの。」

だまれ、と小さくヒンジコをつけた。

いつも物事をはつきりと口にする彼女が、急にしづかになつたのを見て、イトは「当然よね」とこつそう語氣を強めて笑う。

「本当に、あの方があ兄様の正妻になれるところのない、わたくしも考えてあげてもよくてよ」

「だまれ、と言ったわー。」

「だまれ」

イトは馬鹿にしたよつて肩をすくめる。

「あなたは、ここではもう何の力ももたないわよ。辺境の西家の、しかも1-2もある分家の一つへ嫁ぐんですもの」「私のことはいい。でも、家族のことは訂正して」

「いやよ。あなたなんか、しょせん国賊の娘じゃないの！
婚約者だって、騎士なんて言ひけどただの殺戮者よー。」

「クゾクノ、ムスメ。
タダノ、サツリクシヤ。」

イトが高らかにそつ宣言したときだった。

エンジュは目の前の花瓶をつかむと、彼女向かつてふりあげた。突然の暴挙に、扉の前で控えていた侍女たちが茫然としている。

イトは投げつけられた青磁器を、とっさによけた。
どん、とにぶい音がして、絨毯のうえに瓶と花が散乱する。
侍女たちは口ごちに悲鳴をあげた。

何事か、とテラスから、こちらを向いた皇后とロードの前でエンジュは風を呼びこむと、術をとなえた。

テーブルの上に残つた水差しをイトに投げつける。

「やめるんだー！」

リドの声が耳に入つてはいたが、エンジュには止める氣などなかつた。

目の前が怒りで真っ暗になる。

水を術で泥水にかかると、しつかりイトの美しいドレスを狙つた。

「べちや、と音がして、立て続けに悲鳴が続く。

イトのスカートは泥にまみれていた。

完全に蒼白な顔になつた彼女に、エンジュは舌打ちをする。

「よけるから悪い」

ただの水で許してやうつと思つたのに。

唇がふるえる。父と姉を侮辱したイトには、これぐらいでもまだ足りない。

こぶしを握りしめ、強い感情と戦う。視界が涙で、にじんだ。

真っ先に我にかえつたりドは、黙つてエンジュを引っ張ると、突然としている皇后に軽くお辞儀をして、扉のそとへ連れ出した。控室で2人になるのを待つ、けわしい顔でのぞき込む。

「エンジュ、何があった？」

「何も」

エンジュは、爪のあとが残るくらい、手をにぎりしめた。

「何も、なわけはないだろ？」

「言いたくありません」

何があつたのかと再度問うリドに、エンジュは口を開ざした。泣きそうな目でにらみつける彼女に、リドは言ひ。

「謝つてきなさい」

「嫌」

「手をだした君が悪い。女王殿下に謝るんだ」

「絶対に、死んでも嫌です」

リドは、ため息をついた。

辛抱強く、同じことを繰り返す。

「今なら、間に合ひ。暴力に訴えるなんて、許される」とじゃない。

早く

ヒンジュは首を振った。

リドは、長いため息をつくと、口元に手をやつた。

「分かった。君は」で待つて。私はオノセを呼びに行つてくる

回廊を幾つも曲がり、水庭園の間にかかる通廊を足早にすぽれる。ここでは、雨の気配はなかった。

等間隔で並んだ円柱に黄色い辛夷が巻きつき、いぼれるように花を咲かせる。皇帝に季節は廻らない。常春の世界に包まれていた。あまねく帝の恩寵によつてここには、外界とは完全に隔絶されている。

「姫様、お待ちくださいませ！」
後ろから、オノセが追いかけてきた。
Hンジュは足をとめ、向き直った。

「とめないで！」
「何があつたのですか」
「リドお兄様に聞いたでしょ、」
「それでは何も分かりませんわ」
富家の女王殿下と何があつたのです？
「私は悪くない」
激しい勢いで言葉を返す。

2人は一步も引かず、言い合ひをつづけた。
礼儀と身分、謝罪というやり取りが何度も交わされる。
頬は怒りで紅潮し、田には苦々しさがともつている。

「オノセなんて、知らない！私は謝らない、絶対に！…
ついてこないで！
ついに、Hンジュは叫ぶと、庭への石段をかけ下りた。
「姫様！」

オノセは声で止めたが、エンジュは振り返りもせず、あつといつ間に庭の向こうに姿を消した。

長い通路のような縁の生け垣をいくつも抜けると、縁の絨毯にも似た丘が広がる。

エンジュは、走る途中で邪魔になつた靴をぬぎ、髪からかんざしを抜いた。

髪を解き、ただ夢中で駆けると、怒りがす、と抜けていくようだつた。

なだらかな丘の上には、人の手をほとんどいれていらない庭園があつた。

小さな花々と湧水のような噴水、それから大木が立つていて。木は大きな木陰をつくる古木で、根元を見ると2本の枝がからまるようして育つたものだと分かる。

枝ぶりは堂々としており、隠れるのには最適な場所である。

ここは皇宮の数ある庭園のなかでも、エンジュがとりわけ気に入つてゐる場所だ。

エンジュは頬を木に寄せた。

風が流れる。

エンジュにも大変なことをしでかしたということは分かつていて。イトは四畳のことが好きなのだろう。

ただ、許せなかつた。

でも、このままにはできない。

あふれる感情で頬をつたう涙を隠そつと、エンジュはぎゅっと木にしがみつく。

そうしていると、なぜだが気持ちが落ち着いた。

唐突に、生け垣から風が抜けた。人の気配がある。

エンジュは顔をあげて、振り返った。

「誰、」
短く誰何する。

建物のほうから姿を現した青年を見て、エンジュは表情をかえた。
「ソウセツ様…どうしてここに」

迎えにきました、と彼は言つた。

「いつから、」

「あなたが泣いていたあたりかな」

平然とそう言う彼に、とっさに6種類の言葉が思いついたが、どれも不適当で却下する。

エンジュの態度に業をこやしたリドかオノセあたりが、彼に頼みに行つたのだろうと想定できた。

「話したいと思って」

「話なら、今、しています」

エンジュは唇をかみしめ、うなじように返したが、彼は首を傾げただけだった。

「戻りませんか、」

皆あなたを心配していました。

田をあげればソウセツは驚くほど、近い位置にいた。

その静かな田で、彼が諂いのあらかたを把握していることを、エンジュは悟る。

「わたしが行き、おさめましょ」

相手は世襲王族の姫だ。このまま放つておけば、富家は黙つてい

ないだろ？

のちのわざやこじこになるのは、田に見えていた。

「あなたには無理強こしません」
　　ホンジュに背を向け高く戾ひつとしたソウセツは、袖口をひかれ
て足をとめた。

　　ソウセツの衣を、ホンジュが握つている。

「だめ、ぜつたに、謝ることなんてない！悪いのは向こうだも
の。騎士を貶め　　」

　　しまつた、とばかりに口をおされたホンジュに、ソウセツは田を
細めて膝をついた。

　　ホンジュは首を横に幾度もふる。

　　その仕草に、何を言われたのか、ソウセツは察したらしい。

「この婚約のせいですね。あなたには申し訳なく思っています」

　　ちがう。なぜ、謝るのだ。

　　ソウセツのせいではない。

「違う。ソウセツ様は悪くありません」

　　必死に言葉を紡ぐホンジュに、ソウセツは微苦笑を浮かべた。

　　帝都における西の地位は、低い。

　　十一西家が、帝都には居住しないことも大きな理由の一つだ。

　　本家・白家が西方支配を許されたときに、一族もとも移住した
　　のだ。

　　幼くして騎士たり、質実剛健を顔として育つため、万事が綺羅し
　　い都風には馴染めない。

　　帝都に住まう貴族とは、生活習慣の根本から違つ。

　　戦を身上とし、国境線を守るために、血で血をあらへ。

　　帝国の祖、かつての騎馬の臣、そのままに。

それゆえ帝都周辺の貴族連中からは、野蛮だの、不吉だのとさげられる。

王家に連なる姫のイトであれば、当然の反応であったのだ。

エンジュは、青家の姫君として多くから、かしづかれ、敬われて育つた。

しかし、これからは彼とともににある限り、この中傷や悪意に耐えねばならない。

「彼女は、父を国賊と呼びました。私はそれが許せなかっただけです」

エンジュは言い募つた。

ソウセツを巻き込むことは本意ではなかった。

保守派の貴族たちには、長年青家と対立してきた歴史がある。そのわだかまりは、国首の地位を返還して20年経た今でも、消えないのだ。

それが悔しかつた。ただ、それだけだ。

西家への愚弄に我を忘れたわけではない、違つ。

「分かつています」

ソウセツは静かに立ち上がると、エンジュから離れた。

「それでも、このままにはできなー」

エンジュはうなだれた。
そうだ。分かつている。

結局エンジュはソウセツと、皇后の部屋まで戻った。

自分は絶対に謝ることなどできないと思つ。

けれども、こちらが頭を下げないとすまないことは分かつていて。エンジュは、ぎゅっと口を引き結んで、扉の前に立つた。

「あなたは、ここに」

と彼は言つたが、エンジュは首をふつた。

扉をたたくと、皇后は2人の姿に少し驚いたようだが、何も言わずに中に招き入れられた。

惨状の面影は、もはやなかつた。テーブルの上の茶器や絨毯の染みは全て、片付けられている。

ソウセツが謝罪の意を伝えると、侍女が心得たように奥の部屋へイトを呼びにいった。

下がつた侍女が女王を連れてくる間、皇后は小声でソウセツに話しかけた。

「妾が少し席を離していたのだ。すまないな、目を離すのではなかつた」

「いえ、陛下…」

むしろ謝るべきは、こちらだ。

いたたまれない思いで謝りながら、ソウセツは背後に立つたエンジュが小さくなっているのを感じた。

やがて、現れたイトは、汚れた衣装を着替えていたが疲労の色をにじませ、悄然としていた。

2人を認めるに、ぎょっとしたように目を見開き、居心地が悪そうに身じろぎした。

「イト、おこでなさい」

皇后が手招きする。

イトは白い頬を強張らせて、おずおずと近付いてきた。

「はじめてかと思つが…、白桜家の子息。これが黄葉の宮の娘で、イトといつ」

はじめまして、と挨拶すると、イトは田に見えて焦つたようだ。陰口を叩いていた当の本人と顔を合わせては、確かに気まずいだる。

こんな騒動になつたせいで、全部知られているのだから。

「お初にお目にかかります、イト女王殿下」

このたびは、…我が婚約者がご迷惑をおかけしたようでの謝罪したい、とソウセツは口にした。

ソウセツは衆人の見守る中、膝をつき、深々と礼をとつた。騎士の礼だ。

イトは慌てた。

彼女だけではない、室内にいた人々はみな、息をのんだ。

「どうか、お許しを」

ソウセツは、少女の前に膝をついて許しを請ひ。

完全なる騎士の礼は、しかし、この場にふさわしいものとは言えない。

相手に跪くのは、最上の敬意の証。それをられる相手は本来、この国に1人だけである。

「あ、あの、…そのようなことをしていただきわけには、まいりませんわ」

「どうか…謝罪を受けていただきたいのです」

「え、ええ。わかりました、お受けします」

ですから、おやめになつてください。

イトは真つ青になつたまま、早口で言ひ。

雪のよつな白い衣、髪を結ばず背に流したソウセツの装いは、華美ではないのに洗練されており、人目を惹いた。皇后や侍女たちもいる前で、騎士に謝罪されるなど、いくら王族であっても少女のイトには酷なことなのだろう。

「わたくしも不用意な発言をいたしましたわ」「お気になさることはございません」

狼狽したまま、イトは言った。

彼女の口にした言葉の大半は、彼女の意思とつよりも、誰もが口にする常識であった。

皆が誉めることを誉め、皆が謗ることを謗る。ただそれだけであった。

「あなたを悪しく思つての言葉ではありません」

フヨウイナ、ハツゲン…。

「ありがとうございます。…お話できてよかったです」

その言葉にソウセツは顔をあげ、立ち上がる。

イトの手をのぞきこむようにして、穏やかに続けた。

「今後も、彼女とは懇意にしていただければと思います。なにせ、西へ ことは比べられぬほどの辺地で、血に飢えた、野蛮な者たちと生活することになりますので」

最後に強烈な皮肉を口にして、ヒヒヒリと笑つた。

それでは失礼を、とソウセツは、あつけにとられている女性たちを残し、身をひるがえした。

エンジュは慌てて彼の後を追つ。

回廊を曲がつたところで足が止まった。

人通りもえたところで、ソウセツは静かにエンジュを見下ろす。

「あの、あつがとうございました」

ヒンジュは、どうにか息を整えると、ソウセツに切り出した。

「いえ、礼はいりません」

とそつてなく返された。

「でも、あれは」

「必要なことだった。それだけです。違いますか？」

騎士の礼も、謝罪の言葉もただ、手段にすぎない。語られる言葉は淡々としていたが、ソウセツから伝わる『配は明らかに負の感情だ。

それに、部屋を出る最後に口にされた、あの言葉は。

「怒っているのですか」

「いいえ」

ソウセツの白い表情は、どんな感情もあらわしてはいない。

ヒンジュは、なんとなくぞつとして謝罪を口にした。

「いめんなさい」

ソウセツは静かなあおい田でヒンジュを見つめた。

「なぜ、わたしと来たのですか」

そのまま隠れていればよかつたのに。

その言葉に、ヒンジュは弾かれたように顔をあげる。

翠がかつた黒い目にやどる強い光は、おそらく怒りだ。

ヒンジュは彼を睨みつけると、嘘つき、と呟んだ。

「あなたは嘘つきよ！私に本当のことと言わない、」

「何言つて…」

「ならば、言つてください。必要なことだった、と言つてやり場の

ない怒りを見せてくる、その理由を」

ソウセツは答えにつまつた。

言葉を失つた彼を、ヒンジュはじっと見つめた。

鋭い視線が全てを見透かすよつとおりめぐ。

「戦で散った騎士を侮辱されたと思ったのですか、或いは皇家を憎んで、」

ソウセツは顔をあげた。それは確かに、彼が今まで口にせずにいたことだ。

エンジュは大きな瞳を瞬いて、呑きつけるよつと囁いた。

「ならば、ここへ来なれば良かつたのよ！」

ソウセツは思い出した。かつて親友と、馬を並べて競い合つた日を。共に在ることを約束した日々を。

彼は サイカは、彼を置いて戦場へ行き、そこで命を落とした。彼のもとを、永遠に去つてしまつた。

ただ、約束だけを残して。

エンジュはそれを知らなかつた。

しかし、このときは仇にしかならなかつた。エンジュに悪意がないのは分かつている。

けれども、彼女が投げた言葉は、ソウセツの心に波をたてずにはおかない。

「…仕方がないでしょう、」

さざ波が歯車を狂わせる。気付けば、ソウセツはそんな言葉を口に出していた。

「わたしだと、帝都に来たくはなかつた。でも、それは仕方のないことだ」

「ソウセツ様！」

「本当のことと言ひたのは、あなただ。そう、あなたの言つとおり」

エンジュの非難の声も、驚きの表情も、今はソウセツの言葉を止めることはできない。

青家の娘など娶りたくない、とソウセツは言った。

青家だからといって誰しもが膝をおり、仕えてくれると思つたら大間違いだ。

「西では誰も、あなたを歓迎しない。羽鳥ハトリの代わりになどならぬ！」

歯車が狂う。

目の前で、エンジュは再び口を開ざした。その表情に、ソウセツははっと息をのむ。

先ほどまでの不安は、ない。怒りでも苛立ちでもないその顔は、けれども彼を立ち返らせるには十分だった。

彼は、自分がおかした過ちに気付く。

「エンジュ、」

慌てて手を伸ばすのと、彼女が後ずさるのは殆ど同時だった。

エンジュは一瞬だけ、彼を見つめた。

しかし、ソウセツがその瞳にうるんだ輝きに気付いた瞬間、身をひるがえしてかけ去ってしまう。

呼び止める暇もなく、回廊の奥へ消える。叩きつけられるような激しい音で遠くの扉が閉められ、足音が遠のくと、辺りはそれきり、しんと静まり返った。

青家の娘など娶りたくない。

部屋はつす暗かった。エンジュは寝返りをうつて、天井を見上げる。

あの後、ソウセツは田を改めて会いにきた。
案内の侍女たちが困惑しているのは知っていたが、エンジュはどうしても扉を開けて会つことはできなかつた。

『許してください』

と彼は、扉の向こうで言つた。

エンジュは返事ができなかつた。扉をとざしたまま、息をつめて彼の声を聞いた。

『開けたくないなら、そのままでいい。わたしの話を聞いてください』

ソウセツは躊躇つたようだつた。

『この前、あなたが言ったことは、本当です』

わたしは、怒っていました。

西家に対する不当な扱いや言葉。グルジムカとの約定に対する苛立ち。

そんなものが、ない交ぜになつていた。

『でも、あなたには言つべきでなかつたと思います』

謝罪する、とくぐもつた声が漏れる。

『わたしは、明日にも西へ戻ることになりました。向ひつてあなたを待ちます』

さよならと、彼は続けた。

エンジュは暗い部屋の中で座り込み、遠ざかる足音を聞いていた。

あなたには、言つべきではなかつた、だと…。

体がひどく冷たかつた。

天井には、青い彩色で花の模様がくりかえし描かれていたが、今はそれが、雨漏りのあとのように見える。窓の外は暗く、夕闇が濃い。

「エンジュ、起きているかい？」

いつか扉をたたく音で、再び目が覚めた。

エンジュは、のそのそと寝台から身を起こした。

薄暗い明りの下でも、衣にしわが寄っているのが分かる。

そのまま眠つていたので、髪も乱れたままだ。

しばらくして、扉が開いた。

「出ておいで、話がある」

戸口にもたれるようにして、雨音が呼びかける。

廊下の明りがまぶしく、兄の表情は読めない。押し殺したような声だ。

エンジュは黙つたまま、雨音に従つた。

2人は、夜のじじまを歩いた。

いくつもの灯籠に照らされた庭は、池に人工的に配された石が浮かび上がって、美しい。

計算された美しさだ。

足もとで、玉砂利が鳴る以外は、辺りはしん、と静まつている。

「皇宮で、何があつた？」

兄君は促した。優しく穏やかな聲音。

エンジュは一度口を開いたが、結局何も言葉にできず、下を向いた。

そうか、と雨音はうなづく。

「僕がいなくてすまなかつた」

「…なぜ、兄君が謝るの、」

「お前を守ることができなかつたから」

雨音はHンジュに向き直つた。

ほの暗い闇のなかで、雨音の瞳が痛みを宿している。ソウセツが来たと聞いた、と彼は言葉を続いた。

「Jの婚約も」

父上にただすじとわえできない。

「兄君」

Hンジュはすがるよつて呼びかけた。

今だ。

今なら、まだ間に合つかもしれない。

西家には行きたくないのだ、ととつてに声に出しつてしまつて、唇をかむ。

Jにいていい、と言つてほしかつた。

悪い夢でも見たのだと、こつものよつて[兄談で、明るい笑顔で。それなのに。

「お前を西へやりたくなかった

僕に力がありさえすれば。

過去形で語られる言葉にて、Hンジュはやまつと心臓をしめつけられた。

ああ、そうだ。

もう、決まつたことだった。

西へ嫁ぐことも、ここを離れることも。
兄君にはどうしようもない。

両手を胸の前で握りしめ、**ヒンジュ**は震える口を叱咤した。
言つのだ。言わなければならぬ。

「…父君の決定です」

ふりしほつた**ヒンジュ**の言葉に雨音は、力なく首を振った。
「その通りだ」

沈黙が2人の間に落ちる。

雨音が、ようやく口を開いたとき、すでに声は感情を失っていた。

「ソウセツは策士だ」

敗戦の交渉に、僕たちを巻き込んでいる。

ついで、**ヒンジュ**を見つめる。

兄君の背は拳4つ分高く、近い位置に立っているために視線を合わせようとするが、見上げるようになつた。

その目の中にあるのは、ソウセツに対する憤りといつよりも、まことに現状に対する…父の決定を覆すことができぬ怒りのようと思える。

転嫁された、自分自身への憤懣。

「お前が選ばれたのは、彼の婚約者が、他の男へ嫁ぐ」とになつた
からだ」

ソウセツの婚約者だった少女は、彼とひきはなされ和睦の名のもと隣国へ嫁すのだという。

彼にとつては、さぞ納得のいかないことだらけ。

エンジュは、その報復の駒なのだ、と兄は断言した。

中央に対する西家のくさびなのだ、と。

「3年だ 3年我慢してくれ」

雨音は苦しい胸中を独白するみつこ、Hンジュを胸にかき抱いた。なされるままになりながら、彼女は兄の顔を、言葉を反芻する。「必ず、迎えに行く。必ずこの約定をくつがえしてみせる、約束する」

「
強い言葉。

兄君、と呼びかける声は震えて音にならない。

雨音の皿に映る自分の姿は揺れている。

3年だ。

3年我慢すれば、戻つてこられる。Hンジュはまなざしを上げた。「父上の、兄君のために西へ行きます」

雨音は深く肯く。

わが青家に、いやせかの権勢を取り戻そう
と。

戸口を叩いて入室したものの、口ウヒは全く気付いていなによつた。

文机と床には隙間なく、紙面や書物が広げられている。いや、広げられてこるところより、散乱してこるところの方が近い。

口ウヒの部屋は、いつもこの状態である。紙の山が多少場所を移しながら、足の踏み場がないことに違いない。

以前オノセが見かねて、侍女を掃除に来させたのだが、数日で戻されてしまった。

今も口ウヒは、ぼんやりと思案にふける様子で、机の前で筆を回しながら床を見つめている。

「口ウヒ、

返事どころか、振り向きもしない。

エンジューはため息をついた。

口ウヒの周りを、書きかけと思しき表や図のメモが囲んでこる。貿易品の項目やら官吏の相関やら、そんなものが彼女の頭のなかでぐるぐる回っているのだ。

近付いて見ると、口ウヒの横顔には田の下にはくまがくつきひとつ浮かび、頬が白いのが分かつた。ちょっと乱暴だとは思ったが、机に広げられていたノートを取り上げる。

「あら、エンジュー様」

ゆるゆると視線を上げて、口ウヒがぼんやりと言つた。

「あら、じゃないわ。何回も呼んだのよ」

「申し訳ありませんわ。食事なら、後で食べますので」

食事？

エンジュは没面を作る。

「…「ウヒ、いつから食べてないの？」

「いつから、とは…」

「ウヒは窓の外に田をやつた。

一体今がいつなのがよく分かっていないのだろう。

失敗した、と思ったのか、ウヒは田元を片手で押えながら、大

丈夫ですと言つた。

「ちょっと集中していたので」

「食事を忘れる事を、ちょっととは言わないわ。寝てもいらないんでしょう？」

エンジュの指摘に、ウヒは肩をすくめた。

「期限が迫つてるので、仕方ありません」

「期限…」

エンジュはその言葉を繰り返した。

「お話をおかなければなりませんでしたね」「ウヒは言葉を選びながら、ゆっくりと呟つた。

「青龍様とお会いしました」

父君に、と答えるエンジュの口は、語られる方に不安を感じさせている。

「国学院へ戻ります」

あなたと一緒に、ここを出ます。

「ウヒは迷いを振り払つよつて、あつぱつと語つ。

「でも、ウヒ…兄君とりどお兄様は、」

「決めたのです」

ヒンジュの言葉を、口ウヒは遮った。

「ウォン様には、もう申し上げましたわ。他の選択肢には、怖気がします」

タルヒの巻き起こす騒動や、家族の要求の多さ、そのどれにも我慢が出来るとは思いません。

口ウヒの答へに、ヒンジュは口を尖らせた。
はぐらかされていく。

「口ウヒは兄君が好きで、リヂお兄様は口ウヒが好きなのだと想つていたわ」

「そんなこと…どなたからお聞きになつたのです?」

「姉さまよ」

口ウヒは田をふせて、口元をゆがめる。

自嘲するよつて、また馬鹿馬鹿しこばかり。

「しょせん身分違いの恋ですわ、気にする」とはありません

「近いうちに、口ウヒが本邸のお姉さまになつてくれるのだと思つていたのに」

口ウヒはふふ、と笑つて、ふくれるヒンジュに抱きついた。

彼女がタルヒに招かれて、初めて青家に来たのは、9年前だつた。

最初ヒンジュを見たときの印象は、なんと亡靈のような子だらう、だつた。

顔かたちといつよりも、その表情のなさが田についた。ちょうど、母がわりの女性が亡くなり、本邸の父のもとへ引き取られたばかりであつたといつ。

周囲に同年代の子供もはいなかつた。

雨音もタルヒも、早々に寄宿舎へ入れられていた。父たる青龍は、およそ家庭むきの人間ではない。まだ学校に入れるわけにもいかない

い幼い娘を扱いあぐね、侍女たちに任せきりにしていた。

エンジュは邸の奥の奥で、古くから仕える老女たちに、まるで生きた人形のように育てられていた。誉められたり抱きしめたりされることもなければ、叱られたり折檻をうけることもない……。

はじめは同情だったかも知れない。

だが共に過ごすうちに、情がうつった。今は、エンジュを本当の妹のように思っている。

「私に、ついてきてくれないのね？」

「『めんなさい』」

その断りは、穏やかながら、せっぱりとしたものだった。

エンジュは肩を落とす。

「姉さまのところへ行くの、」

「タルヒと同じ邸で暮らることは、私もせっぱりお断りいたします」「コウヒは、現在タルヒを世話している人々に、内心ひどく同情している。

女学院時代のことを考えれば、彼女に一番近い友人や先輩が特に被害が大きかつた。タルヒの『花』であるという理由で、幾度学長室へ呼び出されたことだろう。彼女を、教師というかたちで未だに学院から出さないでいる学長は、英邁だとコウヒは思っている。

エンジュはともかく、上の姉兄は共に問題児として扱われているのだから、幼少期の育て方に間違いがあつたのではないかと疑わざるを得ない。

「兄君は、なんておっしゃったの？」

「ウォン様ですか、」

「コウヒは雨音の氣難しい顔を思い出す。
胸を針で刺されるような痛みを覚えた。

青家を離れる、と伝えたコウヒに雨音は躊躇いながら言った。

『リドは何か言つた？』

あいつの気持ちには応えてやつてほしい。

雨音は一体何を言つてゐるのだろう。

「ウヒは、顔から血の気がひくのを感じた。ぞつとした。」

『あなたにお話しさることではありますんわ』

『僕は知つてゐる。あいつがずっと貴方のことを好きだつたのを』だから、その気持ちを踏みにじるようなことはしないで欲しい、と彼は言つた。

「ウヒの気持ちにも気付かずに。」

「何も。エンジュ様の大ゲンカについては教えてくださいましたけど」

今度はエンジュが顔をひきつらせた。

「オノセもリドお兄様も、おしゃべりね」

「青龍様はお笑いでしたわ」

父君が？

エンジュの声があがる。

同じ邸とはいえ離れて暮らし、会つても優しい言葉をかけるでもない父親を、エンジュは慕つていた。

生まれついての『国首の君』。

揺るがない視線と、美しい横顔。

遠目から見つめることも多かつたが、機嫌の良い時には近くに呼んだり、歳を尋ねたりしてくれた。

「父君は今？」

「昨日からまた皇宮につめていらっしゃるようですわ」

そう、とエンジュは頷いた。

国首から宰相という肩書に変わったとは云々、父君が国政の大半をあずかつてゐることには変化がなかつた。

自邸でより多くの時間を、皇宮の執務室で膨大な仕事に囲まれ過

「す父に、尊敬の念を抱いている。

やつ、と思い出したようにエンジュは話をかえた。

「皇宮といえば。…あの花、皇宮にしか咲いてないんですって」
花籠は、まだ寝室に飾っていた。

夜会の日に、リドが届けてくれた白い花の話である。

ああ、とコウヒは首肯する。

「贈り主が分かったのですか？」

いいえ、とエンジュは答えた。

「夜会では会えなかつたわ」

結局、誰だか分らず仕舞いだった。

あの時花びらには、まだ朝露が残つていた。

となると贈り主は、皇宮に住んでいるか、神殿に関係する人物と
考えた方がよい。

王族であるイトが声高に主張するくらいなのだから、帝から特別
な許しを得て摘んだものだらう。
エンジュには、心当たりなどない。

「花の名前も知らないままだつたわ。姉さまで聞いてみよつかしら」

「タルヒが興味を持つ話題とは思えませんけれど」

「コウヒは、タルヒの顔を思い浮かべながら言つた。

西家と青家の繋がりに敏感になつていてる彼女のこと、下手に刺激
しない方がいい。

「まあ、花は消えてしまつたし、今は無理ね」

そうだ。

大ゲンカから戻つたときにはもう、白い花はすべて陽ざしに消え
ていたのだ。

籠だけを残して。

花籠自体は、黒い竹細工でできており、たいして特別なものでも

ない。

「あちらでは、短気を起しそんなことよつしね」

「ウヒは穢やかにほほ笑んだ。」

「そんなことはしないわ。イトもいのもの」

唐突に、ソウセツの顔を思い出して、顔をしかめる。

「ウヒは知らない。」

この婚約の裏にある取引を、兄の約束を。

爾前の言葉が耳にこじました。

『3年だ、3年我慢してくれ』

「オノセの言つことをよく聞いて」

「ええ、分かつてゐる」

さよなら。

心の痛みにふたをするよつて、隠した気持ちを語り入れぬよつて、

ウンジユはウヒに抱きつき、別れを告げた。

じじじ、と音がして、炎がゆれた。
壁に映る二つの影も揺れる。

「遅かったな」

「ご挨拶ですね、クオン」

「客観的な事実だよ」

赤々と燃える暖炉の熱を頬に感じながら、
ま顔を上げた。
霜刹はひざまづいたま

白貂の毛皮が、木床に広がる。

外は雪が舞っていた。

今年初めのぼたん雪だ。

「雪が降るまでには戻るという約束でした。心外です」

暖炉を背に車椅子に座る男は吐息をつくと、指で向かいの椅子を
さした。

座れ、といふことらし。

霜刹は、椅子に腰を下ろした。

ここのは彩白。
サイハク

西家の中心、湾をのぞむ高台にある都市だ。

霜刹は、先ほど帝都から帰還したばかりだった。

そのまま報告を、と言われ、当主・白虎の私室に通された。
田の前に座つた男が、当代白虎を務めるクオンである。

「羽鳥は発つた。お前によろしく伝えてくれ、と言へ置いてな」
ハトリ

氣丈にも、泣き言ひとつ残さなかつたよ。

クオンの言葉に、霜刹は眉間にしわを寄せた。

「ですか…」

羽鳥。

姪であり、婚約者でもあつた少女の顔が浮かぶ。最後に会つた時は、気がふれるのではないか、と思ひへり泣き、憔悴していた。

目を真つ赤にはらして、霜刹をなじる彼女の声がいまだ、耳をはなれない。

最愛の兄の死を受け入れられなかつたのだろう。

霜刹にとつても、それは同じだつた。

守れなかつた。

誰よりも近くにあり、誰よりも大切にしたいと思つていたのに…。

こぶしを握つて無理やり感情を封じ、霜刹は暖炉の火を見つめた。彼女が隣国へ向かつたというなら、約束は守られたはずだ。

「捕虜は？」

「帰ってきた」

これをお前に。

クオンはそう言つて、細長い革袋を投げて寄こした。刀の鞘だ。

霜刹は顔色を変える。

実用的だが、模様には見覚えがあつた。

古い言葉で風の加護を願う言葉が、刻まれている。『風は常に我らと共にあり』

堅信礼のときに『えられた一振りだ。

サイカの物だ。

「これを…どうやって、」

クオンは苦渋に満ちた声で語つた。

「タカラキがお前に渡してくれ、と伝言してきた。短剣は彼がもつていった」
彼がもつていった。

それがどういふとか、霜刹はすぐに理解した。

自刃したのだ。

「ですか

「惜しい男だつた」

クオンは霜刹から目をそむけ、瞼を伏せた。

その仕草に、彼もまた深く傷ついていることが察せられる。サイカは彼の弟で、タカラキは彼の側近だったのだから。

「お前が持つていってくれ。その方があれも喜ぶだらう」

「クオン……」

「もう、わたしにはお前だけになつてしまつたな」

採風サイカも羽鳥もいつてしまつた。

「2人が真っ先に飛び出していつて、私たちがいつも慌てて追いかける役でしたね」

きっと、あちらで私たちを置いていたことを後悔していますよ。

霜刹は言った。

ほの暗くてはつきり表情は読めなかつたが、クオンの口元は穏やかに結ばれている。

それを確認して、霜刹は口を開いた。

「体調はどうです？」

「いつもと変わらん

クオンはそつけなく応じた。

季節の変わり目に必ずひく風邪をこじらせて寝込んだのが、霜刹が帝都へ出発する日だった。

「おかげで、じじいどもどころか、ミオまで大騒ぎだ」

と妻の愚痴をいつ。

ひざかけを払い、歩行が困難な足をいまいましげに見せた。

「しかも、冬は足が痛む」

幼い日クオンは、落馬によって、左足の自由を失った。

先頭に立ち戦つのが身上の、西家嫡子にとっては致命的な事故だつた。

いまだ、クオンに近づくの座はふさわしくないと、声高に主張する輩がいるのも事実だ。

「それより、帝都はどうだつた？」

「あそこは喧噪は相変わらずです。…もちろん、我らの要求は通してきましたよ」

「お前の結婚相手は…？」

クオンは首をふり、言葉を変えた。

「いや。お前の意思は尊重している」

霜刹は、半ば目をふせるようにして、話に耳を傾けていた。
しばらく黙つて考へにふけつたあと、彼はクオンに焦点を合わせた。

「さて、青公女一人で幾つの生命が贖えるでしょうね」

霜刹はあわく笑つた。

クオンは、顔を上げた。霜刹の瞳の奥に燃える炎と、目が合ひつ。しばらくそうして向かい合つたあと、ふつと破顔した。

「お前らしくもない、古典的な手法だな」

「餌にくいついた大物は、素早く網でとるにかぎります。

」ついでにいふことは、めんどくさくないついでに済ませたいので、

「皆の鐘でも、派手にならしてやるうか？」

クオンは茶化した。

「…祝いには、邸をいただきたく思います」

霜刹は、瞳をあかく瞬かせると、口だけに笑みを置いた。感情の
こもらない声で続ける。

「波白ハハケにあるサイカの邸を、ゆずつていただけませんか」

「…ああ、お前の好きなようにするがいい。公女がここへ着くころ
には、改装もすむだろ？」

クオンは答え、田を開じて椅子のクッショーンに身をうづめた。

「私のいない間の、評議院の動きは？」

「それも変わらん。互いの牽制に終始している」

西部の実権を握っているのは、当主の白虎ではない。

かつて白家が断絶したときに、その威光も多くを失ったのである。
以降、12の分家と騎士たちで構成される評議院が、最大の意志
決定機関であり、白虎の地位はただ名目には過ぎない。

白虎の館と騎士団がある州都・彩白に対し、評議院のある波白は、
西の政治の中心だ。

クオンは、幼馴染である青年をしげしげと眺めた。

彼のさすような視線に気づいて、霜刹は顔をあげる。

「そろそろ知らしめねばなりませんね、中央にも」

再び視線が交わった。

薪のはぜる音とともに、じじ、と影が大きく揺れた。

クオンは軽く頷く。

「帝は宮から出てこまい。年中、神殿にこもり、香をたいてこいるよ
うだからな」

現帝が、神殿を重用しているのは広く知られた事実だ。

聖都の機嫌をうかがい、皇宫においてはその代理人たる『御言持みこと

ち』や神官たちに絶大な権力を許しているといふ。

帝の青白く神經質そうな額と尖ったあご、そして能面のような表情と落ちぐぽんだ光のない黒い瞳を思い出して、霜刹は少し笑つた。

クオンはかた頬をゆるめて、弟の親友だった男を見る。

瞳は黒曜石のような黒。

記憶にあるものとは同じはずなのに、何かが違う。すらりとした長身に純白の上着、そのうえに錦糸の刺繡がほどこされた黒いマント。

左肩でとめられたブローチは、黒金の十二星座。西家の騎士のしるしである。

華やかな美貌に、凄絶な笑みをたたえてソウセツは言った。

「神殿から皇子が戻りました」

それ以上、彼は口にしなかつたが、クオンはその意味が正しく理解できた。

「はじまるか」

2人はお互いの息がふれるくらいの位置で見つめ合ひ。幼い日から、幾度も繰り返してきたよつこ。

ただ、何かを失つた。

「約束を果たしましょ、クオン」

「お前となら心強い」

霜刹は、クオンの言葉にふわりと微笑んだ。

「まずは青冢から、ですか」

「どうしてこんなことになつたのだろう、とエンジュは口の中でつぶやいた。

視線の先には、広大な温室が広がっていて、それもまた彼女の苛立ちの一因だ。

「お先にどうぞ」

「わかつています」

向き直った相手に、ぶつきらめくに答える。

この相手こそが、エンジュを苛立たせる最大の原因だった。くせのない長い髪を日よけのレース飾りで覆つた、黄葉の富家の姫イトはいつも通り完璧な装いで、エンジュを促す。

もつとも、女王の方も穏やかとはいきかないようだった。手にした扇を落ちつかなげに、持て遊んでいる。

暑くもないのに、どうして扇など持つているのだとエンジュは思う。

馬の合わないイトに、彼女の腹立ちは高まるばかりだ。

2人はそろつて黙つたまま扉をくぐつて、奥に広がる薔薇園へ向かった。

ガラスで造られた温室の中は、塔のよつて高く、きらきらと外光を反射させる。

直接振りかかれば暑いと感じられるであろうその光は、しかし天窓にかけられた薄い紗によつて和らげられている。

しかし、庭園の小道をゆく2人の周辺に漂つた空気は穏やかさから程遠かった。

気の合わない2人が連れだって、しかも傍には誰もいないとあつ

ては当然である。

「Jの温室の主である皇后は、今はいない。

帝に呼ばれていると先ほどの出かけて行つたのだ。
まさかまた、2人きりにされるなんて知つていれば、皇后のもと
を訪ねなかつたのに。

エンジュは思うのだが、その思いはおそらくイトも同じだらう。
「よう来ておくれだつた。妾が戻るまで、お願ひがあるのだが…」
そう言われれば、断れなかつた。

2人はもう数十分もただ歩き続けている。

険悪な雰囲気で、言葉も交わさず足を動かしている様子は、喧嘩
の前触れのようではあつたが、しかしエンジュは決して挑発にはの
るまいと心に誓つていた。

少し前、同じような状況で、自分がとつた行動を反省していたか
らである。

勿論、イトの言に抗議する気持ちには変わりはない。

けれどもその方法については、改善の余地があるだらう。

皇后の花や花瓶を、使つたのはさすがに、まずかったと思つ。

イトを引っぱたいてやりたないと黙つて、他のものを犠牲にするの
は間違つてゐる。

婚約者であるとはいえ、見ず知らずに近いソウセツに一件を收め
られたことはともかく、そう思つ。

同じことになれば、とエンジュは考えた。

イトを叩くが、口でやつしかえし、とりあえず道具や術はなしにし
よつ、と決めたのだ。

しかし。

驚いたことにそういう事態は訪れなぞうだつた。

隣を歩く女王は相変わらず、好感のもてる態度とは言えないが、気にさわるようなことも言わなかつた。

彼女は彼女なりに、例の一件について思つてゐるがあつたのかもしれない。

しばらく行くと、眼前に黄薔薇が咲き乱れる場所に出た。エンジュは無言で胸元から、鋏をとりだす。ぱちん、ぱち、と薔の多くつけた花を2束切つて揃える。棘はない。

この薔薇は、皇后が自ら品種改良をしたもので、棘を持たないようになつくりかえられているのだ。

エンジュの横では、イトが地面に膝をついた姿勢で、枯れた葉を取り除いているところだった。

思えば、いつも彼女と花を切りに来ることにならうとは想像もしなかつた。

互いに抱く嫌悪は別にして、エンジュがそう思つるのは、深窓の姫君であるイトが土いじりをするとは思わなかつたからである。花には一家言あるという変わり者の皇后は特別にしても、身分の高い貴婦人たちは、自ら手を汚すことを極端に嫌がる。このお高くとまつた姫君には、あまり似つかわしい趣味とは思えない。

そんなことを考えて、じつと見つめていたせいか、イトは唐突に顔をあげた。

不機嫌と嫌味の浮かんだ表情でエンジュを睨みつける。

「…何？」

「何でもないわ」

「そう。じゃ、ぐずぐずしないでさつと終わりせど、こちひびきょうだい」

花輪を作るのだから。

エンジュは思わず、言いかえしそうになるのをこらえた。

その高慢な横顔を見ているだけで憎らしかったが、前回を思い出

して鍔をぎゅっと握る。

決めたのだった。

エンジュは横を向いて言った。

「気が短いのね。一番良いのを選んでいるのよ、邪魔をしないで」

「なんですって、」

イトは目を吊り上げたが、それ以上は答えなかつた。

忌々しげに舌打ちはしたが、それだけだ。

エンジュは目を瞬いた。

おかしい。

どういつ心境の変化だろう、到底信じられない。

再び黙りこんで作業を再開させた2人の背後に、しばらくして衣
ずれが聞こえてきた。

皇后だ。

従えて来た侍女たちに花を受け取らせると、どこかほつとしたよう
に2人を見る。

温室のどこにも変わったことがないのを確認してのことらしい。
「遅くなつてすまなんだのう。上のお話が長引いて」

「おば上、」

「どうじや、2人とも。仲良く摘めたか」

穏やかに聞かれてエンジュは答へに窮した。

「…彼女は1輪ずつ選んでいましたわ、丁寧に」

イトがぶっきらぼうに、皇后に答える。

どうやら、お世辞や上手のために言つてているのはないらしい。

その証拠に、侍女に渡つたエンジュの花束に真剣なまなざしを注
いでいる。

エンジュは意外な気がして、イトを見返す。

イトの頬がかすかに染まつたような気がしたのだ。

「だつてそうでしょ?」

とイトは弁解するように言った。

「その花環は神殿におさめるもの。帝国の騎士をたたえて
…もつとも、あなたには関係ないかも知れないけれど。

婚約者だつていうのに挨拶もなさらず、西へお戻りになつたので
しうつ? ソウセツ様」

「あなたに言われたくない、」

両手を握つて反論しかけたエンジュだつたが、しかし次の瞬間、
まじまじとイトを見つめる。

イトの言い方はいつもどおりに嫌味で、感じが悪かつたが、表情
が少し違つ氣がしたのだ。

「じろじろ見ないでいただけるかしら?」

目があつたイトは途端に、不機嫌そうに顔をしかめる。
やがて、エンジュは違和感の正体に思い至る。

帝国の騎士をたたえて 。

イトはそう言わなかつただろうか。

何氣ない言葉ではあつたが、彼女が口にすると事情が違う。

世襲王家の姫君たる彼女は、帝国のためとはいえ辺地で血にまみ
れる西の騎士たちを密かに嘲つていたはずである。

もつともそれは、彼女だけではなく、帝都に住まう権門の人々の
間では暗黙の了解のようなところがあつた。

だが、イトがソウセツに良い感情を抱いていなかつたことは確か
である。

以前のひと悶着も、彼女の言葉に端を発していたのだから。

「…あなた、騎士が気に入らなかつたのじゃなかつた？」

思わずエンジュが訊くと、イトはぎくりとしたように気まずい視線を返した。

それはすぐに渋面にとつてかわつたが、その表情が本心でないことに、エンジュは何となく気付く。

「別に。わたくしは、ただ…騎士が帝国のために命を落としているのは、事実だと言いたかったのよ」

だいたい、トイトは言い訳をするように続けた。

「思つてることを言わないあなたなんて、らしくないわ
氣味が悪い。

「氣味が悪いですって、」
 反射的に言いかえしたエンジュは、しかしその言葉をのみじる。
 まさか、あり得ないことだ。
 あり得ないことだが、もしかして。
 心配してくれているのだろうか…。

まじまじと見つめたエンジュに、イトは咳払いした。

「前回の件はなしにしてあげていって言つたわ」

礼は尽くされたし。

イトは言つ。

「あなたが静かだと、何だか落ち着かないの。それにわたくし、鬱
 陶しいのは嫌い」

イト、と皇后が横から咎めた。

イトは本当の伯母のよつて思つてゐる皇后の制止にて、逡巡したが
 結局続けた。

言わずは、いられないたちなのだろう。

「あなたのお姉さまに對して怒つてゐるのは、本当。

それから、皇宮の花の件も」

ぶつきらぼうに言つ。

またぶりかえすのか、と胸の前でこぶしをつくつたエンジュにイト
 は視線を向けた。

2人の視線が交わる。

イトはずいぶん躊躇つたあとで、口を開いた。

「でも、ここを離れなければならぬのは、あなたのせいじゃない
 と直に思つたの」

たとえ公女でも。

「 私は…」

父君が決めた婚約だから、トイドの言葉をはねつけないことは容易かつた。

強がつて、この場をのりきる「ことは…」。

だが、エンジュは瞳を伏せた。

そうだ。

トイドの言葉は弱い自分の一面をつつじしている。

エンジュは深いため息をついた。

和らぐごどこりか、時を置くほどに強く感じられるその痛みは、後悔という名の棘のせいだ。

あの日、ソウセツが旅立つ前の晩に、彼女は彼に会わなかつた。顔を合わせることはできなかつた。言葉を交わしてしまえば、言いたくないことを言つてしまいそうになる。それが嫌で扉を閉ざしたままでいたエンジュは、しかし後になつて氣付いたのだ。言いたくないことを言わないでいられた代わりに、言つべき言葉を伝え損なつたことを。

「 言つべきだつたのに。

最後に聞いた彼の声を思い出す。

さよなら、と言つた声は穏やかで、きっとソウセツは怒つてはない。

彼女が会わなかつたことを責めていたりはしないだらう。

しかし、エンジュは気になつて仕方ない。

彼は怒つてはいだらう、でも、後悔しているかもしれない、と思う。

彼女がそうであるのと回り合ひ。

「もうすぐ、ここを発ちます」

だから早くソウセツに会えるといいのに、とは口にはしなかった。一旦帝都を離れれば、いつ戻れるか、どうか本当に兄の言つ3年で戻つてこられるのかさえ、分からぬ。

どうしたつて、西へ向かうのは気が重い。

「そり」

と向を立つ女王は、例の高慢な口調で言った。

「でも、暗い顔をするのは、やめてちょうだい。ほかに誰も心あてがない」というなら、わたくしが文通の相手になつてあげても良いわ」「私は暗い顔など…」

していない、と言いかけたエンジュは、しかしそれを途中で止める。

イトの言葉は、彼女にとつて意外な驚きをもたらすものだったのだ。

「ぶんつう?」

文通が何か知らないわけではない。

しかし、今の今までそんなことを思いつきもしなかつたのは、エンジュが手紙を書いたことも受け取つたこともなかつたからだ。学校へも行かず邸と皇宮が、世界のすべてである彼女には、手紙を送るような知り合いもいなかつた。

「まあ、それは良い考え」

考えもつかなかつた、と感心したのは、皇后だ。

皇后は2人にほほ笑んだ。

「手紙が行き来するあいだに、そなたたちもきっと、良い友人になるだろう」「お互いに淋しくもあるまい。

「私は別に淋しくなんかありません」

そこはきつぱりと主張したエンジュだが、既に心は決まっていた。
窓からふりそそぐ陽の光が、あたりを明るくつつみこんでいた。

信じられない、と早足で歩きながら、エンジュは首をふった。
文通をしよう、と言つたイトの顔を思い出す。

「冗談のような話だ。

ただ、心象は悪くはない。もちろん、2度と暴言を吐かれなければ、の話だったが。

あれから、イトと一緒に神殿に参拝するといつ皇后のもとを、早々に退出した。

長い廊下を通つて、外回廊へ出る。

白い柱に支えられた回廊からは、手入れの行きどいた庭園が見えた。

それぞれの柱のうえからは、えんえんと淡い黄色と紅色の花が垂れ下がっている。

うららかな春の宴。

もう、すぐ西へ出発する。そうなれば、ここともお別れだ。
エンジュは感傷にひとりながら、咲き乱れる花を見上げる。

そのとき、回廊の先、人工池にかかる石橋に見知った姿を見つけた。

異母姉のタルヒだった。

青家とは縁を切つたと公言している彼女とは、なかなか会えない。タルヒは分厚い書物を幾つも抱え、足早に橋を渡るところだった。

「姉、」

さま、といつ声は口の中に消えた。

タルヒが誰かに応じるようにして、振り返つた。

手を差し出して書物を受け取つたのは、四富^{シミヤ}だった。

帝の2番目の息子。

すぐれた異能を持つ、神の御子。

夜会での出来事と2人の会話が回り、エンジュは表情がこわばる

のを感じた。

『家族をとるというのか、あなたを捨てた家だ』

『選んだのよ、エンジュ』

橋の上で、2人が親しげに、言葉を交わすのを凍りついたように見つめる。

その距離は近く、イトでなくとも、2人が恋人であるのは明らかに思えた。

耳元で交わしあう言葉。頬を染めて笑う姉。

エンジュはなぜか胸が痛かった。

声をかける機をのがしたまま、エンジュはただ立ちつくす。

風が流れる。

四富はタルヒのほつれた髪に、かんざしを挿しなおした。そのまま彼女の腰を引き寄せ、口づけを落とす。

エンジュはその様子を眺めていたが、やがて、我に返った。

「しばらく、ひとりにして」

後ろをついてきた侍女に声をかけて別れ、廊下を曲がる。そうだ。

タルヒは既に、青家を出ている。

確かにエンジュの姉ではあったが、係わりをもたないのだ。恋愛もしがらみからも、青家から自由だ。

途中に石段があり、そこを下りるとすぐに直接庭園へ小道がつづく。

刈り込まれた樹木を通り過ぎると、彫像があらわれる。

人工の池と、髪をなびかせた精霊の像。

エンジュは噴水の前で立ち止まり、大きく息を吸い、垣根をくぐつた。

最後に、あの木に会つていこうと思つ。

いつでも、す、と勢いよく伸びた大木を見れば、嫌なことや悲しみも忘れられる気がした。

垣根をかき分けるようにして進み、ようやく開けた先の大木に駆け寄ろうとして、エンジュは唐突に足を止める。

そこには、先客がいた。

慌てて引き返そうと踵を返すエンジュに、相手は声をかけてきた。

「いらっしゃいいらっしゃいな」

温和な笑みの女性が、静かに手招きしている。

どうやらエンジュに気づいていたらしい。

招かれるまま、大木にもたれている女性の方へエンジュはおずおずと足を進めた。

「ずいぶん古くて立派な木。ね、そう思わない?」

「でも、この屋敷にはそぐわないわね。」

女性は黒田がちな田をほそめて、エンジュに気をへこ、そう話しかける。

エンジュは穏やかにかけられた言葉とは裏腹に、何だか背筋を寒いものが走ったような気がして身を震わせた。

女性は、エンジュの反応を確認するよつこちらに眼差しを向けてまゝ、長い袖口をあげて木にひたりと、手をそえた。

紫の濃淡を品よく纏つた衣装に、銀の帯。

黒髪に黒瞳。

この国の者では一般的な色を伴つた容姿だが、ひと目見たら忘れられないほど、その容色は印象的だつた。

美しい。

けれども、しげしげ見つめるのは恐ろしい。

そんな感情を抱かせる美貌だ。

額には薄紅の紋様が刻まれ、腰に『屈き』^{くび}そつな髪はただ背に流れていた。

若くはないのだろうが、はつきりとした歳はつかめない。皇宮の化粧を施しているのは分かるが、会つたこともなければ、見たこともない。

戸惑いが顔に出たのだろうか、女性は問いを制するよつて口元を引き上げた。

「わたくし、実はあなたを待つていたのよ」

「私はあなたを存じません」

警戒を解かず、かたい声で切り返したエンジュに、彼女は悪びれずに、そうね、と応じた。

「会つたこともないのだから、当然だわ」

灰色のこう彩の奥で、縁にも見える黒がきらめく。

「…失礼ですが、」

「ああ。お名前は教えて差し上げられないの。それがあの子との約束だから」「ごめんなさいね。

でも、わたくしはあなたの名前を知つているの。美しい名前ね、エンジュ。

そう言って、につこりとほほ笑まる。エンジュは、黙つて彼女を睨みつけた。

「あら、そんな怖い顔をしては駄目よ」

彼女は何がそんなにおかしいのか、のどを鳴らして笑い声をあげた。

首にかけた、大粒のアメジストが上下する。

「わたくし、あなたに微力ながら力をお貸ししようと思つていいのよ」

「あの… どういう、」

「そう、戻るには長旅が必要だわ」

エンジュの声を遮つて、女性は言った。

「ひとりでは迷子になってしまつかもしない。遠いのですもの、目的地は」

2秒ほど沈黙した。

戻る、と彼女は言ったのだろうか。

それは、兄との約束のことを言つているのだろうか。あの子、とは誰のことだろう。

エンジュは必死に考え、言葉をさがした。

この婦人は何をしようと言つのだろう。

情報が足りず、訳のわからない恐怖も手伝つてエンジュはしじろもどろに答えた。

「確かに、ええ。しかし、…」

「おびえているの？ 手が震えているわね、」

女性はエンジュの右手にさりと触れた。

震える右手を左手でぎりしめて、エンジュは一度目をつむつた。駄目だ。とても隠せない。

「大丈夫よ。そんなに警戒しないでちょうどいい」
歌うように彼女は言った。

「古き貴族は大なり小なり、恩寵の力を持つてゐるもの。

そうでしょう?」

恩寵の力で、エンジュの内面をのぞき見た、と言いたいのだろうか。

彼女は、黒い瞳をしばたかせてエンジュを見る。
彼女が持つ色は、ちょうど曇天のなか、さしこんだ光によつて照
らされる波のしぶきを思わせた。

「でも、あなたの兄君には、協力できない」「
申し訳ないわね。

女性は、エンジュの考えを読んだように続けた。
ふわりと風に、彼女の髪がゆれる。
精靈が強い恩寵に集つていることが、エンジュにも分かった。
背筋を冷たいものが滑り落ちる。

女性は、衣を腕にかけてなおしてからエンジュの前まできて、か
がみこんだ。

絹のレース襞が地面にひろがり、エンジュはそれが気になる。
内緒話をするように、彼女は声をひそめた。

「甥がね、あなたのことときに入つてゐるようなの。それがここに來
た理由。

わたくしは、彼のためにあなたを助けてあげよつと思つて。花は
届いたでしょ?」

エンジュは目を見開いた。

花?

夜会に飾つたあの花のことだろうか。

女性の口元は笑みの形を保つてはいるが、目は笑っていない。
鼓動が速くなる。

「ありがとうございます」

エンジュは平静を取り戻すために、とりあえず頷き、息をついた。

「あなたのお返事は？」

「あ」と少しあげて、彼女は促す。

口調は疑問形だったが、拒否できそうもない強引な口ぶりだった。

「その前に、聞かせていただきかな」と

エンジュは頭を必死に回転させて、言った。

「あなたの条件をのんだ場合、私は何を支払うのでしょうか」

「あら、存外しつかりしているのね」

「私も青家の娘ですから」

彼女はエンジュの背後にまで田を配るよひにして、ゆるく首をかしげた。

「あなたのそばにいるご友人に、少し協力していただきたいわ

それがこの地へ戻る通行証だと彼女は言った。

エンジュは振動する窓の外へ田をやつた。

あの女性の正体は分からずじまいだった。
真の目的も知れなければ、再び会うこともなかつた。

「きっと夢でもご覧になつたのですわ」
「どうのがオノセの結論である。

エンジュはそんなことはない、と今口幾度田かの相手の言葉を返す。
「夢と現実ぐらい、区別はついているわ」
恐ろしい位、強い異能の持ち主だった、とエンジュは振り返る。

そうだ、背筋が凍るほどいの恩寵の力を感じた。
精霊が泣き、木々がざわめくほどいの。

「せめて、住まいを聞いておくんだつた」風に搜されたの。
「厄介なことに首を突っ込むのはおやめくださいませ。」
「ウヒ様もお帰りになり、よつやく落ち着いたといりですの」
やれやれとばかりに、オノセが首をふる。
エンジュは頬をふくらませた。

「ウヒは、青家の邸前でエンジュ達を見送つたあと、国学院へ出発した。

見送りに出た父は、娘との別れを惜しむよつも、「ウヒ懇うな挨拶をおくりっていた。

それも仕方ない、とエンジュは思つ。
「ウヒの先生は、ジケイだものね」

ジケイは、高名な歴史学者であると同時に、南部第一の諸侯である赤家の前当主であった。

青家とはいわば、同格。

その愛弟子に、敬意を表するのは、父とすれば当然のことだらう。

「まあ、それだけではございませんでしょ」

オノセは苦々しく応じる。

常々コウビを煙たく思つていたオノセは、青家を出たあとは安堵の表情を浮かべている。

今は、エンジュの向かいで、荷物の田録に田を通していた。ここから見えるのは、遙かな山々とその間を縫うように走る街道ばかりだ。

馬車は帝都を出発し、北部街道を進んだ。天山山脈の手前で、方角を西へとかえて。

これが帝国西部へ向かう一般的な陸路である。

既に、道を西へきつているのは知つていたが、エンジュに確認できたのは、北部独特の地形だ。

峻厳な山に囲まれ、やせた土地。

オノセからは幾度も聞かされていたが、見ると聞くのでは大違いいだ。

帝都を出発して既に、1週間が過ぎた。

はじめは揺れに酔い、宿舎に着くたびに、倒れるよつとして眠る日々を過ごしたものだったが、ここ数日は体が自然と慣れてきたのか、食事もとれるよつになってきた。

外へ田をやる余裕もある。

その窓からさす光がまぶしくて、エンジュは田をすがめた。

馬車の中は空気が遮断されているせいか、温かい。

だが、道行くさきの西の空には雪雲が重く居座つてこる。

馬で行く護衛の者たちの息が白く染まつているのを、エンジュは眺めた。

常春の皇宮は別にしても、帝都周辺には雪は積もらない。地図で見れば、まだ帝都に近いはずなのに、結構気候が違うものだと当たり前のような感想を抱いたエンジュに答える者は、隣にいない。

なぜ引き離されなければならないのだ？ とエンジュは憂鬱に考えた。

そもそも出立のときから、納得がいかなかつた。

「いい加減、機嫌を直してくれないか、」

先ほどの休憩で馬車を降りた時に、兄はそう言つて宥めてきた。

「嫌です」

「エンジュ、お願ひだから」

馬車に別々に乗ることになつた件である。

出立の際、父の侍従が、雨音に別に乗るよう、「と伝えてきた」とが発端だつた。

慣例でござりますれば、と有無を言わせず、エンジュはオノセと2人馬車に押し込まれたのだ。

「何でも良いですが」

冷静な、というよりもむしろあきれ果てた聲音で2人のやり取りを遮つたのは、リドだ。

苦虫をかみつぶしたような顔は、この旅の間にすっかり板についてしまつた。

「もうひとりいで、城壁が見えるはずです。田的ですよ」
どうします、と唸るように問われて、雨音とエンジュは肩をすべめた。

何もそんなに不機嫌に問わずとも良さそななものだ。

公家の輿入れとあって、行列は馬車を幾つも連ねた大がかりなものだった。

おいそれと都を動くわけにはいかない父の名代として立った世子・雨音をはじめ、エンジュに仕えるオノセや侍女たちに至るまで、総勢50名は下らないだろ？

一行に同行しているリドは、北部にある自領へ戻るついでなのだと云う。

いつものように、悪友を自称する雨音がひき入れたに違いない。だと云うのに、帝都を出てからリドは腹を立てばかりだ。

全く、「コウヒが行つてしまつたからって、とエンジュは思つ。
「そう怒るなよ、リド。別邸には到着の先ぶれを出す。忘れない」
「それを聞いて安心しました」

リドは嫌味を口にしたが、雨音はあまり堪えた様子もない。
兄は、「コウヒとの別れも落ち着いたものだった。未練がましいリドとは大違いである。

嫌味は、余裕のある人間には通じないものらしい。

では知らせに行かせましょ？、リドに促された雨音は、肯こうつとして途中で止める。

「いや、出さなくていい
「なぜです、」
「あちらからの、迎えだ」
うすけぶる街の方から、騎乗した男たちが一ひらに向かって駆けてくるのを指した。

騎士だ。

翻る方旗は、白。

西家の色だ。

薄く差し伸べる陽を背に、騎士たちはあつといふ間に近付いてきた。

立ちあがつたエンジュたちをぐるりと囲む。

馬のいなきと、息遣いだけが落ちる。

鈍色に光る甲冑と兜によつて、騎士たちの表情は全く分からぬ。

「青家の一行とお見受けする」

騎士のなかでも特に重厚な鎧をまとつた人物が、深く頭礼して口上を述べた。

「我らが主の命により、迎えに参りました。聖堂まで案内させていただく」

すでに、用意は整つてゐると言ふ。エンジュは追われるよつて馬車に乗せられた。

雨音とリードは先頭の馬車だ。

ソウセツは到着しているのだろうか。

外を走る騎士に、窓を開いて訊いてみたいよつな氣もしたが、結局エンジュは黙つたままだつた。

兄に知られれば、叱責を受けるだけではすまないだひつ。代わりに小さくため息をついて、エンジュは呟く。

「…息がつまりそう」

そろそろ街を横切るかと思われる頃、並走していた騎士が馬車の窓をこつこつ叩いた。

エンジュは、硝子戸を下ろして窓をあける。

「見えましたよ、姫君。あれがアサノの神殿です」

大通りの正面、曲がりくねつた路地と家々が連ねるその奥。

街を一望し、小高い丘に建てられたその建物こそ、ついにたどり着いた目的地なのだった。

手を取られ、ステップをふむと石畳の広場に降り立つた。闇の時間が迫っている。

けぶるようすに雨が降つており、隣に立つ兄の髪をぬらした。冷たい雨だつた。

エンジュが顔をあげると、騎士たちは白い息を吐くのが分かつた。右には、総勢20は下うぬだろう騎士たちが松明を空に向けて立つている。

一分の隙もない拳作。

左には、旅を共にしてきた青家の面々。

広場を覆つているのは、重い緊張だ。
暗がりに、灰の壁がそびえたつ。

目の前には、石肌のままの古い造りの聖堂。
アサノの神殿だ。

「ようこそ、いらせられました」

内側から神官が扉を開き、両脇に並んだ者たちが次々と膝を折る
なか彼女たちは中へ進んだ。

列柱を1つ通過するたびに、神官によつて鈴が鳴らされる。
どの柱にも1人ずつ神官が鈴のついた、つり紐の隣に立つていた。
最後に、ゆるい階段をのぼる。

行き止まりの壁には、巨大なタペストリーが掛かっていた。
5人の騎士の姿が織り込まれている。

白衣を身に付けた若い騎士の肩には、12つの突起を持つ黒星の

記章。

建国記だ、とエンジュは呟いた。

1人の英雄と、4人の騎士たちによる戦いと建国の歴史。英雄は王となり、4人の騎士たちは大公家の祖となつた。青家の祖は、王のすぐ隣で杖を持つ、青衣の老人である。

雨音は、そのタペストリーの前で一度足を止めた。その横顔は、厳しくかたい。

「中へ、もうあつちは来てるはずだ」

兄はエンジュに囁くと、神官に合図をした。タペストリーがゆるゆると巻き上がる。

「じちらく」

香の煙がゆるぐ、立ちのぼった。

煙の向こうは、大天井があつた。

エンジュは、タペストリーの先へ促され、入るなり、その空間に圧倒される。

とても広い部屋。いや、部屋ではない。

見上げた天井は暗くかすみ、高い柱の途中に光る明りがアーチ型の細い梁の柔らかい影を壁に重ねている。

深く沈んだ窓は、外部のわずかな光によって、鈍くいろいろされた絵画を思わせた。

ステンドグラスだつた。

心持ち、上を向いたまま広い場所に移動すると、さらに高いドームが真上に広がる。天空を貫くほど高い。

ここがアサノの教会の中心、大聖堂だ。

木製の質素な椅子が幾列もならび、正面の壇上には、数人の男が見える。

柱がせまい間隔で立ちならび、両側の回廊はとても暗い。

振り向くと、大きな木製ドアが両開きで開け放たれている状態で、無骨な石造りの通廊は、その木製のドアの奥にあった。

彼女たちは、そこからでてきたのだ。

雨音とエンジュを先頭に、しずしずと紫の絨毯を進んだ一行は、段下に集つた。

先に馬車を降りた、リドの姿もあつた。宣誓^{カミツル}が行われる準備は既に済んでいる。

ここで、エンジュの身は互いの約定のもと、西へと引き渡されるのだ。

鼓動が速くなる。

「ここへ」

壇上からふる声に、エンジュは顔をあげた。

上から、壯年の男がまっすぐに彼女たちを見つめている。

神官、それも最高位に近い聖職者だ。

襟を立てた白い上着に、紫のマントを左片側に掛けていた。留め具は、幾つも連ねられた黄水晶。

青みがかつた銀髪は短く、額の広い顔は白い。中央にはお決まりのように、花のような紋が咲いている。

瞳は熟れた葡萄のような、赤。

とがつた鼻が、彼のひく血の高貴さを示していた。

『神の御子』である。

とつそに、エンジュは皇宮で出会つた四宮への不快感がよみがえつたが、神殿では『白髪赤目』は特別ではなかつたと思い直す。

「お待ちしていた」

道中無事で何より、としゃがれた声で、男は言った。
神居^{カムイ}のシキ様だ、とエンジュの耳元で兄が告げる。

神居とは、第3位聖職者の称号である。

その印である、白い杖。

杖をにぎる左手首に、複雑な紋の入った金の環がはめられているのを、エンジュは見た。

金環は、額と同じ模様をくりかえし描いている。

雨音はエンジュの手をひいて、段を上った。

シキの隣には、もうひとり男が立つており、その白い騎士の衣装から、西家の者であるだろうと思われた。

シキは滑らかに、2人に話しかける。

「夜は昼よりも大きい。何もかも、大きく見せてくれる。
ここは小さな聖堂だが、こうして夜になると、どういうわけか、天井も高く見える。

どうして、われわれは、こんな大空間をねつ造しようとするのか

「ほかの建物にも、大規模なものはあります。皇宮もしかり、ですわ」

エンジュは答えた。

「支配者の威、ですね」

雨音の言葉に、シキは肯く。

「そう、われわれの文化、思想、哲学には、しかし建物の天井を高くする意味など、もともとない。なぜなら、われわれの天井は、空だった」

「空はどこにでもありますわ」

「われわれには、外と内の明確な区別が存在する。その区別を望んでいる。外は悪、内は善。だからこそ、しっかりと都市の周囲を城壁で囲い、厚い壁がしっかりと外気を遮断する。そのかわり、自分たちの領地を少しでも広げるために、天井を高くしてきたのでない

かな、「

「師父。」このよつな場で問答は、お止めください」

階段になつた一段低い場所には、二十名ほどだらうか、年若い神官たちが列をなしていた。

身を乗り出すようにして、ひとりの青年神官が、渋面を作つている。

彼もまた、銀髪に、血の色の瞳をしていた。

ここに整列しているのは、列柱に控えた神官たちよりも明らかに高位なのだろう。

紫の衣は金糸で縫いとられ、白い被りものをしている。
皆、比較的若い。

「分かつてある、進行させねばよこのであらう」

諫める声に、シキは曖昧に微笑む。

年若い神官たちを宥めるかのように。

シキが手を振ると、杖の先に付けられている玉が重なり、しゃりしゃり鳴つた。

「では、皆揃つたところでの、婚約の儀を執り行つとじよつ。」タイハク殿、

そう促され、黙つたままだつた騎士は進み出で、口を開いた。

西の訛りだ。

「西よりご挨拶申し上げる、タイハク・エル・ハクです」

エルは、『真の』といつ古い言葉。

ハクは、西方を統治する西家白家のこと。

彼の名は、十一世家の生まれであることを示している。

「お田にかかりて光栄です」

雨音が軽くお辞儀をした。

エンジュは田で、ソウセツの姿を捜す。だが、壇上には他に誰もいない。

「白桜のソウセツの代理として参りました」「タイハクはエンジュの口悪いを制するよう」と、言った。
ソウセツの伯父にあたるという彼は、齡60にしていかとかという外見で、立派な口髭をたくわえている。左肩には、タペストリーと同じ黒金の12の突起がついた星が輝いていた。
じつに向けられた眼差しは凍てつくようで、吹雪の夜を思わせる。

「彼は？」
「領地にて、雪に留められておりますれば」

「ご寛恕願いたい。

よびみなく兄に謝意が述べられる。ただし、瞳は搖るのもしない。前もつて準備されていたやりとりのようと思えた。
雨音は聞き、気にしないといつ態度を示したが、エンジュは釈然としない。

北西部では、深雪は通年だ。
ならば、早めに領地を出ることもできたはずだ。
会いたくない、ってことなのだらうか……。
エンジュは口の中で小さく呟く。

「では双方、書類へのサインを」「
シキは、エンジュの思考を遮るように手をやさぐる。
背後から書記官があらわれる。
帝の勅使であることを示す黄の記章を身に付けたその男が運んで
きたのは、盆に載せられた紙。

長々とした文章が紅い文字で綴られている。
使われているのは、どうやら帝古語らしい。

帝国ではすでに使う者もいない、滅びた言語だ。

青家の娘として、教養の範囲で読み方を習つたが、複雑な上に長い文になると、読み下すのに時間がかかる。

「署名を、」

ゆっくり眺める時間さえ、「えられないらしい。

エンジュは書記官に筆を握られ、うながされるまま名前を記した。

すでに、父である青龍の署名は済んでいた。

書類は、そのままタイハクの元へ渡る。

そして、代理としての署名を済むと、シキの前に紙面が広げ直される。

彼は、盆の上に置かれた誓文を静かに見つめ、一度眼を開じて、文字にふ、と生氣を送る。

ちりぢりと、字に紅くほのおが走り光をあげ、やがて消えた。名によつて、紙面での誓いに効力をもたせる術だ。

神聖な誓い。

異力が薄れゆく現在では、ごく一部の神官にしか使うことができないという幻の術もある。

エンジュにとつては、初めて見るものだつた。

凝視していたのが分かつたらしく。

シキは少し濁つた目を上げ、面白そうに瞬かせた。

書類を確認した書記官が、段の前へ進み出た。

眼下へ誓文を掲げる。

「皆の前で誓いはなされた。西と東に幸いなれ！」

居並ぶ人々が同様に、唱和する声が響いた。

「東と西に！」

「西と東に！」

エンジュはタイハクに向き直り、膝を一度曲げた。
「エンジュ・エル・セイです。お招きに感謝します」

小ちな雪のつぶてが、風になびられて窓をたたく。厚く垂れこめた雲は、光の一筋も通さず、白と灰色の景色が広がつてゐる。

道行く人はなく、ここアサノの街は死んだよつて息をひそめている。

「吹雪が？」

辺境の冬には珍しくない光景、けれど帝都育ちの者にとっては、この鬱々とした景観は初めて接するものに違いない。先ほどから窓の外ばかりを眺めている彼女に、シキは珍しいのか、と訊いた。

暖炉では薪がはぜ、部屋を芯からあたためている。

長椅子に座つたまま客人は、窓辺に立つ少女を見た。

「館に庭をつくらないはずです」

エンジュは、ぽつりとそう返した。

「う吹雪いでは、庭に手を入れるどころではないでしょう、と。シキが彼女の滞在するこの館を訪ねたのは、先刻だ。

街路に面した庭のない邸宅は、頑健で、街の中心にありながら人々の猥雑な暮らしとは無縁である。

この街で知らぬ者はない。剣を携えた兵士が昼も夜もなく、門をかためる、この物々しくも壯麗な館に、一体誰が逗留しているのかを。

「兄上はどうされた？」
「すでに発ちました」
「名残りを惜しんでおられるか」
「いいえ」

別れはすませました、とエンジュは答え、振り返る。

雨音とリードは、雪の止んだ明け方、帰路についた。

見送ったのも、この窓辺だ。

『次の教会の鐘が鳴つたら、北を向いておくれ。僕もお前に手を振るから』

そう言つて、見送りに出ようとしたエンジュを邸に留めた。

ここは帝都とは別世界だ。

冬といえば、雪がちらつく程度である都に対し、北部の入口とはいえ山間に位置するアサノには膝あたりまで積雪することも珍しくないといふ。

エンジュは窓の外から目を轉じた。

「それに、兄君は側近を残してくれています」

「その青年か、」

理深です、とエンジュは頷いた。

シキの目が、戸口の脇に立つ猫背の青年をちらりと見た。理深は、瞳を伏せたまま一礼する。

自らの代わりに、と兄が置いていった理深は、言つなれば『貸し与えられた側近』である。

西における青公女代行をおこなう権利を認められてくる。

「大陸東部、ガラシヤだな」

確認するようにシキが言つた。

まとう風が違う。

エンジュが同意した。

「彼の祖母が、ガラシヤ公国の貴族です」

目新しいことの好きな兄は、選ぶ友人や従者も、その傾向にあつた。理深は、鎖国政策をとり続けてきた帝国が、唯一独占貿易を許してきた異国ガラシヤで、生まれ育つた外交官の息子である。クオータである彼は、兄の好みに適つたのだろう。その外見、亞麻色に近い髪によつて。

シキは、そうかと頷き、話題を変えた。

「今日そなたを訪ねたのは、挨拶をするためでな」

近日中にはここを発つ予定だ、といふ。

シキは、ここからずっと北部に入った聖都に居住している。建国の聖地であり、神殿の長である『聞こえの大君』がいます聖山と神殿がある。

シキ自身は北西の管轄を任せられているものの、中央神殿を離れることは殆どないと語った。

ソウセツとのこの婚約が、神殿でもどれほどの意味を持つのか、エンジューはまやまと理解する。

「しかし、領地の采配には吾も力を貸そう」
そなたの兄との約束だったゆえ。

領地ということのは、エンジューの如きよつて治められることになったこの地のことである。

中心はこのアサノ、その近隣に3つの村を擁する拝領地だ。

アサノ自体は小さい街だったが、西への重要な交通の拠点となるえる。

帝都を発つ際に、父の名の下、切り与えられた青家の飛び地だ。

今までエンジューには、長く住むわけではないこの土地が自分の中になると聞いても、たいして感慨もわかなかった。最後までエンジュー個人の領地にこだわったのは、兄である。

父君は当初「政治にまみ」と持ち込むとは、「と兄を叱責したらしいが、エンジューの支度金や侍女を領内で賄うことと条件に、アサノを青家から切り離すこととに同意した。

勿論エンジュはこのまま西へ向かい、今まで通り、領主は不在となる。

実際の行政は、現地役人と議会が運営するだろう。

ただ、高位神官の助力を得るということがどれほど重いことなのか、強い異能を尊ぶこの帝国に育つた者としてエンジュに分からぬではなかつた。

戸惑う彼女に、シキは紅い目を瞬かせ、穏やかに言葉を継いだ。

「何も、そなたばかりの為ではない。アサノの神殿の守りは、もう老齢でな」

新しく神官を派遣せねばならぬのよ。

目線をエンジュから、扉の側に並んだ3人の神官たちに転じる。シキの供である、弟子たちだ。

ひとりは白髪赤目の女性で、後の2人は黒髪黒瞳の男性である。シキは、はてと首を傾げた。

「そういえば、オウリはどうした?」

「……師父が謹慎を申しつけられましたわ、記憶にございませんの?」

打てば響くように、3人の真ん中から凜とした声が返つた。

女神官だ。

じつとシキを見つめるその赤目は、非難の色を宿しているようにも思えた。

「おお、そうだ。そうだった」

忘れておつたわ、とシキは眉をあげた。

女は、ため息をつく。

「師父……それは」

「ならば、ここにおらぬあやつで決定だな、コトハエ?」

いつもいつもオウリが吾をせつづいて、うるさくてかなわん。

同意を求められた女神官は、苦笑いで応じ、残る2人の神官も控

えめに賛同した。

「どうやうじのよつな余話は、いつものことであるじう。

しばりくしてシキは、エンジュに視線を戻した。

「時に… 皇宮の様子はいかがかな？」

「皇宮ですか」

「皇子が戻つたようだ」

神殿から。

シキの目は穏やかながら、内心を決して悟らせない。

「四富殿下のことでしょうが」

「北西の神殿は、吾の管轄なれば」

警戒しながら尋ねるエンジュに、シキは肯定した。政教の分離はむろん心得ている、とつけ加えられる。

しかし、中央の動向を窺つていいことは否定するものではない。

「南部がついておる。彼は有力な候補だ」

そなたの姉も。

まっすぐにエンジュに据えられているその瞳は、紅く輝いている。シキが、どのような姿勢であるのかは、推し量ることはできなかつた。

カムイ
神居であれば、神殿の動きも熟知しているだろう。エンジュは思わず尋ねたい衝動に駆られたが、しかし問う言葉は出てこなかつた。

今ここで、直接四富のことを質して、はたして正確な情報を教えてくれるだろうか。

だが、これが千載一遇の好機であることも否定できない。

青家や兄君のために。

どうにかして、有用な情報を聞き出すことができないかと真剣に頭を巡らせるエンジュだったが、しかしその思考は相手の咳きによ

つて途切れた。

「…無論、…には劣るが」

「え、」

「その右手は、あの方か…」「シキの指が、エンジュの手の甲に触れている。皇宮で出会った女性が、触れた場所だ。

唐突に、脳裏に声が響く。

『力になつてさしあげようと思つて…』

精靈が集うほどの異能。

額に描かれた赤い紋様。

エンジュはぞつとしながら、あの女が神殿関係者だとひらめいた。

「…皇宮の、私が出会った方はどなたなのですか？」

「まだ知らぬほうがよい」

シキの返答はそつけないものだった。

だが、次に問われた質問にエンジュは意味が分からず、沈黙する。

「あなたの望みは？西か、中央か」

エンジュは、望んでここへ来たわけではない。家のために、父と兄のためにやつてきたのだ。

意図を悟つて、ゆっくりと口を開く。

「…中央を」

「その言葉、ゆめ忘るるな」

エンジュを見つめ、シキは紅い目で念を押した。

の方は気まぐれで信用ならぬが、と彼は続ける。

「吾も助力は惜しまん」

彼女は裸のまま、シーツの波にうもれた。

「…タルヒ」

名を呼ばれて彼女はゆっくじと半身を起こす。
うねる長い黒髪が、端正な彼女の顔を縁どっている。

「ああ、タルヒ。愛している」

若い男はほつそりした裸身にすがりつき、熱心に言い募った。
「会いたかったよ。皇宮での噂を聞いて、ぼくがどんなに心を痛めてたか」

「ジウ、」

彼女は背を向けたまま、乱れた髪を横に流した。

男は彼女の首筋に幾度も口づけてゆく。

なされるがままになりながら、タルヒは冷えた頭で考えた。

この男、ジウとは長い付き合いではない。

特別な相手でもなかつたが、今はそう思わせる必要がある。

彼は5つある世襲王家のひとつ、桐の宮の次男でまだ15の少年だ。

青家の娘を母に持つ王族の少年。血縁上では、彼女の従姉弟にあたる。

父、青龍の身辺を探るのにつづつけの、駒。

「どんな噂をお聞きに、」

「君が四宮に利用されてる、つて噂さ」

「利用されてる?..」

「君が、あの皇子を愛してるはずないじゃないか。」

おおかた、紅派の命令で四富に近づいたんだる。南部は君を、皇子を取り込むための道具に使つてゐる。利用されてるんだ」

タルヒはジウの顔をまじまじと見た。

彼の口から、そんなことを聞くとは思わなかつた。

「分からぬわ」

四富を取り込むつて、どうこつ意味なの。

「意味つて……別に」

彼は強引に唇をかさねると、そのまま彼女の体を抱きよせてロビンを深めた。

熱い息。

熱い身体。

それなのに、タルヒの芯は冷えていくばかりだ。

はたして、それは少年には伝わつてはいないようだつた。

「ああ、タルヒ。

いつになつたら、ぼくたちの関係はおおやけにできるだろ? ナルミヤが男児さえ産めば……帝位を正統な血統に」

ジウは熱くひといきに言つた。

おそらく彼の父富か兄王が、2人の関係を知ればただでは済むまい。

タルヒは、笑いをこらえる。

あの秘密主義の父、青龍も、こんなところでの野心を潰されていふとは思つまい。

青家へ出入りできず、情報に不足している以上、ジウにはまだ役に立つてもらわなくてはならない。

そのためにも、しばらくは彼を恋に惑わせておく必要がある。

タルヒはジウの類に、ねだるようになり唇をよせた。

「ね、ジウ。正統な血統ってどういうこと?」

「四富には権利はないってことさ。父上がおっしゃっていた」

「……そう

その話は彼女も聞いたことがあった。

かつて帝は、即位と同時に青家本家から妃を迎えたことがある。現在の皇后とは別の女性だ。

当時は国首たる青家が権力を握つており、融和のために意図された政略結婚であった。

沈みゆく帝国。

熟れた果実が内側から腐つていいくように、中央政治は腐敗がすすんでいた。

実権をもたぬ帝と、政権を担う青家の出である蒼妃。

結婚当初の2人は仲睦まじく、その間に生まれた四富^{ハシミヤ}が立太子し帝位につくことだろうと、誰もが信じた。

ところがその5年後、事態は急変する。

紅派と呼ばれる南部中小貴族たちが、変革のすすまぬ国政に不満を爆発させ、いっせいに反旗をひるがえしたのである。事件はそのとき起こった。

過去どんな政局にも代々、沈黙を守つてきた帝が政権を掌握し、国首を幽閉したのである。

まもなく国首はその座を追われて反逆罪に問われ、一族は連座のうえ領地の大半を失つた。

政権の奉還直後、混乱の最中、初富^{ハシミヤ}が太子に立てられた。

身分の劣る妾妃から生まれた、第一皇子である。

父帝の強力な後押しがあつたと言われるが、今となつては真相は闇の中。

蒼妃はほどなくして離宮に移り、毒を飲んで亡くなつたという。

「…それで？」

「彼女は、続きを促した。

「なんでも、蒼妃には愛人がいたらしい。四富は、その男の子だと。神殿が真実を知ってるだろ、過去をひもとき、未来を夢見るんだから」

「では、神殿に問い合わせれば殿下の素性もはつきりするところ？」

「あたりまえだよ！」

「四富は、皇統を引いていないって証明できるぞ」

「そう…でも」

「たとえ引いているとしても、ずいぶん薄い血だ。

血の濃さでは、ナルミヤの産む子にかなわない。それに、ぼくたちや。

父上は皇位自体に興味がないようだけど、兄上はどうかな。

神殿が四富を裏切れば、すなわち正統な血のもとへ皇位はかかるんだ」

帝には現在、四富の他に息子はない。

20年前太子の座にのぼつた初富も、長くはもたなかつた。

神殿の支持を失つて都を落ち、いまだ行方知れずのままだ。既に

死亡しているだろう。

四富が帝位に就かないとなれば、その選択肢は降嫁した皇女の子たちか、世襲王族に広がる。

宰相である青龍が何をしようとしているのか、見極めねばならぬい。

タルヒはスカートをはき、宝石をとめて上着をはおつた。

い。

急がねばならない。

寝台から、滑り降りる。

「ごめんなさいね、ジウ」

時間だわ。

人に会う約束なの。

タルヒは、まだ名残惜しそうな少年に口づけると、部屋の扉を開いた。

歩きながら考える。

誰か…、神殿とのつなぎを得る算段をつけねばならない。
高位で、容易にこちらになびく人物。

ジウとの関係は、もうすぐ終わるだろう。

これに、かたがつけ…

タルヒは口元をゆがめて、ふと、足をとめる。
肩がぶつかり、耳飾りが揺れた。

「どちらへ、姉上…」

弟の雨音だ。

彼は、タルヒの上気した頬とほどけた髪を見てとり、露骨に顔を
しかめた。

「次はどの男です？ 田も高いうちから邸に情人を招き入れるとは、
あいかわらずだな」

彼女はちょっと笑い、それから雨音の顔を懐かしげよつと見た。

「雨音。帰ってきたのね、」

タルヒは嬉しそうに背伸びして、弟に抱きつく。
それを乱暴に押し返して、彼は一步退いた。

「触らないでくれ」

「何を怒ってるの？ ジウと寝たこと、」

雨音は眉を寄せ、荒れ狂う感情に耐える表情で言つ。

「ジウと… 彼はあなたの従弟だろう、しかも、まだ子どもだ。姉上、一体何をお考えなのか。正氣にお戻りください。そして

「タルヒは何が可笑しいのか、ふふと笑い声をあげた。
「正気、ね。

もう戻れないやしないことぐらい、お前には分かっていると思つていたけれど? わたくしは、とっくに父も青家も捨てたのだから。だいたいお前は、あそこで何を手に入れようというの?」
父の眼にはお前など映つていらない。

一瞬、雨音が顔をゆがめたのを、タルヒは見た。

昔からこの異母弟が父の無関心を引き合いに出すたび、容易に傷ついていたことを彼女は知っていた。肩に羽織つた衣を、胸元に巻きなおす。

「わたくしのことば、いちいち口出しあるのはやめてひょうだい」

タルヒは、一度目を閉じた。そうすれば、揺れる感情を一時、遮断できる気がする。

目の前にいるのは、血を分けたただひとりの弟だ。
無理やり口を開き、ひときわ冷たい声を心がけた。

「母のように家の言いなりになつて、嫁がされるなんてまつぱら。わたくしは好きなところで、好きなようにふるまうわ」
シジュウの当主として。

雨音は、はたして憎しみのこもつた目で彼女を凝視した。

「あなたは自由です、姉上。父や僕からも」「ありがとう」

タルヒは微笑んだ。

微笑む姉を、いつそう怒りをこめて雨音が見つめる。

「エンジュは知らないでしょ、」

彼は、異母妹の名前を口にした。

「あなたのそのせいで、僕たちの妹まで貶められることになります。青家の公女としての責務を背負い、西へ向かつた憐れなエンジュが、もし、」

「そうね」

彼女はくすり、と笑う。

「良かつたわ、早く青家を離れていて。きっと、あのままいたら西へ嫁ぐのはわたくしだったでしょうねから」

「あなたという人は！」

「それからね、リドに言つておいてくれるかしら」

タルヒは怒声をものともせず、美しい口もとをひきあげた。

「コウヒお姉さまのことば、もうじばらく放つておいてあげてちょうどいい、と。だってね、まだまだ役に立つてもらわなくちゃならないわ、紅派のために」

「汚らわしい。軽蔑しますよ、姉上」

雨音は吐き捨てる。

タルヒは、ただ笑つただけだった。

ほつれた髪をゆらして、彼の横を通り過ぎる。雨音がぎゅっと唇をかみしめているのが、気配で分かつた。

闇の向ひに、神の庭がある。

子どもだった頃、よく寝物語に乳母から聞かされた。

聖歌がううううと響き、白い光に満ちあふれた庭園で花が咲き乱れ、そこでは精霊たちが手招きする。

夜半に、ふと田が覚めると廊下に煌々と灯りがともっていた。彼は光にすいよせられるように、部屋を出た。

どこまでもつづく光の白い回廊。

いくつもいくつも角を曲がり、その部屋へとたどり着く。遠く近い、白い光のなかに、女と見知らぬ若い男がいた。ふたりは抱き合っている。たくさんの中の白い布の中で、白い腕をのばして。

「これは神さまの庭？」

ふたりには彼の呼びかけが聞こえていないようで、お互の耳のそばでひそやかな、吐息まじりの笑い声をあげている。これが神の御元に集う精霊なのか、と少年はぼんやりと見とれていた。しかし、どこかおかしい。

ああ、と田の前のふたりが裸身だと気づき、彼は悲鳴をあげた。息のつづくかぎり、金切り声で助けをもとめた。

ふたりの男女は彼の存在を認めて、すばやく離れる。

男はカーテンの影で、あたふたとズボンをはいた。

『やめて！』と、女が押し殺した声で言った。

『やめなさい！おかあさまよ、おかあさまが分からぬの、』途端に、裸身の女が母の顔になつた。鬼のような形相。

ぱりん、と何かが壊れる音がした。

白磁の香炉だ。

ゆれる視界。

強い異能の波動が、恐怖を呼び起す。

誰。

母の隣にいる男は、誰だ。

幾つもの硝子が割れる音が響く。

窓がきしんだ。

こちらへ伸ばされる幾つもの手。

違う、違う。

おかあさまじや、無い！

少年はまぶしい光に背をむけて、暗がりに身を翻す。

『つかまえて！』

と母の顔をした女が叫んだ。

知らぬ男が自分を追いかけてくる。

彼は必死に、逃げた。回廊を走り続けた。

嫌だ！

追いつかれる！！

すぐ先にひときわ暗い先が見えた。

と唐突に、ふわりと足が宙に浮く感覚が雨音をつつむ。

ああ、ここはやはり神さまの庭だったのだ。

僕の夢なのだ。

静かで何か満たされた気持ちになりながら、彼は黒いベールにつまれて、神に身体をゆだねた。

しかし、その一瞬ののち、頭の真ん中にクイを打ち込まれたような激痛が走る。

その苦しみから逃れようと、身をよじってのたうち回った。

血管のなかを、硝子の破片が流れているような痛みが広がつた。ついで、背中にしびれるような感覚が走る。

いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい

助けて！

助けて、父君！

痛みの嵐が去ったあと、彼は寝台の真ん中に、うすあざられた魚のようにぐつたりしていた。

ああ、これは……夢？

は、と息をのむ。

突然、何の予告もなしに明けた間に、雨音は軽いめまいを覚えた。額と背筋がじっとりとぬれていいく。

汗だ。

袖口で顔をぬぐい、頭を振り起しすと長く立てていた膝がぞしぞしと痛んだ。

どうやら祈りながら、寝てしまつていたようだ。

「夢、か……」

おかしな夢だった。まるで誰かの記憶のようないや、思い違ひだらう。

雨音は首を振り、大窓をふり仰ぐ。

彼の眼前には、階段がのびていた。

その先には、祭壇がある。光の聖所。祈りの場である。

皇宮のおぐつきに置かれた、日の神をまつる小神殿。

彼はゆっくりと視線を石床に戻す。わずかな動きにしびれた左足

に痛みが走り、顔が歪んだ。

脳裏に浮かぶのは、姉の顔だ。

どうすれば姉をとめられるのだ？

昔はあんな風ではなかつたと思つ。

記憶にあるタルヒは、いつも田を伏せるようにして、小さな声で喋る少女だった。

いや、と雨音は思いかえす。

違う。

あの日だ。エンジューと初めて会つた日。
あのときも、タルヒは今日と同じ田をしていた。壊れそうなほど強く、雨音の手を握りしめて。

『今日からこれが、お前たちの妹だ。挨拶なさい』
父はそう促した。

『さあ、タルヒ』

その後、一体姉はなんと答えたのだったか…。

かつつか、と壇上から硬い音が響いた。

ふと雨音が顔をあげると、目の前に聖杖を持つ女が階段を下りてくることだった。

相手が誰か理解し、居住まいをただす。

「アサヒナ様」

「じきげんよう、青家の公子」

高いところから見下ろす格好で、雨音に呟つ。

雨音はかしこまつて、深く頭を下げた。

床にさらりと、女の衣が広がる。

高位神官の衣だ。

水晶が幾重にも連ねられた額飾りをつけ、裾を長く引く肩方に流した紫衣。

たしか齡も50を重ねたはずだが、彼女の髪は黒々と豊かで、年

齡を感じさせるものではない。

「奥からそなたが祈るのが、見えました」と、アサヒナは言った。彼女は、皇宮における神殿の最高位『御言持ち』で、帝の実姉である。

先ほどから何度も声をかけたのだ、といつ。

気付かなかつたのか、と問う彼女に「考え事をしていたので…、申し訳ありません」と答えながら、気付かなければよかつた、と雨音は思った。或いは、さつと逃げ出せば良かつた、と。

雨音の内心には氣付かなこようで、アサヒナは近況を尋ねる。

「旅はいかがでしたか」

「姉にも同じことを聞かれました」

彼は、微妙に返事をそらせた。瞳をふせ、感情を沈める。

「対処が迅速だこと」

アサヒナはゆっくりとした口調で返す。抑揚のない、しかし歯切れの良い低い声だった。

そういえば、と彼女はふいに微笑んだ。

「タルヒはこちらに来ているのね」

派手な交際は相変わらずかしら。

雨音は、とつさに表情を隠そうとする。

「桐の富の、ジウと関係があるとか…」

アサヒナはたんたんと続ける。

「そなたは、それで異母姉を許せない、」

「皇姉殿下は、僕の心の中が読めるようですね」

雨音は表情をこわばらせ、唸るように言葉をつないだ。瞬きもできない。

彼女に弱みを見せれば、喰われてしまう。それを雨音は知つてい

た。

彼は、昔からアサヒナが苦手だった。穏やかな語り口でありながら、力強く隠したいことを暴き出してしまつ。草むらから首元を狙う、獰猛な獣と同じじ。』

「心なんものはありませんし、わたくしは皇女ではありません」とうの昔に皇籍は返上したのだし、と付け加える。

「まだ、質問に答えてもらつていないわ。旅はいかがでした？そなたの妹に挨拶したけれど」

あなたとは違ひ意味で、可愛かったわ。

雨音はその言葉に、表情を変えた。面に激情を浮かべ、勢いのまま立ち上がる。

「何を言った、妹に

「とりたてては何も

不満そうね。

歌つようには彼女は返す。

「なあに、お前の力でわたくしに対抗するところのアサヒナは可笑しそうに『雨音』と真名を口にする。

ただ、それだけだった。

だが。

息が止まる。

呼吸が、できない。

背筋をはい上る悪寒。脇をすべる冷たい汗。雨音は震えを止めるのに、必死だった。

純粹な恐怖が、彼を襲つ。

真名の呪だ。

「わたくしの名を教えてあげます。朝日那よ。さあ、おひしゃー、
それとも。
呼べないかしら。

じぶしを握りしめ感情に耐える爾音を見て、彼女は急に興がさめ
たようだった。

「つまらない子。そんなところもあれにて、せっくじだわ。昔を思
い出させる」

だから、わたくしはそなたが嫌い。

アサヒナは唇を歪めた。

父のことだらう、と爾音は直觀する。爾音を見るにつけて若く頃に
戻ったようだと、父を知る人びとは口をそろえるからだ。

アサヒナの周りで彼女の感情を察して、ちりちり光がはねるのが
見える。長い髪を持ちあげ、風がゆれた。精靈が集まっているのが
分かる。

「思い上がらないことね。そなたの生きるを許していくのは、ただ
かつての報いのため。

そう叫ぶ、吹雪のよつた冷たい声。

「それから、一つ朗報よ」
アサヒナは声をじつとう落とし、告げた。
ナルミヤが懷妊したわ と。

お待ちください、といつ老侍従の制止を振り切って扉に手をかけた。

「父君のじ意向も確かめずに、勝手をなさる」とは「さがれ」

もとより、ここで留められることは想定内だ。
しかし、引き下がるわけにはいかない。

父に会って、質したいことがあった。

強引に命じると、侍従は渋々ながら廊下の隅へと後ずさる。その姿を目で追っていた雨音は、内側から扉がひらく音にあわてて前に向き直り、室内の明るさに驚かされた。

「戻ったか」

父の執務室は、いつ来ても慣れない。

部屋の片側は中庭に向いて、大きく開かれていた大窓だ。

透明度の高い色ガラスをくみあわせた硝子窓の黄金の光のなかで、父が立っていた。

ゆつくりこちらを振り向いた相貌は美しく、瞳は猛禽を思わせる鋭さ。

この光の角度。会う者への印象。

すべて計算づくだ。父らしいことだ、と雨音は部屋に入りながら、考えた。

「どうした、早かつたではないか」

神殿で何か、耳にしたか。

かけられた言葉に、雨音はかつとなつた。

父は彼がここへ戻つてくることを予期していたのだ。

「どうして黙つていたのですか」

ならばその理由も、おおよそ察しているだろ。雨音は、父の前まで寄ると傍の机に手のひらを叩きつけた。

「義母上が子を孕んでいふところのは本当ですか」

「ああ」

「なぜ…」

喉元から、うめくような声がもれた。

「聞かなかつたのは、お前だ。生まれる子が女であれば、皇后にも立てる有力な血よ」

男の可能性を、青龍は示唆しなかつた。エンジューは、と代わりに続ける。

「あれは庶子。次の子の邪魔にはなつても、役には立たん」

ゆえに、外へ出した。

青龍は目を細めた。笑つている。

「父上、」

雨音は唇をかみしめた。

父がエンジューの母親に執心するあまり、雨音の母は嫉妬に狂い、死んだ。結局その婚姻は、神殿に認められなかつた。

その娘を平然と、庶子などと口にする父が信じられなかつた。

エンジューに流れるのは、あおき血。青家と黒家の正嫡なのだ。

「このまま西の分家と結婚させ、この最も純粹なる血が、汚れまみれるのを黙つてみていいと?」

「仕方あるまい」

雨音が声をあらげて迫つても、青龍に動搖する素振りはかけらも見られなかつた。

「父上はホンジュを捨て駒になさるのか、」

「役に立つのだから、あれも本望だろ？」「

「役に立つ？エンジュは青家の、僕たちのために

目の前が、真っ赤に染まつた気がした。

父が語るのは、エンジュがどうなると仕方ないと云ふことか。まだ生まれてもいない赤子のために、娘を政略の道具とする、と。

「…ホンジュは、死ぬかもしれないのに」

「そうなれば、あれの命運だつたということだ。そなた…同情か？」

漆黒の瞳がす、と細められるのを見て、雨音は思わず息をのんだ。国政を背負い、困難な政局をぐぐりぬけてきた父。相手は、長くこの国を導いてきた伯だった。

背負ひ重さが、違ひ。

「雨音」

「はい」

だからひつして静かに名前を呼ばれれば、もつ雨音に抗ひすべはない。

口を開いた息子に、父は至極冷静に告げた。

「言つたはずだ。これは、決まったことだと」

本人の意思も、相手の素性も関係ない。

今に力は尽きると、父は言つた。「帝国に希望をたくすだけの力は、もはやない。我らの継いだ名も位も、一時の幻想に過ぎない」

帝国は、大海に突き出した半島にある。

長い鎖国は、国をせびらせるに留まらず、後退させた。

帝への政権委譲がかなつて、まだ20年。疲弊した領土には、再び長い混乱を支える余裕もない。将来の安定のためにも当座をしぶぐ物資を手に入れるためにも、足元を見られることなく強い隣国と、このあたりで手を打つておきたい。

「ナルミヤの産む子は、遠からず、我らの切り札になる」

うつくしい発音。「そのための、布石だ」

必要な犠牲なのだ、と青龍は穏やかに言い聞かせた。

雨音も父の正しさを理解していないわけではない。帝国をこえた西方には肥えた平野が広がり、巨大な都市もいくつある。青家嫡子としてこの国の窮状を肌で感じている。多くの民が、餓え、患い、ぎりぎりの生活を送りながら、ほそぼそと生きつないでいる。

「だからと言つて！」

「もはや、お前の嗜好の問題ではない。十一西家の条件だった。我らが皇位を握るときには、相応の援助をよこすと」

言ひだしたのは、十一西家の方だといつ。

しかし雨音には、雪の中ひとりアサノに残つた妹が哀れだつた。

「僕は、いつも性急に事を運ぶ必要はないと思ひます。文書のみ交わし、西の出方を見定めて……」

雪はすぐ側までせまつてゐる。まだ、今なら間に合ひ。呼び戻せる。

そんな息子の感情を察したのか、無表情だった青龍の整つた顔にある感情が浮かんだ。漆黒の瞳に冷たく燃える光の鋭さに、雨音は胸を突かれる。

それは紛れもなく、侮蔑だった。

「父上」

「愚かしい。少しあは成長したかと思つていたが」

青龍はゆつたりと呟いた。これ以上顔も見たくないといった様子で、背を向ける。少し、息をつく間がある。それは嘲笑だと、雨音は分かつた。

「お前は妹の心配か。そんな余裕はないはずだ」

下がれ、と追いやるように手を振られた。

最後通告。もつこれ以上、父は彼の言葉に耳を傾けるつもりがないのだ。

違ひ、やうじやない、と兩音は訴えよつとしたが、たっぷり1呼吸ほど立ちつくしたあと、手を握りしめて踵を返す。その行動が身に染みついている事だけが、今だけは酷く疎ましかった。

『元気でいますか』

今日は晴れて風もなく、空はまさしく奇跡のような青一色。遠く海に浮かぶ島々は、白くかすみがかっている。

薄ぐらい通廊を抜けると、次の階層へつながる階段に出た。

彩白の城塞都市。

元からある斜面を利用して立てられた山城ならではの、高低差の大きい造りだ。

息を切らしながら階段を上る途中で、エンジュは外を眺めた。

きらきら輝く水面。湾といきかう船。本来は白いはずの城の屋根は、日差しをはじいて金色に見える。そして眼下に小さな市街が続く。

エンジュは足をとめ、新しい手紙を開いた。右上がりに跳ね上げた癖のある筆跡に、苦笑が滲む。

イトからだ。

『昨日宮に戻り、四宮お兄様にお会いしました。皇后さまもお変わりない様子』

夏の休みに入り、寄宿学校から帰省したことが綴られている。皇宮では『夏入りの祝祭』が行われる準備に、せわしくしているのだといつ。

そう、とエンジュは顔を上げた。

皇宮で喧嘩をしたことも遠い昔のようだ。あれから半年にもなるのだ。

イトはいつも律義なほどの筆まめさで、エンジュに手紙をくれた。

帝都で流行りの髪飾り、人気の舞台役者、それから人の口にのぼる噂。父の妻であるナルミヤの懷妊を知ったのも、彼女からの手紙でだつた。

兄の雨音はといえば、学院へ戻るとの連絡を寄こしたきりしばらく、音信は途絶えている。

エンジュが暮らしどりなど、細々と書いて便りを出し、雨音は滅多に手紙をよこさない。たまに届く手紙の文面は、いつも何かを逡巡しているようでもどかしく、エンジュは兄の変心を疑わずにいられなかつた。

胸元へ手紙をたたんでしまいながら、階段の続きをのぼる。上階へ続く、らせん階段。

最上部に、エンジュの田指す部屋はある。

数十分もかけて、ようやくたどり着くと、きしむ扉を開ける。粗末な木の椅子と籠だけが置かれた部屋だ。石がむきだしの壁と床は、冷たい。

夏のはじめだというのに、一つしかない小窓はびょうびょう風を打ちつけ、うす寒い。

エンジュは椅子に腰かけ、いつものように籠から布と針を取り出した。

ここでは日々に大きな変化はない。
やらなければならないこともなければ、求められることもまた、なかつた。

その代わりに、身の周りを整えてくれる者はいない。
到着後1週間で、ついてきた人びとは、帝都へ送り返されたからだ。
「それが、君がここで生き延びる手段だ」
と、ソウセツはエンジュに言った。

膝上に刺しあげの図案を広げて、針を運ぶ。

縫物はここに来てから始めたことの一つだ。戦へ向かう男たちの無事を祈るしるとして、持たせるのだといふ。

ここに女たちは暇さえあれば、針を運んでいる。エンジューはいつの間にか、同じことをしている自分に苦笑が滲む。はじめは、ひとりで衣さえ着れなかつたのに、もう慣れたものだ。簡単なものであれば髪も自分で結える。

ソウセツとは、殆ど顔をあわせるることもない。評議院のメンバーである彼は、馬で半日かかる波白ハハケで会議に忙殺されてくる。

或いは、御殿にいる。当主・白虎のそばに。

それも彼の口から聞いたわけではない。

しつこく行方を問う彼女に、ソウセツの側仕えが半ばうんざりと言ひ放つた言葉である。

「仕事の邪魔をなさらない、それがお約束だつたとつかがつております」

朝、目が覚めると寝台をしきる御簾の向いにはもう、空っぽだ。なぜか不覚にも涙が溢れそうになつた。

不意に、ひときわ冷たい風が頬を掠めた。
ぱさり、と音がしてエンジューは顔をあげる。眼前の石床に白紙が落ちていた。

何気なしに、立ち上がりて紙を拾う。
それは、古い紙で折られた蝶だつた。
羽に、薄く茶色い模様が一つ、ついている。
いや、とエンジューは、息をのんだ。
模様ではない。

これは、 血だ。

『　　がい。… あの人には』

風に託された声が、脳裏に響く。言靈。

エンジュはとっさに手を振り払つた。紙の蝶は、静かに床に横たわつた。

ぞつとする。血をかけた呪。

誰が、と思いもう一度、紙に触れた。

耳をすませて集中したが、声は聞こえない。男だったのか、女だつたのか、それさえも分からぬ。

呼ばれるように、エンジュは壁に一つだけあいた小窓に近付く。遠くにけぶる水平線。あおい海原。波高く、うす晴れた空。雲間の日光を受けて、海の上に佇む白塔が、光を反射した。塔の影が、黒々とその手を伸ばしている。

ずいぶん古い塔だ。建築様式から、それが二八〇年ほど前のものだと分かる。今は使われない見張りの塔だ。

風が顔に打ちつけ、エンジュは手中の紙の蝶を握りしめた。

今は理解できる。

ここでは、帝国の榮華の欠片も残つていないので。かつて國の中核を担つた多くの騎士たちも、眞なる言葉も、信仰の証も。なにもない。

「エンジュ！」

呼ばれて振り返りながら、エンジュは一応、相手をたしなめた。

「そんな大きな声で呼ばなくとも聞こえています、理深リシン」

理深は恐縮した風に肩をすくめた。

「時間ですよ」

理深はエンジュを促した。

エンジュが袂から時計の鎖を引っ張りだすと、時刻は10時を過ぎようかといふことである。

忘れていた。

「ごめんなさい、もうこんな時間」

「ええ、ウキシロ様がお待ちです。歩きながら話します」

おいでくださいと彼は、先に階段を下りた。

エンジュはため息を押し殺す。

浮白は、白虎の正妻である。その名が示す通り、彼女自身も十一西家に名を連ねる家の出身。夫のクオンとは、はとこ同士だ。

エンジュは正直に言つて、浮白が苦手だった。彼女はどこかぶしつけところがあつて、まだ若いエンジュで遊んでいるようなところがあった。

「どうせ行つても、役にも立たないわ」

「エンジュ、」

とがめる表情と声を、エンジュは一つ頷いてかわした。

表で仕事をかかえる理深は、暇ではない。彼女を呼びに来るのが本来の仕事ではないのだ。

「分かっている。いいわ。話があるのでしょ、どうぞ」

嘆いても不満を口にしても、どうにもならない。それを悟るべからいには、エンジュもこの生活に馴染んでいた。

理深は、黙つて胸元から書状を出した。

エンジュは受取り、装飾過多の文章をうなりながら読み解く。

帝古語だ。

「新しい司式の任命が行われた……？」

「ええ。えらく重要人物のようですよ 会つてほしこうですね
書状の末尾には、神居たるシキのサインがある。

エンジュの領地アサノへ新しく赴任した神官を紹介する書状だ。

アサノはそれほど要地ではないし、聖地でも、まして巡礼路もない。
ただの地方都市だ。

神殿は小規模で、今まで高位の神官たちが赴任した例もない。

司式とは、領主裁判権さえ有する神殿の位階の一つだ。世俗における子伯とは同等の地位と、みなされる。

「司式つて…ずいぶん高位ね。なんで、そんな、」

「さあ…力添えをするというシキ様のお気持ちの表れじゃないです
か」

兄と交わしたという約束を聞かせたシキの顔を思い出す。
敵なのか味方なのか、どこまでが真実を言っているのか、判断が
つかなかつた。

赤くこぼりを射抜くような目が、唐突によみがえる。

「ま、うがつた見方をすれば、青龍様への挑戦ともこれましう。
あなたの領地ならば、青家ではありませんしね」

理深は、かつて父が自領から神官たちを追いだした件を持ちだした。
た。

青龍が紅派と激しく対立した際に、加担した赤神殿の派閥を青家の領地から追い払ったことは、エンジュも良く知っている。18年も昔の話だ。

赤神殿は、裁判官たる司式たちの牙城。

今になつて、青家に追撃の手を伸ばしてきたということだらうか。
それとも…。

エンジュは青公女という身分ながら、その身は西家の庇護下にあ

る。

「返事はどうしたらいい?」

「書くしかないでしょ?」

理深はそうきつぱり言いつけて、眉根をあげた。「なんて顔してるんです、エンジュ」

「だつて…」

途方に暮れて、エンジュは言葉を濁した。

見ず知らずの高位聖職者になど、どのように手紙を書けばいいのか分からぬ。

本当にただの挨拶なのか、何か意図があるのか、好意か挑戦か。書き方が分からぬ、理深」

帝古語を使えばいいのか、それともくずし文字でいいのか。相手への敬称はどうすればよいのか。

会うのか、会わないのか。

エンジュは迷った末、理深にこう告げた。

「ソウセツ様にうかがうわ。書きかたを間違えれば、父君の御名に傷がつくでしょう」

別にそれはいいのではないか、と理深には言えなかつた。

エンジュは父の意に反することを、極端に恐れ、嫌がる。そんなところは、兄の兩音とそっくりだ。

それにしてもソウセツとは。

それが理深を苛立たせた。エンジュの婚約者は、『仕事に干渉しないように』と初対面で約束させたよつた男である。

「お好きなように」

それでも、理深はこう答えた。

エンジュは顔を上げて彼を見返したものの、2人の相性を思い出したのか、何も言わない。

理深はここでは、青家の代理である。

兄から『貸し』『えられている側近』として、敬称を省く権利と共に西における青家代行の権利の行使を認められている。

口の悪いところのある白虎などは、理深を『公女の兄上殿』と呼んでいた。

ソウセツとは、利害だけでなく感情的にもぶつかることが多いようだ。

ようだ、というのは、エンジュが実際にその場を見たことがないからだ。

「何？」

「いいえ ただ」

エンジュは理深の視線を返す。

彼は吸った息を吐息に変えて、エンジュから受け取った手紙をしました。

「あなたがここで、無理をする』とはないので、『エンジュは眉を寄せたが、答えることは避けた。

オノセを思い出したのだ。

エンジュの教育係であった彼女は、ここで帝都風を押し通そうとして、ソウセツの側仕えたちと『ごとく対立、居られなくなつた。ソウセツの沈黙だけが、雄弁だった。

ここは西家だ。

青家の領地ではないし、今は国首の時代でもない。

帝都風など笑わせる、と。

そのことに、オノセは気付かなかつたのだろうか。だとしたら、致命的だ。

エンジュは婚約者というよりも、中央に対する西側の人質なのだから。

黙つたまま2人はきつかり30分後、御殿の門をくぐつた。

彩白の中核は、一山の南方の傾斜を利用してたてた半ば要塞のような建物群だ。

通称『蜂の巣』城と呼ばれる。

この城にはエンジュを含め、西家の人々がそれぞれの棟で生活している。

ゆるやかに繋がった家族のよつこ。

御殿とは、白虎の棟を指し示す。

エンジュが奥の間へ通されると、そこでは背の高い女性が、侍女たちにとりどりの布を運ばせているところだった。エンジュと理深に気付くと彼女は立ちあがり、侍女たちには続けるよつこ間に置いて、別室に招いた。

「わざわざ呼び立てて、すまなんだのう

「遅れて申し訳ありません」

エンジュは、言こと訳しなかった。

相手が、言葉を弄することを嫌うのを知っていたからである。白虎の正妻である浮白は口元を引き上げると、理深の役目をねぎらい、露台から広間へ誘つた。

理深は膝を折り、早々に退出していく。

案内された部屋では女たちが座つたまま、針を手に、めいめいお喋りに興じていた。

エンジュの姿を認めると、それぞれ立ち上がる。

「歸さま、『無沙汰しております』

エンジュは、膝を軽く折つた。

浮白が自分の左隣に席を用意し、エンジュにすすめると、作業はなじやかに再開した。

その広い部屋には、たくさんの中と糸であふれていた。

浮白が念押ししていたように、内々の声かけであったので、集まつた婦人たちは数こそ多くなかつたものの、それぞれが大きな布地の四方に分かれ、下地の図案にそつて針を器用に動かしている。巨大なタペストリーだ。

近々、隣国の王の即位20年を祝う式典がある。

この織物は、グルジムカの王太子へ嫁いだ西家の公女に贈られるのだという。

生地の厚さのためか、ひと針ひと針が重く、エングジュは未だにない針運びに苦戦しながら、刺繡を続けた。

「こちらには、もう慣れまして？」

正面に座る女がにこやかに、エングジュに尋ねる。

誰だつただろう。

白虎のところで会つたような気がするのだが、名前を思い出せなかつた。

明らかに異国の顔立ちだ。

戸惑うエングジュを見かねたのか、浮白が横から口をはさむ。

「そうじや。そなたがこちらへ来たばかりのときは、帰りたい」とよく癪癩を起して夫を困らせたものだつた。のう、ヴァルナ

「まあ、ひどいおつしやりよつですわ、ウキシロ様」

明るく彼女は応じる。

ああ、とエングジュは思ひだした。

彼女は、遠く大海の向こうにある島国からきたといふヴァルハナ・エルゲンヴァルトだ。

「だつて、コウは私が望めばいつでも、國に帰してやるつて言いま

したもの」

「ウカというのは、彼女の夫でサギ家当主の名だ。

白虎と並ぶ権威である評議院で要職をつとめている。

少年時代、白虎の弟であるサイカとソウセツと3人、たいそう仲が良かつたのだと聞いたことがある。

「あやつらしい言葉じやな」

口のうまじ口ウををして、浮白がため息をつく。

「それより、ウキシロ様。先程、衣合わせをなさつていたのでしょうか？良い品はありますて？」

ヴェルハナが熱心に尋ねると、浮白は首を振った。

「余り揃つてはおらぬ。そろそろ薄物の用意をせねばならぬが…。喪の用意を省けるだけありがたいと、思わねばならぬな」

苦々しく咳く彼女の言葉が、西家の現状を表している。

白虎の妹の羽鳥とエンジュ、2つの約定によつて結ばれた協定で西の国境線は守られている。戦は終わった。

一方で、数年来の激戦と多くの兵士たちの犠牲は、領土を著しく疲弊させている。

きらびやかな布をある余裕は今の西家にはなく、公家の面目を立てるためにも、貴重な財源となる布地や刺繡の中央への出荷は、供給を上回るスピードで進められている。

「美しい衣が、人殺しのための資金となつて戻つてくるのですわ。

私は耐えられません」

「ヴェルナ、それ以上は言つな」

浮白は、平和な海洋国家で育つた彼女の言葉を切つた。

エンジュは周囲の反物を眺めた。

そうだ。

今この場に置かれている布、ほどこされた染物、その全では高値で取引される。その利益で、ここの人々は兵士を養い、人殺しの道

具を購入するのだ。そのため、老いも若きも貴婦人から農民の娘に至るまで、女たちは皆機織りに精をだす。

浮白は息をつき、右隣の女性に話しかけた。

「ミオ、今年もクオンの夏至の衣をお願いできるだらうか」

ミオ、と呼ばれた女性は静かに顔を上げる。

伏せられた目、控えめな態度。

エンジュはこの女性を良く覚えていた。田虎の側仕えとして紹介されたのだが、それは本来の意味ではない。

眞口にこそ出さないが、彼女を白虎の妻として扱っていた。

普段は浮白にこる浮白の代わりに、彩白で白虎の世話をしているといつ。

浮白は穏やかに言葉を紡いだ。

西では、死者の弔いの祭りでもある夏至に、真新しい正装を妻が揃えるのが習わしなくなっている。どうやらその権利を彼女は、ミオに譲ろううといつらしこ。

「そなたが用意した衣は、彼によく映える」

「浮白様さえ、よろしければ」

とミオが答え、それきり会話の糸口が途切れたように、皆もくもくと針仕事に励んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6875y/>

黄昏をとどめて

2011年12月25日15時46分発行